

第十二條 即位ノ禮ハ別ニ定メタル式ニ依リ之ヲ行フ

第十三條 即位ノ禮ヲ行フ當日之ヲ皇靈殿、神殿ニ奉告セシム

第十四條 即位ノ禮訖リタルトキハ饗宴ヲ賜フ

第十五條 天皇即位ノ禮ヲ行ヒタルトキハ神宮、神武天皇、天智天皇及ビ前帝四世ノ山陵ニ謁ス

第四章 皇統譜登錄

第十六條 皇嗣踐祚、天皇即位、三后稱謂ニ關スル事項ハ圖書頭之ヲ皇統譜ニ登錄ス

第五章 改

元

第十七條 元號ハ別ニ之ヲ定メタル式ニ依リ賢所大前ニ於テ之ヲ撰定ス

第十八條 元號ヲ改メタルトキハ内閣總理大臣之ヲ公告ス

登極令草案

第一章 皇 嗣 踐 祚

第二章 三后〔尊稱〕稱謂

第三章 天 皇 卽 位

〔第四章〕 皇 后 正 位

〔第五章〕 皇 統 譜 登 錄

〔第六章〕 年 號 改 元

凡 十 八 〔三十三〕 條

第一章 皇 嗣 踐 祚

第一條 皇嗣踐祚ノ禮ハ大行天皇ノ喪ヲ發スル當日ニ於テ〔踐祚ス〕之ヲ行フ

第二條 皇嗣踐祚ノ禮ハ別ニ定メタル式ニ依リ之ヲ行フ

第三條 皇嗣踐祚スルトキハ掌典長ニ命ジ〔三箇日〕賢所ニ祭典ヲ〔行ハ〕〔修セ〕シム

第四條 皇嗣踐祚スルトキハ掌典長ニ命ジ〔之ヲ〕皇靈殿、神殿ニ奉告〔祭ヲ修〕セシム

第五條 皇嗣ノ踐祚ハ内閣總理大臣之ヲ公告シ其ノ儀式ニ關スル事項ハ宮内大臣之ヲ公告ス

第二章 三后〔尊稱〕稱〔謂〕

第六條 皇嗣踐祚スルトキハ皇嗣ノ妃ヲ稱シテ皇后トシ大行天皇ノ皇后ヲ稱シテ皇太后トシ皇

太后在ラバ之ヲ稱シテ太皇太后トス

第七條 三后ノ〔尊稱〕稱〔謂〕ハ宮内大臣之ヲ公告ス

第三章 天 皇 卽 位

第八條 〔天皇〕卽位ノ禮〔ハ〕諒闇終〔リタル〕〔ル〕トキ〔ハ〕〔ニ於テ〕之ヲ行フ

第九條 [天皇] 即位ノ禮ヲ行フ期日ヲ定ム。マリタルトキハ奉幣使ヲ神宮、神武天皇及天智天皇(及)[山陵並ニ]前帝四世ノ(山)近陵ニ發遣シ即位ノ由ヲ奉告セシム

第十條 [天皇] 即位ノ禮ヲ行フ期日ヲ定(マリタ)ムルトキハ内閣總理大臣之ヲ公告シ其ノ儀式ニ關スル事項ハ宮内大臣之ヲ公告ス

第十一條 [天皇] 即位ノ禮ヲ行フ期日ニ先チ(天皇神器)[賢所]ヲ奉ジテ京都ノ皇宮ニ(移)[遷御]ス

第十二條 [天皇] 即位ノ禮ハ別ニ定メタル式ニ依リ之ヲ行フ

第十三條 [天皇] 即位ノ禮ヲ行フ當日(之ヲ)[東京ニ於テ]皇靈殿、神殿ニ奉告[祭ヲ修]セシム

第十四條 [天皇] 即位ノ禮訖リタルトキハ饗宴ヲ賜フ

第十五條 天皇即位ノ禮ヲ行ヒタルトキハ神宮、神武天皇及天智天皇(及)[山陵並]前帝四世ノ(山)近陵ニ謁ス

第十六條 天皇賢所ヲ奉ジ東京ノ宮城ヲ遷御スルトキハ賢所大前ニ於テ御神樂ヲ奏ス

第四章 皇后正位

第十七條 皇后正位ノ禮ハ天皇即位ト同時ニ之ヲ行フ

第十八條 皇后正位ノ禮ヲ行フ期日並ニ其ノ儀式ニ關スル事項ハ宮内大臣之ヲ公告ス

第四章 皇統譜登錄

第十六[九]條 皇嗣踐祚、天皇即位、三后[尊稱]稱謂[皇后正位]ニ關スル事項ハ圖書頭之ヲ皇統譜ニ登錄ス

第五[六]章 年號改元

第二十條 天皇即位ノ禮ヲ行ヒタルトキハ年號ヲ改元ス

第十七[三十一]條 (元)[年]號ハ別ニ定メタル式ニ依リ賢所大前ニ於テ之ヲ撰定ス

第十八[二十三]條 (元)[年]號ヲ改(メ)[元シ]タルトキハ内閣總理大臣之ヲ公告ス

即位新式抄

神祇事務局權判事 福 羽 美 靜

古來天皇陛下即位ノ御儀式上古ハ上古ノ式アリ、中古ハ中古ノ式アリ、近古ハ近古ノ式アリ、今上陛下御即位ニ付キ大禮行ナハセラレシ場合、即チ舊儀ノアル所ト新ニ設ケラルベキ儀式トヲ併セテ行ナハセラルベク治定セリ。是ニ依テ其新式ヲ取調ブベキ旨命ヲ蒙リ、美靜謹デ之ヲ務メタリ。

儲テ上古ノ儀式ハ自カラ其時代ニ適當スル所ノ儀式、即チ天神地祇ヘ對セラレ重キ祭典ヲ行ナハセラレ、之ヲ以テ即位ノ大禮タル儀ヲ濟マサセラレ、萬民ノ其大儀ヲ賀シ奉リテ其時代ノ盛典ト定メラレ、此時代時々小沿革アリト雖モ、大禮神事ヲ以テ御儀式ノ樞要トセラレタルコトナリ。其後時代開クルニ從ヒ漢土ニ往來シ、萬事漢土ヲ之レ師トスルノ有様ナリシコトナリ。

其時ニ於テハ我遣唐使、留學生アリテ唐土ノ大禮ヲ傳ヘ、我國ノ質朴ノミニテハ彼ニ對シテ狭小ナレバ、努メテ儀式ヲ廣大ニスルノ要ヲ感ゼラレ、朝廷直チニ唐土ノ最上ナル禮式ヲ採セラレ、唐土諸屬國ノアルガ如キ卑屈ヲ用キズ、全ク唐土天子ノ禮ヲ我國連綿寶位ノ御即位ニ加ヘラレ、神事ハ神事ニシテ之ヲ行ナヒ、儀式ハ儀式ニシテ美ヲ加ヘ、善ヲ盡シ、海内ノ喜ビヲ爲スコトヲ開キ給ヒシコトナリ。即チ唐土用キル所ノ天子ノ禮服夫々用キサセラレタリ。之ニ依テ中古以來御即位其禮式ト神祇ヲ祭ル大嘗祭之ヲ御即位ノ式トナシテ行ヒシコト已ニ久シキハ朝廷禮儀ノ諸書ニ詳カナリ。其後近古武家政事ヲ執ルノ時代トナリテハ萬事簡略ニナリ、朝廷ノ儀式ニ就キ古來ノ盛ナル其形ヲ失ハザルマデノ御儀式トナリタリ。然リト雖モ 陛下ノ御服其他夫々結構ヲ盡シテ已ニ前帝ノ御即位マデ行ナヒ來リ給ヒタルコトナリ。然シテ此度御即位ノ事ハ舊來ノ儀式或ハ用キサセラル、コトアリ、又新ニ添ヘ給フコトアリ、相混ズル道理、其上今般ノ御儀式ハ維新日淺クシテ未ダ夫々ノ御儀式備ヘサセラルベキ時ニアラズ。且ツ關東ニ於テハ武家恭順ヲ盡スニヨリ事平ギタル姿アリナガラ、奥羽ニ於テハ未ダ殘餘ノ戰爭、其場合ノ時節ニシテ、關東ノ平定ヲ專ラ急ガセラレ、夫ニ付キ至急關東行幸ノ御儀トナリ、其御發輦前ニ御即位ノ大儀ヲ濟マセラルベシトノ御儀ニツキ、右儀式ニ當リ調進スベキ物品其月日アラズシテ止ムヲ得ズシテ略式ヲ用キサセラレ、其儀ハ後代ノ恒例ト遊バサセラレザル議決ナリ。

是ニ依テ之ヲ見レバ舊來ノ儀式中ヨリ撰ビテ至當ナリトシテ用キサセラレタル儀ト、又止ムヲ得ズシテ此度限り捨サセラレタル儀ト相混ジ、新式ニ至リテモ亦其如ク撰ビテ行ナハセラレタル正シキ儀式ト、當今限りノ御儀式ト品々相混ズル道理ナリ。夫レ故議スル所ノ御儀式、御次第一々右ノ勘考ヲ以テ別ヲ爲シ、此後ノ御儀式ハ全ク善ヲ盡シ美ヲ爲ス所ノ心算ヲ爲スヲ以テ宜シトス。故ニ今般ノ新式中ヘハ將來ノ事ヲモ含蓄シタルモノト爲ス。此即位新式抄ハ其場合ヲ記載スルコトヲ要トス。

御即位中最モ重キモノハ、高御座御登壇ノ場合其御儀式之ヲ重ンズベキコトトス。其高御座ノ式上古ノ儀式自カラアリシコトナルハ明カナレドモ、其明細ナルコトヲ知ルニ由ナシ。中古ノ儀式之ハ近古迄モ其形ヲ同ジクシタルモノニテ、充分結構ナルモノナリ。其圖別ニアリ、其之ヲ造ルノ日月又久シキヲ要ス。故ニ今般ハ其御式ノ高御座ヲ止メラレ、御帳台ヲ以テ高御座ニアテラレタリ。是ハ今後ノ儀ハ別ニ御定メアルベキコトナリ。今般ノ圖御裝飾方御登壇ノ次第別紙ニアリ。(別冊太政官日誌第六十九寫參看)

御儀式鋪設整ヒテ奏スル時出御、直チニ高御座ノ壇ニ登ラセラル、其御前ニ設ケアル所ノ地球儀我日本國ノ正面ヲサシテ御足ヲ上ゲ給フコト左右左ナリ。コレ御即位式中ノ最モ重キ所ナリ。此時彼ノ御即位ノ宣命及ビ壽詞等ノ式アリ。委細ハ別冊ニ之ヲ記載ス、此高御座今度ハ至急ナル儀ニ付キ假リニ御帳台ヲ以テ用キサセラル、此式畢リテ入御ナリ。

今般ノ御儀式ハ彼ノ上代ノ高御座ノ御登壇ハ專ラ古事ヲ舉ゲサセラレ、其結構ハ後世ノ美ヲ用キ給フコトナガラ、右御登壇ノ節服御ハ中古ハ袞冕十二章ノ御服ナリシヲ、此儀ハ今般廢止ニ御治定ナリ、其他唐土ノ歴史ヲ以テ用キサセラレタル旗其他夫々ニ類スル品々ハ悉ク廢止ニ御治定ナリ。儲テ之ニ代フルニ專ラ我國固有ノ道ヲ取調ブベキ定メニテ、彼ノ紳ノ枝ニ鏡、劔、璽等モ付ケサセラレ、夫レヲ以テ神代以來ノ大禮ニ用キサセラレタルナレバ、之ヲ以テ宜シトシテ夫々ノ備ヘヲ盡サセラレタリ。其設ケ方圖ノ如シ。高御座幣旗等圖參看
(龜井家ヨリ出ス分)但シ前ニ述ブルガ如ク今般ノ御次第ハ至急ノ儀ニ付其儀ヲ飾ルノ設ケ方決シテ至レリ盡セリトハ云ヒ難シ。將來ノ御式、其基ク所ヲ前ニ述ブルガ如クトシテ、尙ホ宜シキヲ加ヘサセラルベキコトナルベシ。

將來ノ事之ヲ考フレバ舉サセラルベキ儀式數種アリ。儲テ彼ノ唐土ノ禮ヲ執リテ中古以來事ノ盛ナルヲ計リシモ、其實意ハ全ク我國體ノアル所ニ任セラレタルナリト信ズ。素ヨリ寶祚無窮、君臣分別正シキコト各國其比例ナシ、始メ唐土ニ交ハルヨリ、先ヅ其文物ヲ以テ國家ヲ大ナラシムルノ要ヲ採リ、彼ト交ハリヲ結ビ友誼ヲ厚クシテ尙ホ彼ノ屬國視スベキ國ニアラザルコトヲ明カニシ、我國將來文物政治其他彼ニアル所ノ宜シキヲ採用シテ固陋ノ一國ニアラザルコトヲ明カニシ、尙ホ世界ノ或所ノ上ニ座スベキ景況ヲ構ヘタルガ如シ。是ニ依テ之ヲ考フレ

バ、方今已ニ文明國ノ夫々ヲ友トナシ、彼唐土ノ儀ヲ執リシヨリモ、尙ホ心ヲ一層大ニシテ其採リ方高尚實ニ盛ナランコトヲナスベキ際ナリ。故ニ將來ニ於テハ必ラズ其時代其時代ニ新式ヲ加増アラセラル、ヲ宜シトス。尙ホ此古來ノ神事ヲ以テ專ラ即位式トアラセラレシ其式、彼ノ大嘗祭ヲバ古風ノ儘ヲ以テ行ナハセラル、儀ト定メアルベキコトナリ。大嘗ノ儀ハ別ニ記載スル書ニ據リテ尙ホ註記スルコトアルベシ。

御登壇ノ節、劔、璽、侍從之ヲ捧グ、此時ニ於テ賢所神鏡ノ御唐櫃御座所ヲ高座トナシ、高御座、劔、璽ノ御座ト同ジクナスコトヲ古來ノ例トス。謹デ考フルニ、此御禮服最モ由來重キコトナラン、モト御即位ハ太古ノ重キ御儀式ヲ採ラセラル、譯ナレバ、三種ノ神器、鏡、劔、璽、此御三品トモ御手ニアリ、御自力ニアル其姿ヲ後世傳ヘラレタル御場合、夫レ故賢所ノ御鏡モ此高御座ヘ御携ヘアラセラルベキコトナラン。然ルニ御鏡ハ彼ノ中古以來ノ故ヲ以テ今ハ唐櫃ノ儘尊敬ヲ加ヘサセラレシ御例故、其御寶櫃ノ儘ニテ御座ヲ高クシ、揚床ヲ備フルノ儀トナルコトナラン、重キ故事ナルヲ以テ茲ニ註記ス。

御即位ノ大儀ハ君臣最モ重キ賀會ニ付キ、中古以來其重キヲ示シテ參列ノ人々數多シ、然レドモ近古武家執政中ハ只形ヲ行フダケノ場合ニ付キ、或ハ其盛ナルヲ伺フニ不足ナルガ如シ。維新以後再ビ其盛ナルノ場合ヲ行ナハセラルベキ時ハ來レリ。然ルニ未ダ一應ノ改正ノミニテ迄ノコト定メタリ。

關東全ク平定、列藩其處分濟サセラレタリト云フニ至ラザレバ、未ダ改正中途ナルガ如シ。故ニ舊官其儘ニテ新官例ヲニ備ハレリ。コレ皆太政官其爲ス所ノ順序中ナルニヨリ、今般ハ舊官中其宜シキヲ採ツテ之ヲ定メトシ、參列慶賀、別紙ノアル所ノ如シ(御即位雜記參看)。是レ亦將來盛ナルヲ要トシテ大ニ擴張セラルベキモノト信ズ。

參列ノ百官、舊官新官共ニ立併ビテ拜賀ス。是ニ依リ兩段再拜、其古式只ダ最上禮ヲ用キル迄ノコト定メタリ。

人アリ此御禮ニ付キ云フコトアリ、御服袞冕十二章之ヲ止メラレ、鋪設中唐例ニ擬スルヲ止メラレタルハ極メテ宜シキコトナルベシ。然ルニ百官衣服猶ホ唐土ノ制ヨリ因襲スルアリ、之ヲ何トカアラセラレンカト云フアリ。此論一時議政官論ニモ上リタルコトナガラ、百官ノ體裁ハ猶ホ全ク平定後ノ處分ヲ含ミタル所ナレバ、今般ハ舊來ノ衣冠ヲ用キルコトト定メラレタリ。尙ホ御即位其式ニ繼イデ年號改元ノ事是レ亦御一代一度タルノ儀モ、已ニ此時ニ含ミアリシコトナリ。

又人アリテ彼唐土ノ禮ヲ止メラレ、專ラ古代ニ復スルノ論ヲ是トシテ或ハ將來ノ議ニ及ビ、古風ノミヲ是トスル論アリ。之ハ此論ヲ主張スル輩ハ、他國ノ宜シキヲ採ルト云フノ意ナキ輩ナリ。之レニヨリ思ヒヲ誤リタルモノアリシナリ。

今度ノ服御ハ黃櫨染ノ御服ナリ。是レ亦深意ヲ含ミタル御處分ニテ、將來ハ大ニ宜シキヲ定メラレ用キサセラルベキ内議アリシナリ。是等ハ今般此新式ヲ確定ニアラズト知ルベキナリ。此外今般ノ新式ニ對シテ意見アル輩數々アリ。其難陳ハ夫々ハ今之ヲ記載セズ、但シ加島熙ヨリ長松幹ヘ送リシ一書、木戸參議ノ見ル所トナリ、夫ヨリ新式取調ノ局ヘ傳ハリ、今其書面ノ寫シ一例ヲアゲテ示シ置ク。

加島熙書面 (木戸ヨリ受取)

謹啓愈御安恭奉恭祝候、扱又何共非職非分之至恐入候事ニ御座候處、昨日於軍局中御卽位之御大禮被仰出奉拜見候處、唐製之御禮服今般御廢止之由、尤太古之御禮服ト申儀ハ如何之御禮服ニ被爲在候哉、御冠裳御束帶之儀ハ漢唐ノ舊式ニモ無之、黃帝堯舜垂衣裳而天下治マルト有之候通、唐虞聖代之古典ニ神州古例之御法服御參酌被爲在段輅周晷夏時之御車服御服曆御垂統被爲在候事ニテ無勿體モ

日月袞龍十二章十二旒ノ御舊典

御法象被爲在候御事ト奉恐察候。千載識者ノ所譏如何ニ可有御座候哉、雜服サヘ不案内之私共奉議奉恐入候へ共、御知友之間柄ヲ以テ御問合申上候迄ニ御座候。乍恐尙又至尊而已太古ノ汗樽匏飲大羹玄酒被爲御候共、百官公卿ハ朱袍翠簪總而漢唐ノ御服製

等儼然御遵奉被爲在候儀ハ是又如何ト奉存候、御高論如何。

一、御文物神典第一之儀ハ岩戸ノ御古例ニ被爲法五百枝ノ柳ニ上枝ニハ八阪瓊ヲカケ中枝ニハ白銅鏡ヲカケ、下枝ニハ十握之劍ヲカケラレ候事、此御儀式ハ中古却而御廢止ニ相成候事ト奉存候、是コソ御曠典被爲舉行候様奉存候、何モ六ヶ敷物ニテモ無之、加茂、八阪ノ兩祠官等モ心得居候次第、早速御間ニ合可被爲遊事ト奉恐察候、御高按可然奉存候。

一、御改元モ被仰出候事ト奉恐察候、乍併此事藤田幽谷之建元論ニ委曲有之候通、始メヨリ御世御一號ニ而御貫キ被爲遊候方可然奉存候、是又乍序奉伺候、此御儀モ乍恐先年御世子君様御在京ニテ御復古議被爲在候節委曲奉建白置候様相心得罷在候、今朝罷出件々御内意相同度奉存候處、昨日ノ一小恙有之旁乍恐以書中不取敢狂妄奉申上候、餘ハ追而拜謁委曲可申上候、誠恐々々頓首齋戒百拜。

八月廿六日

再白、乍序兼テ奉願上候書林願早速松田京府へ相促置候處、承知ノ返答ニ有之候處、是又如何相成候ヤ、尙又御手許へ不出候ハ、再促モ可仕候へ共、何分宜敷御駿斷奉願上候、日誌五十一拜見委曲奉拜謝候、何モ不日拜青萬謝可申上候、尙乍恐前文唐澤、

卽位新式抄

木戸御兩卿へ御内見被下候ハ、螻蟻寸心大幸ニ存候へ共、何モ餘リ急切恐入候事ニ御座候間御高按次第奉託候以上。

加 島 熙

長 松 先 生

密啓拜呈急ギ

副啓謹白、乍恐今般ハ如何ニモ兵馬倥偬中之御儀實ニ奉恐察候へ共追而目出度太平御大嘗會モ被爲在候事故尙又篤ト御再按モ奉願候、且乍恐御大旗(是ハ解シ違ヒト相見候、大旗ハ始メ製作被爲改トノ御沙汰面ヲ大旗始製ト讀候モノト相見候)御始製之由被仰出候處、乍恐日月大常之御旗朱鳥玄武四神之御幡等モ中古以來之御文物ト奉存候處、御始製ト被爲在候テハ御復古共不相見、定テ御定議被爲在候事ト奉存候へ共千萬重大之御文物知其義者天下掌運之聖誠、豈螻蟻輩所能與知哉、是又杜撰乍恐奉内啓候御垂諭千萬是祈候不恭不次。

有 隣 熙

長 松 先 生 玉 杙 下

別紙假令公論ニテモ最早御間合モ無之事ニ御座候へ共、申越候故奉供電覽候、其内一度シテ二度スベカラズ候。

御大事ニ付萬一之御失錯有之候テモ不相濟、私共古禮甚不案内故此儘捨置候様モ不相成旁差出申候、尤ニ思召候事モ御座候ハ、福羽當へモ御示シ相成候共、又ハ御棄置可相成候共只々尊意ヲ奉仰候草々頓首。

廿 六 日

長 松 拜

木 戸 様

(加島熙ハ櫻老ト號セシモノ、笠間出身水戸派ノ宿儒)

今般新式取調ノ局ハ龜井中將ト美靜ト命ヲ奉ジテ擔當スルコトナリ。已ニ前ヨリ述ブル所ノ如ク、記ス所ノ榦ノ枝ニ鏡ヲカケ古式ヲアグル等ノ例ハ、龜井中將ガ前年以來神事ニ明カナル人ニ舊史ヲ參酌シテ撰バシメ、夫々ノ雛形ヲ整ヘアリシヲ採ツテ其式ヘ加ヘラレタリ。高御座幣看(龜井家ヨリ出ス分)然レドモ今般ノ行ナハセラレタル儀式ハ、前ニ述べタルガ如ク未ダ天下平定ノ時ニ

即位新式抄

非ラズ、且ツ至急ニ關東行幸ノ御催アリテ、其以前ニ御式ヲ行ナハセラル、コト故、其式ハ重シト雖モ、其設ケ事ハ充分ナル儀ニアラズ、夫レ故、旗等ノ員數尙ホ尠シ、之ヲ希望スルガ如キ場合ニ盛ニ行ナハセラル、時ハ其數加増シ、其設ケ方モ大ニ擴張スベキ道理ナリ。

全體即位式ノ大儀ハ古ヲ本トシ、夫ニ附屬スル所ノ例ハ時代々々ニ加ヘラル、事有リテ、尙ホ古來ハ世界ニ對シ重キ賓客モアリ、國內ノ人普ク御式ヲ或ハ拜觀スル等ノ設ケアラセラルベキ儀ハ必然ナリ。是ニ依リ將來ヘ對スル所ノ希望ヲモ今考フル所ヲ次條ニ述ベ置クモノナリ。

今般ノ式中新ニ設ケラレテ將來尙ホ永ク執ラセラルベキ儀ハ、大地球儀ヲ御前ニ置カルルノ式ナリ。此大地球儀ハ前年水戸徳川ヨリ奉獻シタルモノニシテ、先帝之ヲ愛覽シ給ヒシ品ヲシテ今般ノ儀式ニ用キサセラレタルコトナリ。抑モ萬世無窮ノ寶位ハ國民ノ仰ギ奉ル所、國民ハ即チ寶位ノ海外迄モ仰ガレ給ハン如ク、勤勉業ヲ擴メ永ク慶賀ノ限ナキヲ心ニ構ヘテ尊崇スベキ儀ナレバ、夫レ等ヲ自カラ含ミタル式トシテ此新式ヲ用キサセラレタルコトナリ。是ニヨリ尙ホ將來ノ盛ナル御儀式ヘ對シテハ希望スル所數多シ。先ヅ我國ノ古道ヲ明ラカニシ、敬神ノ意ヲ本トシ、加フルニ彼ノ中古唐土ノ盛ナルヲ採リシ如ク、世界ノ有ラユル宜シキ儀式ヲ採用シテ益擴張アラセラレンコトヲ希望ス。

高御座出御ノ御姿、從來唐土ノ服ヲ用キサセラレシ場合ヨリ因循シテ御自身武ヲ帶ビ給フコ

トアラズ、御劍モ御璽モ侍從之ヲ捧グルコトトナリタリ。是等ノ事將來尙ホ重キ叡慮ヲ以テ改メラレ、御親ヲ劍、玉ヲ御手ニ執ラセラレ、又帶ビサセラル、場合ト定メサセラレ、彼ノ鏡ハ櫛ノ枝ニアル所ノ如ク御面前ニ飾ラセラル、様コレアルベキコトヲモ希望ス。

如斯大禮ヘ對シテハ其神國ノ儀ヲ以テ行ナハセルラ、コト故、其禮ニ師タルノ人、重キ任ヲ受ケ 陛下ヲシテ重キガ上ニ重キヲ添ヘ奉ルノ式ヲ行ナヒ、内外ノ衆人其御式ヲ以テ心中ヨリ仰ギ奉ルノ場合ヲ爲サシメ、今般神祇官、知事參列スルノ場合ヲ尙ホ擴張アラセラルベキコトヲ希望ス。

古ノ道ヲ重ンゼサセラル、中ニ、自ラ支那ノ宜シキヲ採ツテ後世事ヲ精クシ、萬事ノ擴張ヲ計リ給ヒシハ、全ク是レ古道ノアル所ナリ。神武天皇日向ヨリ進ンデ中國ニ入り給ヒシ時、漸次諸事ヲ擴張シ給ヒ、古キト新シキヲ差加ヘテ永代ヘ其宜シキヲ傳ヘサセラレタリ。此古キヲ基トシテ彼ノ唐土ノ宜シキヲバ我國ニ採リ用キ給ヒ、將來ニカケテハ獨リ唐土ノミナラズ萬國ノ宜シキヲ採ツテ悉ク我有トナシ諸事ヲ擴張シ給ハンコトヲ要ス。此即位式ノ御儀最モ其意味ヲ用キサセラレテ將來益大儀式トシ給フベキコトナリト思考ス。

御儀式行ナハセラル、場合、今般ハ中古ノ式ヲ以テ取調ベ、其設ケ方ニ於テ新式取混ゼタルコトナリ。全體此御場所大極殿無キニヨリ紫宸殿ヨリ庭上ヘカケ、夫々ノ次第ヲ立テタルコト

ナガラ、將來ノ御式ハ尙ホ此上擴張アラセラルベキニ付、此設ケ方コレ亦今般ノ場合ヲ足レリトセズ、之レニ就テモ希望スル所ハ彼ノ大極殿、紫宸殿タル御場合ヲモ大ニ廣大ヲ極メサセラレ、加フルニ百官其他參列スル輩、夫々ノ宏濶ナル場所ヘ列スル事ト定メサセラレ、其出御ノ御道、又高御座御登壇ヨリ御歸座ノ道筋、大ニ廣ク長キヲ要ス。其御道筋ヘ參列スル内外ノ人ハ之ヲ宜シキ程ニ配置スル事、其邊ノ儀ハ必ラズ明細ノ取調ベテ要スルコトトス。尙ホ其用意ノ爲メ次條ニ夫々陳述ス。

御即位式中彼ノ宣命、之ヲ讀ミアゲル時、初ノ衆聞食止宣布ト云フ時ニ至リ、衆人應ト云フ聲ヲ發ス。謹デ聲ヲ一節ニ發ス、其式嚴重ヲ要ス。其聲終ハルヨリ掛畏伎ト云フヨリ次ヘ讀ミ續ケテ、終リノ衆聞食止宣布ト云フ時ニ至ル亦衆人應ト云フ。夫ヨリ端ヲ改メテ壽詞ノ次第トナル。壽詞ハ初メヨリ終リニ至ル迄別ニ云フコトナクシテ、各々 陛下ヲシテ御聞キヲ仰ギ居ル姿ト爲ス。夫レヨリ大歌等ノ次第アリ、此時最モ盛ナル音樂ヲ奏スルコト有ツテ此事件モ今般ハ只ダ其形ノミ行ナハシメラル、將來ノ御式ニハ重要ナルコトトシテ其取調べアルベキコトナリ。

宣命文ノ事舊來時之沿革有ツテ一定ノ文章ト定マレルモノニアラズ、是レ實式ナリ。今般ハ先例先々例等ヨリ増減スルコト有ツテ作ラレタルモノナリ。此宣命文中即チ御位ノ重キヲ示シ又由來ノ遠キヲ顯ハシ、人民一般ヲ愛育シ給フ所ノ深キ御心ヲコメタルモノナリ。其意總テ其禮式ニ師タル人、叡慮ヲ仰ギテ之ヲ定ム。全體如斯大儀ノ場合ハ、衆人心ニ信ズル所ノ篤キヲ要スルコトニシテ、其禮ニ師タル人ハ自然何事ニモ衆人ノ仰グ所ノ人ニテ、其事狀ハ吉事凶事何レノ場合タリトモ、此禮師ノ爲ス所ハ悉ク衆ノ意ヲ安ズル所ノ有様ニアラザレバ叶ハズ、故ニ今般神祇、知事之ヲ行フ事ノ定メトナリタルモノナリ。

右御式ノ幣案ニ幣ヲ奉リ、大地圓形ヲ備ヘラル、コト最モ重キ所ニシテ、自ラ天神地祇ヲシテ 陛下ノ前ニ招請シ奉リ、 陛下モ亦神明ノ前ニ登壇、衆ニ向ヒテ其告事ヲ爲サシメ、衆ノ奏スル所ノ壽詞ヲ聞食スヲ大旨トス。

此大儀ニ關係スル雜事最モ要用ナル點ヲ擧ゲテ將來ノ取調ノ便益ヲナサントス。御即位御治定ハ數日ノ前ニ衆ニ告グルノ手續ヲ以テ内外人ヘ示サル、コト之ヲ始トナシ、其次第其衆人ニ注意スベキ條々等其順序之ヲ披露スルノ儀アルベシ。今般ハ舊來ノ儀ト新式ト併セテ之ヲ行ナヒ、尙ホ未ダ國家全クノ平定ニアラザル場合アレバ、招キ集ムルノ人モ僅少ナリシコトナリト知ルベシ。式日數日前ニ伊勢神宮ヲ始メ重キ御陵ヘ勅使ヲ進セラル、ノコト是レ亦將來其重キヲ以テ進セラル、ノ取調アルベキ事ナリ。

衣服ノ事前ニモ述ベシ如ク舊官新官取混ヘタルコトナレバ、其遺憾ナルコトナリ。將來ハ大

ニ改メラルベキ條々アル事トス。即位ノ大禮ハ重キ事ナレバ將來ノ紀念日トシテ夫レニ應ズルノ儀アラシキコトヲ希望ス、此儀他ノ記念日モ夫々定メラルベキ場合、此評決モ時ヲ失ハズシテアルベキ事ナリ。

即位等ノ大禮從前ノ定メハ重キ儀式ニ付キ只々謹肅ヲ要スルヲ以テ、却ツテ常ノ日ヨリハモノ寂シキコトニテ、彼ノ南門ノ近邊等ノ往來ヲ止ムル等ノコトニテアリタリ。祝日ノ景況遺憾ナルコトトス。將來ノ祝日ハ最モ欣々然タル景況ニ取調ベアリタシ。即位慶賀ノタメ獻物尙ホ拜領品等別シテ今般ハ重カラザルノ式ヲ用キラレタリ。將來ハ最モ大ニ取調アルベキコトナリ。今般ノ儀式中ニハ陸海軍ノ其設ケ未ダ半バニ付、宮中宮外參列ノ儀ヲ別ニセリ、將來大ニ擴張スルコトアルベシ。

大儀ノ次ギノ日、徵兵諸藩、公議人、公用人、御式場ノ飾付ケヲ拜觀セシムル爲メ之ヲ撤却セズ望ミニ任セテ拜觀セシメタリ。此事臨時ノ定メナリ。將來ハ御即位ノ式大ナルニ從ヒ日ヲ重ネテ行ハル、饗禮ヲ起サセラルベキコトヲモ今般ハ行ハセラレズシテ止ミタルコトナリ。

今般新式ヲ用キラル、ニ就テノ條々ハ已ニ述べタル如シ。終リニ臨ミテ今一言ヲ記シ置ントス。此後必ラズ將來ノ即位式ヲ定メ置カル、時アラン。其時ヲ何レノ時ト考フルニ、彼ノ帝室ノ制度尙ホ大ヲ加ヘ、其儀式中最モ重キ儀ヲ即位式ト爲サレバ叶ハザルニヨリ、其時ノ到來

スルヲ待ツテ確定ノ儀アランコトヲ望ム。其確定ノ場合ニ於テハ只ダ帝室中ノ制度ヲ建テタリト云フ計リニテ、未ダ時到來セザルガ如シ。如何トナレバ全國ノ人民尙ホ高尚ノ度ヲトリ、己レノ爲ス所ノ有様在來世人ノ陋風習ヲ捨テ、其重ンズベキ所ハ之ヲ重ンジ、改ムベキ所ハ之レヲ改メ進ムベキ衣食住其他營業上ノ體裁等、全ク今ヨリ數段ノ進歩ヲ爲シ、其時ニ應ズル政府ノ政權モ進ミ、各國ノ交際其盛ナルヲ極ムルノ場合ヲ以テ遂ニ即位式ノ行ナハセラルベキ條々神祇ノ敬祭ニ於テハ其基タル大嘗ノ姿ヲ少シモ變ゼズ、其變ズベキ衣服禮式等ハ之ヲ改メ、全國人之ヲ怪シト思ハザルノ時代トナシ、其時代ヲ早く整ヘテ此即位式ノ確定ヲ爲シオカル、様是レアリタシ。尙ホ其時代ニアタリ新タニ定ムル所モアルベシ。習慣ヲ執行スル所モアルベシ之ヲ奏聞シ叡慮ノアル所ニヨリテ決定シ置クベキコトナリ。美靜其場合ヲ希望スルノ餘リ、謹而茲ニ一言ス。

皇族身位令立案要旨

第一章 列 次

- 一、皇族ノ列次ハ左ノ順序ニ依ルコト
- 一、皇 后
- 二、太皇太后
- 三、皇 太 后
- 四、皇 太 子
- 五、皇 太 子 妃
- 六、皇 太 孫
- 七、皇 太 孫 妃

- 八、親王、親王妃、内親王、王、王妃、女王、
- 二、親王、王ノ列次ハ皇位繼承ノ順序ニ從ヒ内親王、女王ノ列次亦之ニ準ズルコト、但シ同等内ニ於テハ男ヲ先ニシ女ヲ後ニス
- 三、攝政タル親王、内親王、王、女王ノ列次ハ皇太孫妃ニ次グコト
- 四、皇位繼承ノ順序ヲ換ヘラレタル者ノ列次ハ皇太孫妃ニ次ギ、攝政タル親王、内親王、王、女王アルトキ之ニ次グコト
- 五、親王妃、王妃ノ列次ハ夫ニ次ギ、内親王、女王ニシテ親王妃、王妃タル者亦同ジトスルコト
- 親王妃、王妃、夫ヲ亡ヒタルモ其ノ列次ハ舊ニ依ルコト
- 六、從來ノ宣下親王ハ其ノ宣下ノ順序ニ依リ王ノ上ニ列スルコト

第二章 成 年 式

- 一、皇太子、皇太孫ハ滿十八年、其ノ他ノ皇族男子ハ滿二十年ニ達シタルトキ成年式ヲ舉グルコト、但シ事故アルトキハ其ノ期ヲ延ブルコトヲ得

- 二、成年式ハ賢所大前ニ於テ之ヲ行フコト
- 三、成年式訖リタルトキハ天皇、皇后ニ朝見スルコト
- 四、成年式訖リタルトキハ宮内大臣之ヲ公告スルコト

第三章 敍 勳 任 官

- 一、親王成年ニ達シタルトキハ大勳位菊花大綬章ヲ賜ヒ、王成年ニ達シタルトキハ勳一等旭日桐花大綬章ヲ賜フコト
- 二、親王、王、婚嫁ヲ爲ストキハ其ノ禮ヲ行フニ先チ右一ニ準ジ勳章ヲ賜フコト
- 三、皇后ニハ大婚ノ禮ヲ行フニ先チ寶冠章全部ヲ賜フコト
- 四、親王妃ニハ結婚ノ禮ヲ行フニ先チ寶冠章一等ヲ賜ヒ、王妃ニハ寶冠章二等ヲ賜フコト
- 五、親王ニシテ勳功アル者ニハ大勳位菊花章頸飾ヲ賜ヒ、王ニシテ勳功アル者ニハ大勳位菊花大綬章又ハ菊花章頸飾ヲ賜ヒ、王妃ニシテ勳功アル者ニハ寶冠章一等ヲ賜フコトアルベキコト
- 六、以上ニ定メタル外特旨ニ依リ内親王、女王ニ勳章ヲ賜フコトアルベシ

- 七、金鷄勳章等級製式、佩用式、金鷄勳章敍賜條例、金鷄勳章年金令、勳章佩用式、勳章記章佩用心得、略章略綬佩用心得、勳章還納ニ關スル規程、勳章年金褫奪停止ニ關スル規程、勳章年金支給細則、外國勳章佩用願規則、從軍記章條例、從軍記章褫奪及ビ佩用停止取扱手續帝國憲法發布記念章、大婚滿二十五年祝典章ニ關スル規程ハ皇族ニ之ヲ準用スルコト
- 八、妃ノ離婚ノトキ又ハ夫ヲ亡ヒタル妃ガ臣籍ニ入ルトキハ其ノ既ニ受ケタル勳章ヲ返上セシムルコト
- 九、皇族ノ任官ハ總テ勅旨ニ依リ一タビ任官シタル後ハ普通法令ノ定ムル所ニ從フコト、但シ皇太子、皇太孫ハ此ノ限ニ在ラズ
- 十、在官ノ皇族臣籍ニ入ルモ仍テ其ノ官ヲ失ハザルコト

第四章 宮 號

- 一、成年式ヲ舉ゲタル皇族男子ニハ特ニ宮號ヲ賜フコトアルベシトスルコト、但シ宮號ハ皇子孫ノ命名ニ際シ附セラル、宮名ト相涉ラズ、又皇男子孫ニハ成年ニ達セザルモ宮號ヲ賜フコトアルベシ

- 二、宮號ハ嫡長ノ順序ニ依リ之ヲ繼承スルコトヲ得ルコト
- 三、宮號ヲ賜ハリタル者ノ配偶者、直系卑屬及ビ其ノ配偶者ハ同一ノ宮號ヲ稱スルヲ得ルコト
現ニ宮號ヲ稱スル者ノ配偶者、直系卑屬及ビ其ノ配偶者亦同ジ
- 四、宮號ヲ稱スル皇族ハ別ニ定ムル雛形ニ從ヒ紋章ヲ用キルヲ得ルコト

第五章 住所及失踪

- 一、皇族ノ住所ハ東京トシ他ニ住所ヲ置ク必要アルトキハ勅許ニ依ルコト
- 二、戰時事變其ノ他ノ場合ニ於テ皇族ノ生死不明ナルトキハ勅旨ニ依リ其ノ財産ノ管理上必要ナル處分ヲ命ゼラル、コト
- 三、皇族ノ生死不明ナルコト三年ニ互ルトキハ皇族會議及ビ樞密顧問ニ諮詢シテ勅裁ニ依リ薨去シタルモノト看做スコト、但シ勅裁アリタルトキハ宮内大臣之ヲ公告ス
- 四、薨去ノ勅裁アリタル後之ニ異ナリタル事實アルコト分明トナリタルトキハ宮内大臣ハ勅許ヲ受ケ更ニ其ノ旨ヲ公告スルコト、但シ此ノ公告ハ薨去ノ勅裁ニ因リ生ジタル事項及ビ薨去勅裁後公告前ニ爲シタル行爲ニ其ノ効力ヲ及ボサズ

第六章 降 下

- 一、皇室典範増補第一條ニ依ル請願ヲ爲スニハ王滿十五年以上タルヲ要スルコト
- 二、皇室典範増補第一條ニ依リ華族ニ列セラレタル者ハ一家ヲ創立スルコト、同第四條ニ依リ臣籍ニ降サレタル者亦同ジ
- 三、皇室典範増補第一條ニ依リ華族ニ列セラレタル者ニハ相當ノ世襲財産ヲ賜フコト
- 四、皇室典範増補第二條ニ依リ王ガ華族ノ家督相續人トナルニハ相續開始ノ後指定又ハ選定アリタルコトヲ知リタル時ヨリ三ヶ月以内ニ勅許ヲ受クルコトヲ要シ、勅許ヲ受ケタルトキハ其ノ相續ノ單純承認ヲ爲シタルモノト看做スコト
- 五、右四ノ期間内ニ勅許ヲ受ケザルトキハ家督相續人トシテ指定又ハ選定ハ其ノ効力ヲ失ヒ其ノ期間内ニ勅許ヲ受ケタルトキハ相續開始ノ時ニ遡リテ其ノ効力ヲ生ズルコト
- 六、皇室典範増補第一條及ビ第二條ノ場合ニ於テ王未成年ナルトキハ請願ヲ爲シ又ハ勅許ヲ請フニ先チ父母ノ同意ヲ得ルヲ要シ、父母ノ一方ガ薨去シタルトキ又ハ其ノ意思ヲ表示スル能ハザルトキハ他ノ一方ノ同意ヲ得ルヲ以テ足ル、父母共ニ薨去シタルトキ又ハ共ニ意思ヲ表

示スル能ハザルトキハ其ノ後見人及ビ親族會ノ同意ヲ得ルヲ要スルコト、但シ婚嫁ヲ爲シタル未成年ノ王ハ此ノ限ニ在ラズ

七、皇室典範増補第二條ニ依リ華族ノ家督相續人トナルニ當リ王十五年未滿ナルトキハ父母代リテ勅許ヲ請フコトヲ得、父母ノ一方ガ薨去シタルトキ又ハ其ノ意思ヲ表示スル能ハザルトキハ他ノ一方ニ於テ、父母共ニ薨去シタルトキ又ハ共ニ意思ヲ表示スル能ハザルトキハ其ノ後見人ニ於テ勅許ヲ請フコトヲ得、但シ後見人ニ於テ勅許ヲ請フニハ親族會ノ同意ヲ得ルヲ要ス

皇室典範増補第二條ニ依リ養子トナルニ當リ王十五年未滿ナルトキ其ノ勅許ヲ請ヒ且ツ縁組ヲナスニハ前項ヲ準用ス

八、養子縁組ハ勅許ナキトキニ限り之ヲ無効トシ、其ノ他縁組ノ無効及ビ取消ヲ認メザルコト
九、皇室典範増補第二條ニ依リ養子トナリタル王離縁ノ場合ニ於テ直系尊屬ノ臣籍ニ入り創立シタル家アルトキハ其ノ家ニ入り、家ナキトキハ一家ヲ創立スルコト
十、臣籍ヨリ入りタル妃其ノ夫ヲ亡ヒタルトキハ請願ニ依リ勅許ヲ經テ實家ニ復籍スルヲ得ルコト

第七章 懲

戒

- 一、懲戒ハ謹慎停權及ビ剝權ノ三種トナスコト
- 二、謹慎ハ單ニ其ノ過ヲ改悛セシムルニ在ルコト
- 三、停權ハ期間ヲ定メテ特權ノ一部又ハ全部ヲ停止スルコト
- 四、剝權ハ特權ノ全部ヲ剝奪スルコト
- 五、懲戒ノ處分ヲ受ケ改悛ノ狀顯著ナルトキハ皇族會議ニ諮詢シ勅旨ニ依リ其ノ特權ノ一部又ハ全部ヲ復スルコト
- 六、懲戒ノ處分及ビ復權ニ付テハ委員ヲ勅選シ其ノ情狀ヲ審理セシメタル後皇族會議ニ諮詢セラル、コト

第八章 雜

則

一、民事訴訟及ビ刑事訴訟ニ付キ皇族證人タルトキハ其ノ所在ニ就キ訊問スルコト、但シ皇族相互ノ民事ノ訴訟ニ付テハ此ノ限ニ在ラズ

- 二、對質ハ皇族ノ所在ニ於テスルコト、但シ民事訴訟ニ付テハ其ノ請求アル場合ニ限り、刑事ノ訴訟ニ付テハ他ノ證人又ハ被告人皇族タル場合ニ限ル
- 三、皇族ハ商工業ヲ營ミ營利ヲ目的トスル會社ノ社員又ハ公共團體ノ役員トナルコトヲ得ズ、公益法人ノ社員若クハ役員トナルニハ勅許ヲ要スルコト、但シ株主トナルハ此ノ限ニ在ラズ
- 四、皇族ハ報酬ヲ受クル職ニ就クコトヲ得ザルコト、但シ任官ニ依ル場合ハ此ノ限ニ在ラズ

皇族身位令案

第一章 班 位

第一條 皇族ノ班位ハ左ノ順序ニ依ル

- 第一 皇 后
- 第二 太 皇 太后
- 第三 皇 太 后
- 第四 皇 太 子
- 第五 皇 太 子 妃
- 第六 皇 太 孫
- 第七 皇 太 孫 妃

皇族身位令案

第八 親王、親王妃、内親王、王、王妃、女王

第二條 親王、王ノ班位ハ皇位繼承ノ順序ニ從フ、内親王、女王ノ班位亦之ニ準ズ

前項ノ規定ニ依リ同順位ニ在ル者ハ男ヲ先ニシ女ヲ後ニス

第三條 親王妃、王妃ノ班位ハ夫ニ次グ、内親王、女王ニシテ親王妃、王妃タル者亦同ジ

第四條 故皇太子ノ妃ノ班位ハ皇太子妃ニ次ギ、故皇太孫ノ妃ノ班位ハ皇太孫妃ニ次グ

親王、王ノ寡妃ノ班位ハ舊ニ依ル

第五條 攝政タル親王、内親王、王、女王ノ班位ハ皇太孫妃ニ次ギ、故皇太孫ノ妃アルトキハ之ニ次グ

第六條 皇太子、皇太孫、皇位繼承ノ順序ヲ換ヘラレタルトキハ其ノ班位ハ皇太孫妃ニ次ギ、

故皇太孫ノ妃アルトキハ之ニ次ギ、攝政タル親王、内親王、王、女王アルトキハ又之ニ次グ

親王、王、皇位繼承ノ順序ヲ換ヘラレタルトキハ其ノ班位ハ舊ニ依ル

第七條 從來ノ宣下親王ハ其ノ宣下セラレタル順序ニ依リ王ノ上ニ列ス

第二章 敍 勳 任 官

第八條 皇后ハ大婚ノ約成リタルトキ勳一等ニ敍シ寶冠章ヲ賜フ

第九條 皇太子、皇太孫ハ滿七年ニ達シタルトキ大勳位ニ敍シ菊花大綬章ヲ賜フ

第十條 皇太子妃、皇太孫妃ヘ結婚ノ約成リタルトキ勳一等ニ敍シ寶冠章ヲ賜フ

第十一條 親王ハ滿十五年ニ達シタルトキ大勳位ニ敍シ菊花大綬章ヲ賜フ

第十二條 親王妃ハ結婚ノ禮ヲ行フ當日勳一等ニ敍シ寶冠章ヲ賜フ

第十三條 内親王ハ滿十五年ニ達シタルトキ勳一等ニ敍シ寶冠章ヲ賜フ

第十四條 王ハ滿十五年ニ達シタルトキ勳一等ニ敍シ旭日桐花大綬章ヲ賜フ

第十五條 王妃ハ結婚ノ禮ヲ行フ當日勳二等ニ敍シ寶冠章ヲ賜フ

第十六條 女王ハ滿十五年ニ達シタルトキ勳二等ニ敍シ寶冠章ヲ賜フ

第十七條 皇太子、皇太孫ハ滿七年ニ達シタルトキ陸軍及ビ海軍ノ武官ニ任ズ

親王、王ハ成年式ヲ訖リタル後陸軍又ハ海軍武官ニ任ズルコトアルベシ

第十八條 天皇支系ヨリ入テ大統領ヲ承クルトキハ前條ノ規定ニ準ジ敍勳任官ヲ行フ

第十九條 前數條ニ定メタルモノ及ビ特旨ニ由ルモノ、外勳章、記章、祝典章、記念章及ビ文

官ニ關スル法令ハ皇族ニモ亦之ヲ適用ス

第三章 失 踪

第二十條 戰時、事變、其ノ他ノ場合ニ於テ皇族ノ生死不明ナルトキハ勅旨ニ依リ其ノ財産ノ管理上必要ナル處分ヲ命ズ

第二十一條 皇族ノ生死不明ナルコト三年ニ互ルトキハ皇族會議及ビ樞密顧問ニ諮詢シテ勅裁ニ依リ失踪ヲ宣告スベシ

第二十二條 失踪ノ宣告ヲ受ケタル皇族ハ前條ノ期間滿了ノ時ニ薨去シタルモノト看做ス

第二十三條 失踪ノ宣告アリタル後生死ノ事實分明トナリタルトキハ勅裁ニ依リ其ノ宣告ヲ取消スベシ、但シ其ノ取消ハ失踪ノ宣告ニ基キタル事項及ビ行爲ニ其ノ効力ヲ及ボサズ

失踪ノ宣告ニ因リテ財産ヲ得タル者ハ現ニ利益ヲ享クル限度ニ於テ其ノ財産ヲ返還スル義務ヲ負フ

第二十四條 失踪ノ宣告及ビ其ノ宣告ノ取消ハ宮内大臣之ヲ公告ス

第四章 降 下

第二十四條 皇室典範増補第一條ニ依ル請願ヲ爲スニハ王滿十五年以上タルコトヲ要ス

第二十六條 皇室典範増補第一條ニ依リ華族ニ列セラレタル者ハ一家ヲ創立ス、同第四條ニ依リ臣籍ニ降サレタル者亦同ジ

第二十七條 皇室典範増補第一條ニ依リ華族ニ列セラレタル者ニハ世襲財産ヲ賜フ

第二十八條 皇室典範増補第二條ニ依リ王ガ華族ノ家督相續人トナルニハ相續開始ノ後家督相續人トシテ指定又ハ選定アリタルコトヲ知リタル時ヨリ三個月内ニ勅許ヲ受クベシ

前項ニ依リ勅許ヲ受ケタルトキハ相續ノ單純承認ヲナシタルモノト看做ス

第二十九條 前條第一項ノ期間内ニ勅許ヲ受ケザルトキハ家督相續人トシテノ指定又ハ選定ハ其ノ効力ヲ失フ

第三十條 皇室典範増補第一條及ビ第二條ノ場合ニ於テ王未成年ナルトキハ請願ヲ爲シ又ハ勅許ヲ請フニ先チ親權ヲ行フ父ノ同意ヲ受クベシ

親權ヲ行フ父ナキトキハ其ノ後見人及ビ親族會ノ同意ヲ受クベシ

第三十一條 皇室典範増補第二條ニ依リ華族ノ家督相續人トナルニ當リ王十五年未滿ナルトキハ親權ヲ行フ父代リテ勅許ヲ請フコトヲ得

親權ヲ行フ父ナキトキハ其ノ後見人ニ於テ親族會ノ同意ヲ得テ勅許ヲ請フコトヲ得

第三十二條 皇室典範增補第二條ニ依リ華族ノ養子トナルニ當リ王十五年未滿ナルトキ其ノ勅許ヲ請ヒ且ツ縁組ノ承諾ヲナスニハ前條ノ規定ヲ準用ス

第三十三條 皇室典範增補第二條ニ依ル養子縁組ハ勅許ナキトキニ限リ之ヲ無効トス

第三十四條 皇室典範增補第二條ニ依リ華族ノ養子トナリタル王離縁ノ場合ニ於テ直系尊屬ノ

臣籍ニ入り創立シタル家アルトキハ其ノ家ニ入り其ノ家ナキトキハ一家ヲ創立ス

第三十五條 臣籍ヨリ入りタル妃其ノ夫ヲ亡ヒタルトキハ請願ニ依リ勅許ヲ經テ實家ニ復籍スルコトヲ得

第五章 懲 戒

第三十六條 皇族ノ懲戒ハ謹慎、停權及ビ剝權トス

第三十七條 謹慎ハ後來ヲ訓戒シ十日以上一年以下參内ヲ止ム

第三十八條 停權ハ一年以上五年以下皇族特權ノ一部又ハ全部ノ行使ヲ停止ス

第三十九條 剝權ハ皇族特權ノ全部ヲ剝奪ス

第四十條 皇族懲戒ヲ受ケ改悛ノ狀顯著ナルトキハ其ノ懲戒ノ一部又ハ全部ヲ解除スルコトヲ

ルベシ

第四十一條 皇族ノ懲戒及ビ其ノ解除ハ勅旨ニ依ル

停權及ビ剝權ノ懲戒及ビ其ノ解除ニ付テハ樞密顧問官及ビ宮内勅任官中ヨリ三名以上ノ委員ヲ勅選シ其ノ情狀ヲ審査セシメタル後皇族會議ニ諮詢シテ之ヲ勅裁ス

第六章 雜 則

第四十二條 刑法、陸軍刑法及ビ海軍刑法ハ皇族ニモ亦之ヲ適用ス

第四十三條 皇族ハ其ノ住所ヲ東京市内ニ定ムベシ、但シ必要アルトキハ勅許ヲ經テ他ニ住所ヲ定ムルコトヲ得

第四十四條 皇族ハ商工業ヲ營ミ營利ヲ目的トスル法人其ノ他ノ團體ノ社員、會員又ハ役員トナルコトヲ得ズ、但シ株主トナルハ此ノ限ニ在ラズ

第四十五條 皇族ハ報酬ヲ受クル職ニ就クコトヲ得ズ、但シ任官ニ依ル場合ハ此ノ限ニ在ラズ

第四十六條 皇族ハ公共團體ノ吏員又ハ議員トナルコトヲ得ズ

皇族身位令案

二二五

皇族身位令定本

恭テ按ズルニ皇族ノ國法上ノ地位ハ皇室典範及ビ之ニ基キ發スル準則ニ依リテ定マルベキモノナルモ、典範ノ條章未ダ傳ハラザルモノアルヲ以テ、増補ニ於テ之ヲ明文ニ著シ、已ニ具シテ案ニ在リ。今皇族身位令ハ即チ所謂之ニ基キ發スル準則ノ一ニシテ皇族ノ身位ニ關スル重要ナル事項ヲ臚載シタルモノナリ。約シテ之ヲ言ヘバ章ヲ分ツコト凡ソ六アリ、一ニ曰ク、班位以テ皇族ノ班位ヲ定ム、宮儀ノ列次此レニ由リテ以テ立ツベク、宗室ノ秩序此レニ由リテ以テ正スベシ。二ニ曰ク、敍勳任官以テ皇族ノ敍勳任官ノ事ヲ定ム、蓋シ皇族ノ身位ヲ昭カニスルハ宜シク之ニ相當セル殊榮ノ典ヲ享ケシムベシ、未ダ普通命令ニ於ケル要件ヲ以テ之ヲ律スベカラザルナリ。身體ノ許ス限リ皇族男子ノ武官ニ任ズルコトヲ規定シタルハ皇室ノ貴胄ヲシテ率先報效ノ務ニ服シ、以テ尙武ノ氣風ヲ獎勵スルノ義ヲ明ニス。皇太子、皇太孫ニ至テハ他日大元帥

タルノ基ヲナスニ在リ、凡テ斯ノ條定スル所ハ素ヨリ至尊ノ大權ヲ限制スルノ謂ニ非ラズ、之ヲ情理ニ揣リテ必準ノ條規ヲ設クルノ要アルヲ認メタルニ由ルナリ、三ニ曰ク、失踪以テ皇族生死不明ノトキニ於ケル事宜ヲ定ム、其ノ久キニ互ルニ於テハ皇位繼承ノ上ニ波及スル關繫實ニ至大ナルモノアルヲ以テナリ。四ニ曰ク、降下以テ皇族降下ノ細規ヲ定ム、其ノ原則ハ則チ皇室典範増補ノ明示スル所ナリ。而カモ得喪ノ判ル、所皇族ノ身位ニ關スル極メテ重大ナルヲ以テ茲ニ之ヲ詳著シ、勅旨ニ依ルノ外其ノ請願ヲナシ、又ハ勅許ヲ請フニ於テ遺算ナカラシムルノ必要アルナリ。五ニ曰ク、懲戒以テ皇族懲戒ノ概目ヲ定ム、皇族懲戒ノ處分ハ亦典範ニ掲グト雖モ、其ノ運用ニ於テ尙ホ整備ヲ圖ルノ必要アレバナリ。而シテ以上ノ諸章ニ條舉スル外仍テ皇族ノ身位ニ關スル事項ニシテ規定ヲ要スルモノアリ、之ヲ綜蒐シテ雜則トス。第六章是ナリ。

第一章 班 位

第一條 皇族ノ班位ハ左ノ順序ニ依ル

第一、皇 后

- 第二、太 皇 太后
- 第三、皇 太 后
- 第四、皇 太 子
- 第五、皇 太 子 妃
- 第六、皇 太 孫
- 第七、皇 太 孫 妃
- 第八、親王、親王妃、內親王、王、王妃、女王

恭デ按ズルニ、本條ハ皇室典範第三十條ノ規定ニ準據シ皇族ノ敍列ヲ昭示ス、但シ皇后ヲ以テ第一ニ置ケルハ承天ノ位ニ居リテ至尊ノ配タルニ由ル、而シテ太皇太后二人以上アルトキハ前者ヲ先ニス、是レ明文ヲ待テ始メテ知ラザルナリ。

第二條 親王、王ノ班位ハ皇位繼承ノ順序ニ從フ、內親王、女王ノ班位亦之ニ準ズ
前項ノ規定ニ依リ同順位ニ在ル者ハ男ヲ先ニシ女ヲ後ニス

恭デ按ズルニ、皇室典範第一章ニ於テ皇位繼承ノ順序ヲ定ム、從テ親王、王ノ班位ハ此ノ順序ニ從フヲ以テ大義ニ愜ヘルモノトス、內親王、女王ノ班位亦宜シク之ニ準ズ

皇族身位令定本

ベシ、同順位ノ義ハ皇室典範第八條ニ同等内トアルニ同ジ、所謂同等内ハ同親等内ノ謂ニ非ラズ、唯々混淆ノ虞アルヲ以テ茲ニ之ヲ沿用セズ、男ヲ先ニシ女ヲ後ニスルハ通義ニ從ヘルノミ

第三條

親王妃、王妃ノ班位ハ夫ニ次グ、内親王、女王ニシテ親王妃、王妃タル者亦同ジ
恭デ按ズルニ、婦ハ夫ノ身分ニ從フヲ以テ通義トス、而シテ内親王、女王ト雖モ親王妃、王妃タル以上ハ前條ノ規定ニ拘ラズ其ノ班位夫ニ次グベキハ當然トス

第四條

故皇太子ノ妃ノ班位ハ皇太子妃ニ次ギ、故皇太孫ノ妃ノ班位ハ皇太孫妃ニ次グ
親王、王ノ寡妃ノ班位ハ舊ニ依ル
恭デ按ズルニ、夫ノ死亡ニ因リテ妃ノ班位ニ變更ヲ來スハ死者ニ厚クスル所以ニ非ラズ、然レドモ故皇太子ノ妃又ハ故皇太孫ノ妃ニ至リテハ大義ニ於テ應ニ現皇嗣ノ配偶ニ先ツベカラザルナリ、故ニ本條先ヅ此ノ特例ヲ掲ゲ其ノ條ノ寡妃ノ班位ハ都テ舊ニ依ラシム

第五條
之ニ次グ

攝政タル親王、内親王、王、女王ノ班位ハ皇太妃孫ニ次ギ、故皇太孫ノ妃アルトキハ
恭デ按ズルニ、親王以下ニシテ攝政タル者ハ其ノ地位宜シク親王ノ首ニ班スベシ、故ニ皇太孫妃ニ次グ、但シ故皇太孫ノ妃アルトキ又之ニ次グコトトシタルハ前條ノ規定ニ由ル當然ノ結果タルナリ

第六條
親王、王皇位繼承ノ順序ヲ換ヘラレタルトキハ其ノ班位ハ舊ニ依ル

皇太子、皇太孫皇位繼承ノ順序ヲ換ヘラレタルトキハ其ノ班位ハ皇太孫妃ニ次ギ、故皇太孫ノ妃アルトキハ之ニ次ギ、攝政タル親王、内親王、王、女王アルトキハ又之ニ次グ
恭デ按ズルニ、皇太子、皇太孫ニシテ皇位繼承ノ順序ヲ換ヘラレタルトキハ其ノ班位ハ大義ニ於テ現在ノ皇太子、皇太孫及ビ其ノ配偶者ニ先ツコトヲ得ズ、故ニ皇太孫妃ニ次グ、仍テ之ヲ親王ノ首ニ班スルモノトシタルハ其ノ曾テ皇嗣タリシニ由ル、但シ攝政タル親王、内親王、王、女王アルトキ又之ニ次グ所以ハ前條規定ノ結果ニ外ナラザルナリ、而シテ親王、王ニシテ皇位繼承ノ順序ヲ換ヘラレタルトキハ其ノ班位舊ニ依ルモノトシタルハ皇嗣タル順位ニ在ル者必ズシモ皇嗣トシテ確定シタルニ非ラザレ

第七條 從來ノ宣下親王ハ其ノ宣下セラレタル順序ニ依リ王ノ上ニ列ス
恭デ按ズルニ、本條ハ明治二十二年二月十一日宮内省達ニ基キ特ニ宣下親王ノ爲ニ之ヲ規定ス

第二章 敍勳任官

第八條 皇后ハ大婚ノ約成リタルトキ勳一等ニ敍シ寶冠章ヲ賜フ
恭デ按ズルニ、大婚ノ約成リタルトキニ於テ既ニ勳章ノ敍賜アルト特ニ其ノ至尊ノ配タルベキ無上ノ尊榮ヲ表彰シ且ツ大禮舉行ノ日之ヲ佩用シテ以テ儀典ヲ莊重ナラシムコトヲ期スルニ在リ

第九條 皇太子、皇太孫ハ滿七年ニ達シタル後大勳位ニ敍シ菊花大綬章ヲ賜フ
恭デ按ズルニ、皇儲ノ尊榮ヲ表彰スルノ典ヲ其ノ滿七年ニ達シタルトキニ繋ケタルハ

着袴祝賀ノ舊例ニ酌ミ以テ今古儀文ノ變ヲ通ズルニ在リ

第十條 皇太子妃、皇太孫妃ハ結婚ノ約成リタルトキ勳一等ニ敍シ寶冠章ヲ賜フ
恭デ按ズルニ、本條ノ義第八條ニ同ジ、蓋シ儲闈ノ貴ハ皇后ニ亞グ、其ノ典宜シク坤宮ニ準ズベキヲ以テナリ

第十一條 親王ハ滿十五年ニ達シタル後大勳位ニ敍シ菊花大綬章ヲ賜フ
恭デ按ズルニ、親王ハ皇位繼承順序ノ及ブ所ニシテ皇儲ニ次グノ懿親タリ、本條故ニ第九條ニ準ズ、其ノ滿十五年ニ達シタルトキニ繋ケタルハ亦習行ノ例ニ稽ヘタルニ外ナラズ

第十二條 親王妃ハ結婚ノ禮ヲ行フ當日勳一等ニ敍シ寶冠章ヲ賜フ
恭デ按ズルニ、親王妃ニハ宜シク親王ノ勳章ニ相當スル最上ノ榮典ヲ授ケラルベシ、但シ結婚ノ禮ヲ行フ當日ニ於テスルモノトシタルハ應ニ皇后、皇太子妃、皇太孫妃ノ隆典ニ對シ稍ヤ差等ヲ示スベキニ由ル

第十三條 内親王ハ滿十五年ニ達シタル後勳一等ニ敍シ寶冠章ヲ賜フ

恭テ按ズルニ、内親王ノ敍賜ハ宜シク之ヲ親王ニ視ルベシ、本條故ニ第十一條ニ準ズ

第十四條 王ハ滿十五年ニ達シタル後勳一等ニ敍シ旭日桐花大綬章ヲ賜フ

第十五條 王妃ハ結婚ノ禮ヲ行フ當日勳二等ニ敍シ寶冠章ヲ賜フ

第十六條 女王ハ滿十五年ニ達シタル後勳二等ニ敍シ寶冠章ヲ賜フ

恭テ按ズルニ、王、王妃、女王ハ親王、親王妃、内親王ニ次グノ懿親タリ、榮典ノ度ニ於テ遞遜ナキコトヲ得ザルナリ

第十七條 皇太子、皇太孫ハ滿七年ニ達シタル後陸軍及ビ海軍ノ武官ニ任ズ

親王、王ハ成年式ヲ訖リタル後陸軍又ハ海軍ノ武官ニ任ズルコトアルベシ

恭テ按ズルニ、皇儲七年ニ達シタル後陸海軍ノ武官ニ任ズルハ即チ他日大元帥タルベキ素養ヲ成スニ在リ、親王、王成年式ヲ訖リタル後ニ在リテモ亦成ルベク武官ニ任ジ金枝ノ貴モ敢テ國家ニ效力スル所無クムバアラザルヲ昭カニシ且ツ尙武ノ雄風ヲ鼓勵

スルニ在リ

第十八條 天皇支系ヨリ入テ大統ヲ承クルトキハ前數條ノ規定ニ準ジ敍勳任官ヲ行フ

恭テ按ズルニ、天皇支系ヨリ入テ大統ヲ承クレバ其ノ皇后、皇太子以下ニ對スル敍勳任官ノ殊典ハ宜シク總テ前數條ノ規定ニ準ジテ之ヲ行フベシ、而シテ恩ヲ推シテ皇室典範第三十二條ニ據リ親王、内親王ノ號ヲ宣賜セラレタル皇兄弟姉妹ニ及ボスベキハ固ヨリ言ヲ待タザルナリ

第十九條 前數條ニ定メタルモノ及ビ特旨ニ由ルモノノ外勳章、記章、祝典章、記念章及ビ文

武官ニ關スル法令ハ皇族ニモ亦之ヲ適用ス

恭テ按ズルニ、勳章、記章、祝典章、記念章及ビ文武官ニ關スル法令ハ本令ニ特例アルモノヲ除ク外之ヲ皇族ニ適用スルヲ妨グズ、本條其ノ義ヲ昭カニス

第三章 失 踪

第二十條 戰時事變其ノ他ノ場合ニ於テ皇族ノ生死不明ナルトキハ勅旨ニ依リ其ノ財産ノ管理上必要ナル處分ヲ命ズ

恭デ按ズルニ、不在者ノ爲ニハ其ノ財産ノ管理方法ヲ定メザルベカラズ、不幸ニシテ皇族ニ此ノ事アリトセム乎其ノ必要ナル處分ヲ命ズルハ一ニ宜シク宸斷ニ由ルベシ、即チ或ハ財産管理人ヲ命ジテ之ヲ管理セシメ、或ハ其ノ他ノ方法ニ依リテ之ガ管理ヲナサシムベキナリ

第二十一條 皇族ノ生死不明ナルコト三年ニ互ルトキハ皇族會議及ビ樞密顧問ニ諮詢シテ勅裁ニ依リ失踪ヲ宣告スベシ

恭デ按ズルニ、失踪ノ宣告ハ普通法ノ規定少ナクモ七年ヲ經過スルヲ要ス、然レドモ皇位繼承ノ順序ノ及ブ所ヘ生死不明ニ由テ生ズル關繫甚重ニシテ法律上成ルベク速ニ之ヲ確定スルノ必要アリ常軌ニ拘スベカラザルヤ明ケシ、因テ定メテ三年トス、而シテ必ラズ皇族會議及ビ樞密顧問ノ諮詢ニ須ツハ事體最モ容易ナラザルヲ以テナリ

第二十二條 失踪ノ宣告ヲ受ケタル皇族ハ前條ノ期間滿了ノ時ニ薨去シタルモノト看做ス

恭デ按ズルニ、失踪一タビ宣告セラレタルトキハ其ノ宣告ハ既往ニ溯リテ效力ヲ生ズ故ニ其ノ皇族ハ三年ノ期間滿了ノ時ニ於テ薨去アリタルモノト看做スコトヲ要ス、蓋シ此ノ如クナラザレバ皇位繼承ノ順序及ビ凡テノ法律關係ニ付キ事實上ノ薨去ト全然同一ノ效力ヲ生ゼシムルコト能ハザレバナリ

第二十三條 失踪ノ宣告アリタル後生死ノ事實分明トナリタルトキハ勅裁ニ依リ其ノ宣告ヲ取消スベシ、但シ其ノ取消ハ失踪ノ宣告ニ基キタル事項及ビ行爲ニ其ノ效力ヲ及ボサズ

恭デ按ズルニ、失踪ノ宣告ハ生死不明ナルガ爲ニシテ發ス、故ニ生死ノ孰レヲ問ハズ其ノ事實分明トナリタルニ於テハ固ヨリ之ヲ取消スベキモノトス、然レドモ失踪ノ宣告ニ基キタル事項及ビ行爲ニ關シテハ此ノ取消ノ效力ヲ及ボスコトヲ得ズ、然ラザレバ則チ獨リ皇族ノ財産等ニ關シテナシタル行爲ヲ無效タラシメザルベカラザルノミナラズ相續モ亦無効ニ歸シ、萬一ヲ付度スルトキハ踐祚モ磐石ノ安キニ居ルコト能ハザルノ虞アルヲ以テナリ

第二十四條 失踪ノ宣告及ビ其ノ宣告ノ取消ハ宮内大臣之ヲ公告ス

恭デ按ズルニ、失踪ノ宣告及ビ其ノ宣告ノ取消ハ關係重大ナルヲ以テ宮内大臣之ヲ臣民ニ公ニシ皆聞知ラシムルナリ

第四章 降 下

第二十五條 皇室典範増補第一條ニ依ル請願ヲナスニハ王滿十五年以上タルコトヲ要ス

恭デ按ズルニ、請願ハ自由ノ意思ニ屬ス、他人之ヲ強制シ又ハ代リテ其ノ意思ヲ表示スルガ如キハ之ヲ請願ト謂フコトヲ得ズ、況ンヤ事身分ノ得喪ニ關スルヲヤ、故ニ本條愼意ヲ此ニ致シ未ダ滿十五年ニ達セザル旨ヲ認メテ自由ノ意思ヲ表示スルノ能力アルコト能ハザル者トシタリ、而シテ第三十條ト相待テ並ニ輕忽ノ悔ヲ貽スコトナカラシメムコトヲ期ス

第二十六條 皇室典範増補第一條ニ依リ華族ニ列セラレタル者ハ一家ヲ創立ス、同第四條ニ依リ臣籍ニ降サレタル者亦同ジ

恭デ按ズルニ、臣籍ニ降下スレバ斯ニ家アリ遵由ノ路必ラズ民法ニ依ル、而シテ民法ニ

於ケル一家創立ノ原因ハ未ダ皇族ノ臣籍降下ヲ認メズ、因テ本條ヲ規定ス

第二十七條 皇室典範増補第一條ニ依リ華族ニ列セラレタル者ニハ世襲財産ヲ賜フコトアルベシ

恭デ按ズルニ、世襲財産ヲ設定スルハ華族ノ必須條件ニ非ラズ、而カモ皇族ヨリ降下シテ華族ニ列セラレタル者ニ限り特ニ其ノ相當ノ恩賜アルコトヲ要スルハ潢裔ノ品位ヲ永遠ニ失墜セザラシメムコトヲ期スルニ在リ

第二十八條 皇室典範増補第二條ニ依リ王華族ノ家督相續人トナルニハ相續開始ノ後家督相續人トシテ指定又ハ選定アリタルコトヲ知リタル時ヨリ三個月内ニ勅許ヲ受クベシ

前項ニ依リ勅許ヲ受ケタルトキハ相續ノ單純承認ヲナシタルモノト看做ス
恭デ按ズルニ、王華族ノ家督相續人トナルコトヲ得トハ即チ王ヲ華族ノ家督相續人トシテ指定又ハ選定スルコトヲ得セシメタルモノナリ、普通法上家督相續人ノ指定又ハ選定ハ本人承諾ノ有無ニ拘ラズ當然其ノ效力ヲ生ジ、指定又ハ選定セラレタル者ニ在テハ惟々之ガ承認又ハ拋棄ヲナスコトヲ得ルノミ、而シテ王ハ則チ別ニ勅許ヲ請ハザ

ルベカラザルヲ以テ未ダ直ニ指定又ハ選定ノ効力ヲ生ゼシムルコト能ハズ、故ニ其ノ
勅許ヲ受クベキ期間ヲ定メテ以テ起算點ヲ明カニシ、華族ノ家督相續人タル地位ヲシ
テ長ク未定ニ懸在セシメザラムコトヲ期セリ、又指定選定ヲ受ケタル者苟クモ勅許ヲ
請フニ於テハ被相續人ニ屬シタル權利義務ヲ無限ニ承繼セザルベカラザルコトヲ省覺
スベキハ必然ナリ、因テ第二項ヲ置ク。

第二十九條 前條第一項ノ期間内ニ勅許ヲ受ケザルトキハ家督相續人トシテノ指定又ハ選定ハ
其ノ効力ヲ失フ

恭デ按ズルニ、前條規定ノ期間内ニ勅許ヲ請ハズ又ハ之ヲ請フモ宸允ヲ得ザルトキハ
家督相續人タルコトヲ得ズ、從テ其ノ指定又ハ選定ノ効力ヲ失フベキハ當然ノ結果ナ
リ。

第三十條 皇室典範增補第一條及ビ第二條ノ場合ニ於テ王未成年ナルトキハ請願ヲナシ又ハ勅
許ヲ請フニ先チ親權ヲ行フ父ノ同意ヲ受クベシ
親權ヲ行フ父ナキトキハ其ノ後見人及ビ親族會ノ同意ヲ受クベシ

恭デ按ズルニ、王請願ヲナスニハ既ニ第二十五條ノ規定アリ、然レドモ未成年者ナル
トキハ仍テ或ハ親權ニ服シ或ハ後見ニ付セラル、者ナルヲ以テ健全ナル意思ヲ表示シ
得ル者ト認ムルコトヲ得ズ、故ニ親權者又ハ後見人ノ同意ヲ受クルコトヲ要ス、華族ノ
家督相續人トナルノ勅許ヲ請フニ於テモ亦然リ、因テ本條ヲ規定シ以テ其ノ疎虞ニ備
フ。但シ後見人ハ間々或ハ本人ヲ視ルコト親權者ノ如ク厚カラザル者ナキヲ保セズ、
因テ併セテ親族會ニ及ブ。

第三十一條 皇室典範增補第二條ニ依リ華族ノ家督相續人トナルニ當リ王十五年未滿ナルトキ
ハ親權ヲ行フ父代リテ勅許ヲ請フコトヲ得

親權ヲ行フ父ナキトキハ其ノ後見人ニ於テ親族會ノ同意ヲ得テ勅許ヲ請フコトヲ得
恭デ按ズルニ、華族ノ家督相續人トシテ指定又ハ選定セラル、ハ必ズシモ王ノ童艸ニ
在ルト否トヲ問フコトナシ、而シテ未成年ノ王ノ爲ニハ既ニ前條ノ規定アリト雖モ、
十五年未滿ナルトキハ第二十五條ノ精神ヲ推シテ未ダ其ノ自ラ同意ヲ得且ツ勅許ヲ請
フノ能力ヲ有セザル者ト認メザルヲ得ズ、本條因テ親權者又ハ後見人ヲシテ之ニ代ハ
ルコトヲ得セシム、是レ家督相續人ヲ定ムルニ於テ已ムコトヲ得ザルノ權宜タルナリ。

第三十二條 皇室典範増補第二條ニ依リ華族ノ養子トナルニ當リ王十五年未滿ナルトキ其ノ勅許ヲ請ヒ且ツ縁組ノ承諾ヲナスニハ前條ノ規定ヲ準用ス

恭デ按ズルニ、華族ノ養子トナルハ華族ノ家督相續人トナルト理ニ於テ軒輊スル所ナシ、故ニ十五年未滿者ニシテ其ノ勅許ヲ請ヒ且ツ縁組ノ承諾ヲナスニハ總テ前條ノ規定ヲ準用シタリ。

第三十三條 皇室典範増補第二條ニ依ル養子縁組ハ勅許ナキトキニ限リ之ヲ無効トス

恭デ按ズルニ、勅許ニ由ルノ養子縁組ハ無効トナルガ如キコトアルヲ容レズ、故ニ普通法ノ範圍ニ就カシメズ其ノ無効ハ單ニ勅許ナキトキニ限レリ。

第三十四條 皇室典範増補第二條ニ依リ華族ノ養子トナリタル王離縁ノ場合ニ於テ直系尊屬ノ

臣籍ニ入り創立シタル家アルトキハ其ノ家ニ入り其ノ家ナキトキハ一家ヲ創立ス

恭デ按ズルニ、皇族一タビ臣籍ニ入ルトキハ皇族ニ復スルコトヲ得ザルハ不易ノ原則ニシテ、民法ノ養子縁組ニ因リテ他家ニ入りタル者離縁ノトキ實家ニ復籍スルノ制ハ

皇族ヨリ降下シテ華族ノ養子トナリタル者ニ適用スベカラズ、因テ本條ヲ置キ其ノ柄鑿ヲ通ズ。

第三十五條 臣籍ヨリ入りタル妃其ノ夫ヲ亡ヒタルトキハ請願ニ依リ勅許ヲ經テ實家ニ復籍スルコトヲ得

恭デ按ズルニ、臣籍ヨリ入りタル妃其ノ夫ヲ亡ヒタルトキハ、其ノ請願ニ依リ實家ニ復籍スルコトヲ得セシムルニ於テ何等ノ違碍アルヲ見ズ、其ノ結果適々前條ノ場合ト相反ス、蓋シ犢犢タル者ヲシテ其ノ意思ニ違ヒ終生ノ不幸ニ淪ラシムルハ情理俱ニ不可ナルヲ以テナリ。

第五章 懲 戒

第三十六條 皇族ノ懲戒ハ謹慎、停權及ビ剝權トス

恭デ按ズルニ、皇族懲戒ノ處分ハ皇室典範已ニ其ノ大綱ヲ擧グ、茲ニ之レガ細目ヲ備ヘ懲戒ヲ分チテ三種トス。

皇族身位令定本

第三十七條 謹慎ハ後來ヲ訓戒シ十日以上一年以下參内ヲ止ム、但シ特旨ニ由リ臨時參内ヲ命ゼラル、コトアルベシ

恭デ按ズルニ、謹慎ハ事情最モ輕キモノトシテ之レニ申飭ヲ加ヘ、一定ノ期間其ノ參内ヲ止メテ悛省スル所アラシム、特ニ皇室ノ大事等ニ際シ臨時參内ヲ命ゼラル、ノ必要アラムコトヲ慮リ、但書ヲ設ク。

第三十八條 停權ハ一年以上五年以下皇族特權ノ一部又ハ全部ノ行使ヲ停止ス

第三十九條 剝權ハ皇族特權ノ全部ヲ剝奪ス

恭デ按ズルニ、停權、剝權ハ皇室典範ノ規定ニ基キ茲ニ之ヲ釋疏シ、兼テ其ノ程度ヲ示明ス。

第四十條 皇族懲戒ヲ受ケ改悛ノ狀顯著ナルトキハ其ノ懲戒ノ一部又ハ全部ヲ解除スルコトアルベシ

恭デ按ズルニ、懲戒ノ目的ハ改悛ヲ期スルニ在リ、其ノ實既ニ舉ガルニ於テハ之ヲ解除スルハ固ヨリ其ノ所トス、因テ本條ヲ置ク。

第四十一條 皇族ノ懲戒及ビ其ノ解除ハ勅旨ニ依ル

停權及ビ剝權ノ懲戒及ビ其ノ解除ニ付テハ樞密顧問官及ビ宮内勅任官中ヨリ三名以上ノ委員ヲ勅選シ其ノ情狀ヲ審査セシメタル後皇族會議ニ諮詢シテ之ヲ勅裁ス

恭デ按ズルニ、皇族ノ懲戒及ビ其ノ解除ノ勅旨ニ依ルベキハ釋義ニ須ツコトナシ、停權及ビ剝權ノ處分ニ至テハ既ニ皇族會議ニ諮詢セララル、コトヲ要ス、則チ其ノ解除ニ付テモ亦同一ノ順序ニ依ルベシ、而シテ皇族會議ニ諮詢セララル、ニ先チ審査委員勅選ノコトヲ規定シタルハ、事皇室ノ懿親ニ關スルヲ以テ特ニ事實ノ查覈ヲ必要トスルモノアルヲ認メタルニ由ル。

第六章 雜 則

第四十二條 刑法、陸軍刑法及ビ海軍刑法ハ皇族ニモ亦之ヲ適用ス

恭デ按ズルニ、本條ニ掲グル法律ニ關シテハ皇族ノ爲、特別ノ刑例ヲ制定スルノ必要ヲ認メズ、故ニ舉テ之ヲ適用スルコト、セリ。

第四十三條 皇族ハ其ノ住所ヲ東京市内ニ定ムベシ、但シ必要アルトキハ勅許ヲ經テ他ニ住所ヲ定ムルコトヲ得

恭デ按ズルニ、皇族ハ宜シク常ニ鞆ニ密邇スベシ、故ニ其ノ住所ヲ宮城所在地タル東京市内ニ定ムルヲ原則トシタリ。

第四十四條 皇族ハ商工業ヲ營ミ營利ヲ目的トスル法人其ノ他ノ團體ノ社員、會員又ハ役員トナルコトヲ得ズ、但シ株主トナルハ此ノ限ニ在ラズ

恭デ按ズルニ、本條ノ禁ハ職トシテ皇族ノ尊嚴ヲ失墜シ累ヲ皇室ニ及ボスガ如キコトアルヲ防グニ在リ、株主トナリ又ハ農事、牧畜等ノ事業ニ從フガ如キハ斯ノ虞レナキモノトス、因テ之ヲ制限ノ外ニ置ケリ。

第四十五條 皇族ハ任官ニ依ル場合ヲ除ク外報酬ヲ受クル職ニ就クコトヲ得ズ

恭デ按ズルニ、任官ニ依ルニ非ラズシテ報酬ヲ受クル職ニ就クハ亦皇族ノ品位ニ關ス、故ニ之ヲ杜絶ス。

第四十六條 皇族ハ公共團體ノ吏員又ハ議員トナルコトヲ得ズ

恭デ按ズルニ、公共團體ハ動モスレバ事端ヲ滋クシ、且ツ其ノ吏員又ハ議員ハ概ネ選舉ニ依ル、皇族ニシテ之ニ膺ルガ如キハ又累ヲ皇室ニ貽サムコトヲ畏ル、其ノ身位ヲ保持スル所以ニ非ラザルナリ。

第四十七條 皇族ニシテ公益法人其ノ他營利ヲ目的トセザル團體ノ社員、會員又ハ役員トナラムトスルトキハ勅許ヲ受クベシ

恭デ按ズルニ、公益法人其ノ他營利ヲ目的トセザル團體ハ前諸條ノ比ニ非ラズ、時ニ或ハ皇族ノ其ノ社員、會員又ハ役員タルニ於テ事業獎勵ノ便益アルコトアラム、特ニ其ノ事業如何ヲ顧ミルノミ、往々ニシテ皇族ヲ翼戴シ以テ炫耀ニ資セムトスルモノナシトセズ、本條之レニ鑑ミ其ノ必ラズ勅許ヲ要スベキヲ定ム。

皇族列次令

第一條 皇族ノ列次左ノ如シ

- 第一、皇 后
- 第二、太皇 太后
- 第三、皇 太 后
- 第四、皇 太 子
- 第五、皇 太 子 妃
- 第六、皇 太 孫
- 第七、皇 太 孫 妃
- 第八、親王、親王妃、内親王、王、王妃、女王

恭デ按ズルニ、本條ハ皇族ノ敍列ヲ明示ス、但シ皇后ヲ以テ第一ニ置ケルハ承天ノ位

ニ居リテ至尊ノ配タルニ由ル。

太皇太后二人以上アルトキハ前者ヲ先ニス、皇太子妃二人以上アルトキハ寡妃ハ現皇太子妃ニ次ギ、寡妃相互ノ列次ハ太皇太后ノ例ニ同ジ、皇太孫妃之ニ倣フ

第二條 親王、王ノ列次ハ皇位繼承ノ順序ニ從フ、内親王、女王ノ列次亦之ニ準ズ、但シ同等

内ニ於テハ男ヲ先ニシ女ヲ後ニス

恭デ按ズルニ、皇族男子ノ列次ハ皇位繼承ノ順序ニ從フヲ以テ大義ニ愜ヘルモノトス、故ニ直系ノ幼者ハ傍系ノ長者ニ先ジ、皇族女子ノ列次ハ攝政ニ任ズルノ順序ニ依リ皇族男子ニ準ジ之ヲ定ム、同等内トハ皇室典範第八條ノ義ニ同ジ

第三條 攝政タル親王、内親王、王、女王ノ列次ハ皇太孫妃ニ次グ

恭デ按ズルニ、親王以下ニシテ攝政タル者ハ宜シク親王ノ首ニ班スベキナリ。

第四條 皇位繼承ノ順序ヲ換ヘラレタル者ノ列次ハ皇太孫妃ニ次ギ、攝政タル親王、内親王、王、女王アルトキハ之ニ次グ

皇族列次令

恭デ按ズルニ、皇位繼承ノ順序ヲ換ヘラレタル者ハ固ヨリ曾テ皇嗣タリシ者ナリ、故ニ親王ノ首ニ班ス、但シ攝政アル場合ハ宜シク攝政ノ次ギニ居ルベキナリ。

第五條 親王妃、王妃ノ列次ハ夫ニ次グ、内親王、女王ニシテ親王妃、王妃タル者亦同ジ親王妃、王妃夫ヲ亡ヒタルモ其ノ列次舊ニ依ル

恭デ按ズルニ、婦ハ夫ノ身分ニ從フヲ以テ通義トス、但シ一タビ得タルノ列次ハ夫ヲ亡ヒタルガ爲ニ變更スルコトナカルベキナリ。

第六條 從來ノ宣下親王ハ其ノ宣下順序ニ依リ王ノ上ニ列ス

恭デ按ズルニ、本條ハ明治二十二年二月十一日宮内省達ニ基キ特ニ宣下親王ノ爲ニ之ヲ規定ス、諸王ノ列次ハ本令ノ通規ニ從フモノトス。

皇室親族令立案要旨

第一章 總 則

一、本令其ノ他ノ皇室令ニ別段ノ定メアル場合ノ外左ニ掲ゲタル者ヲ以テ親族トナスコト

(イ) 血 族

(ロ) 配 偶 者

(ハ) 三親等内ノ姻族

二、天皇又ハ皇族ト臣籍ニ在ル者トノ間ニ在リテ血族ノ親族タル者ハ六親等内ニ限ルコト

三、庶子ハ母方ニ付テハ親子間ニ限リ之ヲ親族トナスコト

四、親等ノ算定ハ民法ト同ジク等數主義ニ因ルモノトシ男系ト女系トニ因リテ區別ヲ設ケザル

コト

- 五、繼母ト繼子及ビ其ノ直系卑屬、又嫡母ト庶子及ビ其ノ直系卑屬トノ間ニ於テハ血族間ニ於ケルト同一ノ親族關係ヲ生ズルコト、但シ繼母トハ前妻ノ子ヨリ實父ノ後妻ヲ謂ヒ、嫡母トハ庶子ヨリ實父ノ妻ヲ謂フモノトス
- 六、皇族ヨリ臣籍ニ在ル者ニ對スルノ外繼父ヲ認メザルコト
- 七、姻族關係、繼母ト繼子及ビ其ノ直系卑屬トノ親族關係、嫡母ト庶子及ビ其ノ直系卑屬トノ親族關係ハ離婚、再婚又ハ夫ヲ亡ヒタル妃ガ臣籍ニ入ルニ因リテ止ムコト
- 八、親族間扶養義務ニ付テハ別ニ規定ヲ要セザルコト

第二章 婚 嫁

第一節 大 婚

婚

- 一、大婚ノ禮ハ天皇滿十七年ニ達シタル後ニ於テ之ヲ行フコト (婚一)
- 二、天皇皇后ヲ立ツルハ皇族又ハ特ニ定ムル華族ノ女子滿十五以上ニシテ直系親族關係又ハ三親等内ノ傍系血族關係アラザル者ニ限ルコト、但シ第一章七ニ依リ親族關係ノ止ミタル後亦同ジ (婚二)

三、大婚ノ約ヲ成ストキハ賢所皇靈殿神殿ニ奉告シ奉幣使ヲ神宮、神武天皇山陵並ニ先帝、先
后ノ山陵ニ發遣スルコト (婚三)

四、大婚ノ約成リタルトキハ宮内大臣之ヲ公告スルコト (婚四)

五、大婚ノ禮ヲ行フ期日ハ宮内大臣之ヲ公告スルコト (婚五)

六、大婚ノ禮ヲ行フ當日之ヲ賢所皇靈殿神殿ニ奉告スルコト (婚六)

七、大婚ノ禮ハ賢所大前ニ於テ之ヲ行フコト (婚七)

八、立后ノ詔書ハ大婚ノ禮ヲ行フ當日之ヲ公布スルコト (婚八)

九、大婚ノ禮訖リタルトキハ天皇皇后ト共ニ皇靈殿神殿ニ謁スルコト (婚九)

十、大婚ノ禮訖リタルトキハ天皇皇后ト共ニ太皇太后、皇太后ニ謁スルコト (婚一〇)

十一、大婚ノ禮訖リタルトキハ天皇皇后ト共ニ宮中ニ於テ饗宴ヲ賜フコト (婚一一)

十二、大婚ノ禮ヲ行ヒタルトキハ天皇皇后ト共ニ神宮、神武天皇山陵並ニ先帝、先后ノ山陵ニ謁スルコト (婚一二)

十三、大喪中ハ大婚ノ禮ヲ行ハザルコト (婚一四)

十四、大婚ニ關スル記錄ハ圖書寮ニ於テ尙藏スルコト (婚一三、二) (皇族婚嫁ニ關スル記錄尙藏ノコトハ皇室典範第三十四條ニ規定アルヲ以テ次節ニ規定セズ)

十五、皇室婚嫁令第十三條第一項ノ規定ハ皇統譜令ニ讓ルコト

第二節 皇族 婚 嫁

- 一、皇族婚嫁ノ勅許ハ皇族其ノ約ヲ成ス前ニ於テ之ヲ奏請スルコト (婚一五)
- 二、皇太子、皇太孫、親王、王結婚ノ禮ハ賢所大前ニ於テ之ヲ行フコト (婚一六)
- 三、皇太子、皇太孫、親王、王結婚ノ禮訖リタルトキハ妃ト共ニ天皇、皇后、太皇太后、皇太后ニ朝見スルコト (婚一七)
- 四、皇太子、皇太孫ノ結婚ニハ第一節三、四、五、六、九、十一、十二ヲ準用スルコト (婚一八)
- 五、親王ノ結婚ニハ第一節五、九ヲ準用シ王ノ結婚ニハ同節九ヲ準用スルコト (婚一九)
- 六、皇族ノ婚嫁ハ其ノ當日宮内大臣之ヲ公告スルコト (婚二〇)
- 七、皇族ノ婚嫁ハ男子滿十七年、女子滿十五年ニ達スルニ非ラザレバ之ヲ成スヲ得ザルコト (婚二一)
- 八、皇族ノ婚嫁ハ直系親族關係又ハ三親等内ノ傍系血族關係アル者ノ間之ヲ成スヲ得ザルコト但シ第一章七ニ依リ親族關係ノ止ミタル後亦同ジ (婚二二)

- 九、皇族ノ婚嫁ハ大喪中及ビ直系尊屬並ニ配偶者ノ喪中之ヲ成スヲ得ザルコト (婚二三)
- 十、皇族ノ婚嫁ハ皇室典範第四十條ニ違フトキニ限り之ヲ無効トシ其ノ他婚嫁ノ無効及ビ取消ヲ認メザルコト (婚二四) (皇室婚嫁令第二十四條中皇室典範第三十九條トアルヲ除キタルハ之ニ違フトキハ勅許アルベキ理由ナキニ依ル)
- 十一、皇族婚嫁ノ效力ニ付テハ別ニ規定ヲ要セザルコト (民七八八乃至七九二)
- 十二、夫婦財産制ニ付テハ別ニ規定ヲ要セザルコト (民七九三乃至七九七)
- 十三、皇族ノ離婚ハ止ムコトヲ得ザル事故アル場合ニ限り之ヲ爲スヲ得ルコト、且ツ其ノ離婚ハ勅許ヲ要スルコト
- 十四、皇族ノ離婚ハ勅許ナキトキニ限り之ヲ無効トシ其ノ他離婚ノ無効及ビ取消ヲ認メザルコト (婚二五)
- 十五、皇族離婚ニ付キ協議整ハザルトキハ勅裁ヲ受クベキコト
- 十六、皇族ノ離婚ハ宮内大臣之ヲ公告スルコト
- 十七、皇室婚嫁令第二十六條ノ規定ハ皇統譜令ニ讓ルコト
- 十八、皇族男子ニ嫁シタル皇族女子離婚ノ場合ニ於テ直系尊屬ノ臣籍ニ入り創立シタル家アルトキハ其ノ家ニ入ルコト

十九、臣籍ヨリ入りタル妃離婚ノ場合ニ於テハ實家ニ復籍シ、復籍スベキ實家ナキトキハ一家ヲ創立スルコト

二十、臣籍ニ嫁シタル皇族女子離婚ノ場合ニ於テ直系尊屬ノ臣籍ニ入り、創立シタル家アルトキハ其ノ家ニ入り、家ナキトキハ一家ヲ創立スルコト

第三章 親

子

第一節 皇

子

一、皇子ノ誕生ニハ宮内大臣若クハ内大臣ヲシテ産殿ニ候セシムルコト(誕二)

二、皇子誕生シタルトキハ宮内大臣直ニ之ヲ公告スルコト(誕二)

三、皇子誕生シタルトキハ天皇之ニ名ヲ命ズルコト(誕三)

四、皇子ノ命名ハ其ノ當日宮内大臣之ヲ公告スルコト(誕四)

五、皇子ノ誕生命名ハ之ヲ賢所、皇靈殿神殿ニ奉告スルコト(誕五)

六、皇子誕生シテ五十日ニ至ルトキハ賢所、皇靈殿神殿ニ謁スルコト、但シ事故アルトキハ其ノ期ヲ延ブルコトヲ得(誕六)

- 七、皇子ニシテ嫡出ニアラザル者ハ生レナガラ之ヲ皇庶子トスルコト
- 八、皇室誕生令第十一條ノ規定ハ皇統譜令ニ讓ルコト

第二節 皇族ノ子

一、親王、王ノ子ノ誕生ニハ宮内高等官ヲ遣ハシ産所ニ候セシムルコト、但シ場合ニ依リ他ノ高等官ヲ以テ之ニ代フルコトヲ得(誕七)

二、皇太子、皇太孫ノ子誕生シタルトキハ天皇之ニ命ズベキ名ヲ賜フコト(誕八)

三、親王、王ノ子誕生シタルトキハ直系尊屬之ニ名ヲ命ズルコト(誕九)

四、皇太子、皇太孫ノ子ニハ第一節二、四、五、六ヲ準用シ其ノ他親王、王ノ子ニハ第一節二、四、

六ヲ準用スルコト(誕一〇)

五、親王、王ノ子ニシテ嫡出ニ非ラザル者ハ生レナガラ之ヲ庶子トスルコト

六、親王、王ノ嫡出子又ハ庶子タル身分ニ對シテハ宮内大臣ハ反對ノ事實ヲ主張スルヲ得ルコト

七、皇族ノ子未成年ノ間ハ父ノ親權ニ服スルコト、但シ未成年ノ間ト雖モ婚嫁シタルトキハ此

ノ限ニアラズ（民八七七二）

八、親權ヲ行フ父ニハ未成年ノ子ノ監護及ビ教育ヲ爲ス權義アルコト（民八七九）

九、親權ヲ行フ父ハ必要ナル範圍内ニ於テ未成年ノ子ヲ懲戒スルヲ得ルコト（民八八二）

十、親權ヲ行フ父ハ未成年ノ子ノ財産ヲ管理シ又其ノ財産ニ關スル法律行爲ニ付キ其ノ子ヲ代

表スルコト、但シ其ノ子ノ行爲ヲ目的トスル債務ヲ生ズル場合ニ於テハ本人ノ同意ヲ得ルヲ

要ス（民八八四）

十一、子ガ成年ニ達シ又ハ婚嫁ヲ爲シタルトキハ親權ヲ行ヒタル父ハ其ノ管理計算ヲ爲スコト

（民八九）未成年ノ王ガ皇室典範增補第一條、第二條、第四條ニ依リ臣籍ニ入ルトキ亦同ジ

十二、親權行使ノ停止、親權ノ喪失及ビ其ノ取消ハ勅旨ニ依ルコト（民八九六乃至八九九）

第四章 親 族 會

一、親族會ハ其ノ之ヲ要スル事件ノ本人ノ親族ヲ以テ組織スルコト

二、親族會員ハ三人又ハ五人トナスコト

三、親族會員ハ勅選ニ依ルコト、但シ未成年者ノ爲ニ設クル親族會員ハ親權ヲ行フ父ニ於テ遺

言ニ依リ之ヲ指定スルヲ得セシメ勅許ヲ受クルコト

四、後見人、保佐人及ビ婦女ハ親族會員タルヲ得ザルコト

五、親族會員ハ正當ノ事由アルトキハ勅許ヲ經テ之ヲ解スルヲ得ルコト

六、親族會員ハ勅旨ニ依リ之ヲ改任スルヲ得ルコト

七、無能力者ノ爲ニ設クル親族會ハ其ノ無能力ノ止ムマデ繼續スルコト

八、親族會ノ招集ハ本人、後見人、保佐人又ハ會員之ヲ招集スルコト、但シ最初ノ場合ヲ除ク

ノ外書面ヲ以テ其ノ決議ヲ求ムルヲ得セシム

九、親族會員ニ缺員ヲ生ジタルトキハ補缺員ノ勅選アルベキコト、但シ一時ノ故障ノ爲ニ定足

數ヲ得ル能ハザルトキハ臨時補充會員ヲ勅選ス

十、親族會ノ決議ハ會員ノ過半數ニ依ルコト

十一、會員ハ自己ノ利害ニ關スル事件ニ付キ表決ノ數ニ加ハルヲ得ザルコト

十二、本人、父母、配偶者、後見人及ビ保佐人ニハ親族會ニ於テ意見ヲ述ブルヲ得セシム、從

テ親族會ノ招集ハ之ニ通知スルヲ要スルコト、但シ書面ヲ以テ親族會ノ決議ヲ求ムルトキハ

本文ニ掲ゲタル者ノ意見モ亦書面ヲ以テ之ヲ懲ス

十三、親族會ノ決議ニ對シテ異議アルトキ又ハ親族會ガ決議ヲ爲ス能ハザルトキハ本人、後見

- 人、保佐人又ハ會員ヨリ勅裁ヲ仰グコト
- 十四、親族會ノ決議ハ之ヲ記録ニ存スルコト
- 十五、親族會ハ皇子ノ爲ニ之ヲ設ケザルコト

皇室親族令案

第一章 總 則

第一條 本令其ノ他ノ皇室令ニ別段ノ定メアル場合ノ外左ニ掲ゲタル者ヲ以テ親族トス

一、血 族

二、配 偶 者

三、三親等内ノ姻族

第二條 天皇又ハ皇族ト臣籍ニ在ル者トノ間ニ於テハ血族ハ六親等内ニ限り之ヲ親族トス

第三條 庶子ハ母方ニ付テハ親子間ニ限り之ヲ親族トス

第四條 親等ハ親族間ノ世數ヲ算シテ之ヲ定ム

傍系親ノ親等ヲ定ムルニハ其ノ一人又ハ其ノ配偶者ヨリ同始祖ニ遡リ其ノ始祖ヨリ他ノ一人

ニ下ルマデノ世數ニ依ル

第五條 姻族關係ハ離婚ニ因リテ止ム、寡妃再婚ヲナシ又ハ臣籍ニ入リタルトキ亦同ジ

第二章 婚 嫁

第一節 大 婚

第六條 大婚ノ禮ハ天皇滿十七年ニ達シタル後之ヲ行フ

第七條 天皇皇后ヲ立ツルハ皇族又ハ特ニ定ムル華族ノ女子滿十五年以上ニシテ直系親族又ハ

三親等内ノ傍系血族ニアラザル者ニ限ル、姻族關係ノ止ミタル後亦之ニ準ズ

第八條 大婚ノ約ヲ成ス當日之ヲ賢所皇靈殿神殿ニ奉告シ勅使ヲシテ神宮、神武天皇山陵並

先帝、先后ノ山陵ニ奉幣セシム

第九條 大婚ノ約成リタルトキハ宮内大臣之ヲ公告ス

第十條 大婚ノ禮ヲ行フ期日ハ宮内大臣之ヲ公告ス

第十一條 大婚ノ禮ヲ行フ當日之ヲ賢所皇靈殿神殿ニ奉告ス

第十二條 大婚ノ禮ハ別ニ定メタル式ニ依リ賢所大前ニ於テ之ヲ行フ

第十三條 立后ノ詔書ハ大婚ノ禮ヲ行フ當日之ヲ公布ス

第十四條 大婚ノ禮訖リタルトキハ天皇皇后ト共ニ皇靈殿神殿ニ謁ス

第十五條 大婚ノ禮訖リタルトキハ天皇皇后ト共ニ太皇太后、皇太后ニ謁ス

第十六條 大婚ノ禮訖リタルトキハ天皇皇后ト共ニ正殿ニ御シ朝賀ヲ受ク

第十七條 大婚ノ禮訖リタルトキハ天皇皇后ト共ニ宮中ニ於テ饗宴ヲ賜フ

第十八條 大婚ノ禮ヲ行ヒタルトキハ天皇皇后ト共ニ神宮、神武天皇山陵並 先帝、先后ノ山

陵ニ謁ス

第十九條 諒闇中ハ大婚ノ禮ヲ行ハズ

第二節 皇 族 婚 嫁

第二十條 皇族ノ婚嫁ハ男子滿十七年、女子滿十五年ニ達スルニアラザレバ之ヲ成スコトヲ得
ズ

第二十一條 皇族ノ婚嫁ハ直系親族又ハ三親等内ノ傍系血族ノ間ニ於テハ之ヲ成スコトヲ得ズ

第五條ノ規定ニ依リ姻族關係ノ止ミタル後亦同ジ

第二十二條 皇族婚嫁ノ勅許ハ其ノ約ヲ成ス前之ヲ奏請スベシ
第二十三條 皇太子、皇太孫、親王、王結婚ノ禮ハ別ニ定メタル式ニ依リ賢所大前ニ於テ之ヲ行フ

第二十四條 皇太子、皇太孫、親王、王結婚ノ禮訖リタルトキハ妃ト共ニ天皇、皇后、太皇太后、皇太后ニ朝見ス

第二十五條 皇太子、皇太孫ノ結婚ニハ第八條、第九條、第十條、第十一條、第十四條、第十七條、第十八條ノ規定ヲ準用ス

第二十六條 親王ノ結婚ニハ第十條、第十四條ノ規定王、ノ結婚ニハ第十四條ノ規定ヲ準用ス
第二十七條 皇族ノ婚嫁ハ其ノ當日宮内大臣之ヲ公告ス

第二十八條 皇族ノ婚嫁ハ大喪中及ビ直系尊屬ノ喪中之ヲ成スコトヲ得ズ
第二十九條 皇族ノ婚嫁ハ皇室典範第四十條ニ違フトキニ限り之ヲ無効トス

第三十條 皇族ハ止ムコトヲ得ザル事故アル場合ニ限り夫婦ノ協議ニ由リ勅許ヲ經テ離婚ヲナスコトヲ得、協議整ハザルトキハ勅裁ヲ受クベシ

第三十一條 皇族ノ離婚ハ勅許又ハ勅裁ナキトキニ限り之ヲ無効トス
第三十二條 皇族ノ離婚ハ宮内大臣之ヲ公告ス

第三十三條 皇族男子ニ嫁シタル皇族女子離婚ノ場合ニ於テ直系尊屬ノ臣籍ニ入り創立シタル家アルトキハ其ノ家ニ入ル

第三十四條 臣籍ヨリ入りタル妃離婚ノ場合ニ於テハ實家ニ復籍シ、復籍スベキ實家ナキトキハ一家ヲ創立ス

第三十五條 臣籍ニ嫁シタル皇族女子離婚ノ場合ニ於テ直系尊屬ノ臣籍ニ入り創立シタル家アルトキハ其ノ家ニ入り、家ナキトキハ一家ヲ創立ス

第三章 親 子

第一節 皇 子

第三十六條 皇子ノ誕生ニハ宮内大臣又ハ内大臣ヲシテ産殿ニ候セシム

第三十七條 皇子誕生シタルトキハ宮内大臣直ニ之ヲ公告ス

第三十八條 皇子誕生シタルトキハ天皇之ニ名ヲ命ズ

第三十九條 皇子ノ命名ハ其ノ當日宮内大臣之ヲ公告ス

第四十條 皇子ノ誕生命名ハ之ヲ賢所皇靈殿神殿ニ奉告ス

第四十一條 皇子誕生シテ五十日ニ至ルトキハ賢所皇靈殿神殿ニ謁ス、但シ事故アルトキハ其ノ期日ヲ延ブルコトヲ得

第四十二條 皇子ニシテ嫡出ニアラザル者ハ之ヲ皇庶子トス

第二節 皇族ノ子

第四十三條 皇太子、皇太孫、親王、王ノ子ノ誕生ニハ宮内高等官ヲ遣ハシ産所ニ候セシム、但シ場合ニ依リ他ノ高等官ヲ以テ之ニ代フルコトヲ得

第四十四條 皇太子、皇太孫ノ子誕生シタルトキハ天皇之ニ命ズベキ名ヲ賜フ

第四十五條 親王、王ノ子誕生シタルトキハ直系尊屬之ニ名ヲ命ズ

第四十六條 皇太子、皇太孫ノ子ニハ第三十七條、第三十九條、第四十條、第四十一條ノ規定

親王、王ノ子ニハ第三十七條、第三十九條、第四十一條ノ規定ヲ準用ス

第四十七條 皇太子、皇太孫、親王、王ノ子ニシテ嫡出ニアラザル者ハ之ヲ庶子トス

第四十八條 皇族ノ嫡出子又ハ庶子タル身分ニ對シテハ皇族又ハ宮内大臣ハ反對ノ事實ヲ主張スルコトヲ得、其ノ手續ハ皇室裁判令ノ定ムル所ニ依ル

第四章 親 權

第四十九條 皇族ノ子未成年ノ間ハ父ノ親權ニ服ス、但シ婚嫁ノ後ハ此ノ限ニ在ラズ

第五十條 親權ヲ行フ父ハ未成年ノ子ノ監護及ビ發育ヲ爲ス權利ヲ有シ義務ヲ負フ

第五十一條 親權ヲ行フ父ハ必要ナル範圍内ニ於テ未成年ノ子ヲ懲戒スルコトヲ得

第五十二條 親權ヲ行フ父ハ未成年ノ子ノ財産ヲ管理シ又其ノ財産ニ關スル行爲ニ付キ其ノ子ヲ代表ス

第五十三條 子ノ養育及ビ財産ノ管理ノ費用ハ其ノ子ノ財産ノ收益ト之ヲ相殺シタルモノト看做ス

第五十四條 禁治産者、準禁治産者及ビ停權又ハ剝權ノ懲戒ヲ受ケ其ノ解除ヲ得ザル者ハ親權ヲ行フコトヲ得ズ

第五十五條 父親權ヲ行フニ適セザルトキハ勅旨ニ依リ其ノ親權ノ一部又ハ全部ノ喪失ヲ命ズ

第五十六條 前條ノ親權喪失ノ原因止ミタルトキハ勅旨ニ依リ復權ヲ命ズ

第五章 親 族 會

第五十七條 親族會ハ會議ヲ要スル事體ノ本人ノ親族ヲ以テ之ヲ組織ス

第五十八條 親族會員ハ三人又ハ五人トス

第五十九條 親族會員ハ勅選ニ由ル

未成年者ノ爲ニ設クル親族會ノ會員ハ親權ヲ行フ父遺言ニ依リ之ヲ指定スルコトヲ得

前項ニ依リ指定セラレタル者ノ就職ハ遺言執行者ニ於テ其ノ勅許ヲ受クベシ

第六十條 後見人、保佐人及ビ女子ハ親族會員タルコトヲ得ズ

第六十一條 親族會員ハ正當ノ事由アルトキハ勅許ヲ經テ辭任ヲナスコトヲ得

第六十二條 親族會員ノ解任ハ勅旨ニ由ル

第六十三條 無能力者ノ爲ニ設ケタル親族會ハ其ノ者ノ無能力中繼續ス

第六十四條 親族會ハ本人、後見人、保佐人又ハ會員之ヲ召集ス、但シ書面ヲ以テ決議ヲ求ム

ルコトヲ得

第六十五條 親族會ノ決議ハ會員ノ過半数ニ依ル

第六十六條 親族會員ハ自己ノ利害ニ關スル事件ニ付キ表決ノ數ニ加ハルコトヲ得ズ

第六十七條 本人、父母、配偶者、後見人及ビ保佐人ハ親族會ニ於テ意見ヲ述ブルコトヲ得

親族會ノ召集ハ前項ニ掲ゲタル者ニ之ヲ通知スベシ

第六十八條 書面ヲ以テ親族會ノ決議ヲ求ムルトキハ前條ニ掲ゲタル者ノ意見モ亦書面ヲ以テ之ヲ徵スベシ

第六十九條 親族會ノ決議ニ對シテ異議アルトキ又ハ親族會決議ヲナスコト能ハザルトキハ本人、後見人、保佐人又ハ會員ニ於テ勅裁ヲ受ク

第七十條 親族會ノ決議ハ之ヲ記録ニ存スベシ

皇室親族令義解案

恭デ按ズルニ、本邦古來ノ親族制ハ父系ヲ以テ親族構成ノ基礎トシ、母族、妻族ハ之ヲ外親トシテ其ノ階級ヲ次シ、彼此ノ地位ニ大ニ差等ヲ設ク、是レ其ノ源ヲ周制ニ發シ、封建制度ノ行ハル、ニ及ンデ倍々其ノ根基ヲ鞏固ニシ、以テ歷世牢トシテ援クベカラザルノ因習ヲナセルハ、大寶ノ儀制令ヲ首トシ、近世京家、武家服紀ノ制ニ就テ之ヲ見ルモ明カナリ。然レドモ運會風氣ノ推遷、人文智識ノ發達ハ復タ周制ニ繇來セル階級制度ヲ以テ親族關係ヲ區劃スルノ標準トナスコトヲ許サズ、抑モ皇室ハ臣庶ノ仰瞻スル所、故ニ其ノ親族ノ制モ亦億兆ノ楷模タルコトヲ要ス。茲ニ皇室ノ親族關係ヲ定メ親々ノ誼ハ宜シク父母兩系平等ノ倫序ニ從フベキヲ昭カニセリ。惟フニ皇位ノ繼承一ニ男系ニ依ルハ國體上ノ大本ニシテ、其ノ義炳焉天壤ト與ニ之ヲ易フルコトナシ。而カモ本令ニ定ムル親族相互ノ關係ハ初メヨリ此ノ大本ト相悖ラズ、適々相待テ

以テ大統ヲ徵明ニスルノ基ヲナスナリ。本令ハ分チテ正章トス、一ニ曰ク、總則以テ親族ノ範圍ヲ定メ因テ親族關係ノ基ヅク所ヲ明カニス。古來ノ因習ハ繼父母ト繼子ト又嫡母ト庶子トノ間ニ親子間ニ於ケルト同一ノ親族關係ヲ有スルモノトシ、普通法ニモ亦現ニ之ヲ認メテ以テ條文ニ掲グル所アリト雖モ、是レ主トシテ家族制度ヲ基トスルノ結果ニシテ、皇室ニ在テハ惟々其ノ間ニ姻族關係ノ存在セルモノトスル外斯ノ如キ異例ノ血族ヲ認ムルノ必要ナキナリ。二ニ曰ク、婚嫁以テ大婚及ビ皇族ノ婚嫁ニ關スル事項ヲ定ム。顧フニ婚嫁ニ關シ曩ニ皇室婚嫁令ノ制定アリタルハ實ニ時須ノ急ニ應ズルノ必要アリシニ由ル。而シテ婚嫁ノコトタル親族關係發生ノ原因ナルヲ以テ、本令ノ制定アルニ當リテハ宜シク其ノ一部ヲナスベキモノナリ。因テ再ビ查校ヲ加ヘ多少ノ修正ヲ施シ之ヲ本令中ニ編制シタリ。三ニ曰ク、親子以テ親子ノ關係ヲ定ム。其ノ誕生ノ規定ニ關シテハ皇室誕生令亦既ニ公布セラレタリト雖モ、此レ又親族關係ノ一原因タルヲ以テ茲ニ編入ス。其ノ修補ノ條項アルハ一ニ前章ニ同ジ。四ニ曰ク、親權以テ未成年ノ子ニ對スル父ノ親權ヲ定ム。原ヌルニ親權ノ根據ハ親子間自然ノ關係ニ發ス、然レドモ之ヲ法規ニ掲ゲズムバ親子モ猶ホ且ツ均等ノ地位ニ立ツベクシテ親ニ此ノ親權アルコトヲ認ムル能ハザレバナリ。此ノ親權ハ又皇室典範第三十五條天

皇監督ノ規定ト相礙グルモノニ非ラズ、其ノ義典範第三十七條ニ於テ特ニ皇族男女幼年ニシテ父ナキ者ノ爲ニスルノ條規ヲ掲ゲタルニ視テ明白ナリトス。五ニ曰ク、親族會以テ無能力者保護ノ爲メ必要ナル監督機關ヲ定ム。蓋シ是等無能力者ヲ保護スルハ後見人又ハ保佐人アリト雖モ、一人專斷ノ弊竇ヲ防範スルニハ本人ノ爲メ其ノ利害ヲ判斷スルコト最モ緊切ナル機關ナカルベカラザルヲ以テナリ。皇族會議ノ制ハ皇室ニ關スル重要ノ事項ヲ諮詢スルノ機關ニシテ無能力者ノ保護ノ如キ煩細ヲ以テ一其ノ議ヲ經シムルハ體ヲ得タルモノニ非ラズ、親族會ヲ置ク所以此ニ在ルナリ。

第一章 總 則

第一條 本令其ノ他ノ皇室令ニ別段ノ定メアル場合ヲ除ク外左ニ掲ゲタル者ヲ以テ親族トス

- 一、血 族
- 二、配 偶 者
- 三、三親等内ノ姻族

恭デ按ズルニ、親族ノ制諸ヲ典章ニ見ルハ實ニ大寶儀制令ヲ以テ始メトス。中世以還

假服服忌ノ令乃至維新後ノ制定ニ係ハル新律綱領、改定律例、現行刑法等ノ親族例皆之ニ根セザルハナシ。而シテ儀制令ニ載スル所ノ等親制ハ古今異軌ニシテ之ヲ襲用スベカラズト雖モ、其ノ一定ノ範圍内ニ在ル血族及ビ姻族ト配偶者トヲ合セテ親族トナスノ主旨ニ至テハ寧ロ之ニ依準スルノ最便ナルヲ見ル。故ニ普通法亦之ニ倣フ、顧フニ普通法ハ積習ヲ酌ミ時宜ニ衷シテ親族ノ範圍ヲ定メ、血族ハ六親等以内、姻族ハ三親等以内ニ限レリ。然レドモ皇室典範既ニ百世皇族ノ原則ヲ取ル、則チ血族ニ在テハ親等ノ遠近ヲ問ハズ、理應ニ認メテ以テ親族トナスベシ、其ノ條ハ普通法ト異ナリタル規定ヲ設クルノ必要ヲ認メザルナリ。

第二條

天皇又ハ皇族ト臣籍ニ在ル者トノ間ニ於テハ血族ハ六親等内ニ限リ之ヲ親族トス。恭デ按ズルニ、凡ソ血族皆親族タルハ特ニ皇族ニ限ル、即チ名ヲ玉牒ニ挂クル者ニ就テ之ヲ言フノミ。皇室ト臣籍ニ在ル者トノ間ニ於テハ遵由ノ路既ニ異ナル、何ゾ皇室ノ特例ヲ推シテ普ク之ヲ臣籍ニ在ルノ親族ニ及ボスコトヲ得ムヤ、因テ其ノ親族トナスベキ血族ヲ普通法ト同ジク六親等内ニ限定セリ。

第三條 庶子ハ母方ニ付テハ親子間ニ限り之ヲ親族トス

恭デ按ズルニ、皇室ノ尊嚴ハ庶子ノ母黨ニ對シ親族關係ノ存在ヲ認ムルコトヲ容レズ特ニ其ノ親子間ニ限り之ヲ親族トシタルハ獨リ斯ノ至親ノ誼ノミ、未ダ公ヲ以テ私ヲ廢スベカラザルニ由ルナリ。

第四條 親等ハ親族間ノ世襲ヲ算シテ之ヲ定ム、傍系親ノ親等ヲ定ムルニハ其ノ一人又ハ其ノ

配偶者ヨリ同始祖ニ遡リ、其ノ始祖ヨリ他ノ一人ニ下ルマデノ世襲ニ依ル

恭デ按ズルニ、古來等親ノ制ハ專ラ重キヲ父系ニ置キ、餘ハ則チ名分恩義ニ顧ミ一種ノ階級ヲ定メ、其ノ階級ヲ以テ親等トナシタルノ觀アリ。然レドモ今ノ時ニ方リテハ親等ハ即チ親系ノ遠近ヲ知ルノ標的タルベクシテ、上下ノ階級ヲ分ツノ準繩トナスベキニ非ラズ。父系ト母系トノ間ニ鴻溝ヲ畫スルガ如キハ尤モ今日ノ彝倫ニ非ラザルナリ、故ニ普通法ト同ジク斷ジテ世襲算定ノ制ニ從フ。

第五條 姻族關係ハ離婚ニ因リテ止ム、寡妃再婚ヲナシ又ハ臣籍ニ入りタルトキ亦同ジ

恭デ按ズルニ、凡テ婚嫁ハ姻族關係ヲ生ズ、故ニ婚嫁ニシテ解消スルトキハ姻族關係

亦止ムベキハ固ヨリ其ノ所トス。然レドモ此ノ義ヲ推シテ夫婦ノ一方ノ薨去ニ因リ婚嫁解消ノ不幸ヲ見ル場合ニ及ボスニ於テハ情理ニ悖リ習俗ニ及ス、本條因テ姻族關係ノ消滅ヲ離婚及ビ寡妃ノ再婚又ハ臣籍ニ入りタル場合ニ限レリ。

第二章 婚 嫁

第一節 大 婚

第六條 大婚ノ禮ハ天皇滿十七年ニ達シタル後之ヲ行フ

恭デ按ズルニ、皇室典範ニ於テ天皇及ビ皇儲ノ成年ヲ定メテ特ニ滿十八年トシタルハ神器ノ繫ル所通法ニ拘スベカラザルガ故ナリ。婚姻ノ年紀ニ至テハ固ヨリ上下同軌ナルヲ妨ケズ、故ニ普通法ト其ノ規定ヲ一ニス。

第七條 天皇皇后ヲ立ツルハ皇族又ハ特ニ定ムル華族ノ女子滿十五年以上ニシテ直系親族又ハ

三親等内ノ傍系血族ニ非ラザル者ニ限ル、姻族關係ノ止ミタル後亦之ニ準ズ

恭デ按ズルニ、神武天皇ノ皇后媛蹈鞬五十鈴媛命ハ事代主神ノ女ニシテ素戔嗚尊ノ裔

タリ、族ヲ以テスレバ正ニ對等ニ居リ、誼ヲ以テスレバ仍テ皇親ニ屬ス、爾來多ク之ヲ皇親ニ拜フ、臣籍ノ女子ヲ采ルハ聖武天皇藤原不比等ノ女安宿媛ヲ立テテ皇后トナスニ昉マル、今皇族ノ外特定ノ華族ニ限ルハ則テ此ニ取ルナリ。但シ直系親族又ハ三親等内ノ傍系血族ト相渉ルベカラザルハ論ナシ。現行皇室婚嫁令未ダ其ノ範圍ヲ示サザルヲ以テ茲ニ之ヲ條文ニ昭著ス、女子ノ年齒ヲ滿十五年トシタルハ其ノ義前條ニ同ジ。

第八條 大婚ノ約ヲ成ス當日之ヲ賢所皇靈殿神殿ニ奉告シ勅使ヲシテ神宮、神武天皇山陵並ニ先帝、先后ノ山陵ニ奉幣セシム

恭デ按ズルニ、大婚ノ約ヲ成スニ際シ賢所皇靈殿神殿ノ奉告及ビ勅使奉幣ノ條規ヲ定メタルハ神祇ヲ崇奉シ祖宗ニ敬事スル列聖ノ遺法ニ基ヅキ、大孝ヲ申べ、大禮ヲ重ズル所以ナリ。本條現行婚嫁令ト少シク其ノ文字ヲ異ニシタルハ意義ヲシテ益々明瞭ナラシメムコトヲ期シタルノミ。若シ太皇太后、皇太后猶ホ在ストキハ天皇ハ自ラ當ニ成約ノ前ニ於テ親シク啓告シテ其ノ允諾ヲ求ムル所アルベシ。而カモ此レ固ヨリ之ヲ條規ニ著スノ要ナキモノナリ。

第九條 大婚ノ約成リタルトキハ宮内大臣之ヲ公告ス

第十條 大婚ノ禮ヲ行フ期日ハ宮内大臣之ヲ公告ス

恭デ按ズルニ、大婚ノ慶事ハ皇室ノ大典ナリ、故ニ宮内大臣ヲシテ一再之ヲ公告セシムルハ以テ臣民ノ翹企ノ饜カシムルナリ。

第十一條 大婚ノ禮ヲ行フ當日之ヲ賢所皇靈殿神殿ニ奉告ス

恭デ按ズルニ、奉告ノ典既ニ成約ヲ告グ又立后ヲ告グ、並ニ禮ニ於テ其ノ儀ヲ鄭重ニスル所以ナリ。

第十二條 大婚ノ禮ハ別ニ定メタル式ニ依リ賢所大前ニ於テ之ヲ行フ

恭デ按ズルニ、中世以來立后式ニハ宣命使兼宣旨使、策命使、調度使等アリ、入内式ニハ御書使、薰物使アリ、又夜御殿渡御ノ儀アリ、三個夜餅獻供ノ儀アリ、願フニ大婚ハ德ヲ天地ニ合シ象ヲ日月ニ配ス、最モ莊重ニ其ノ禮ヲ行ハザルベカラズ、因テ賢所大前ニ於テ皇祖皇宗ニ對シ誓盟ヲナスヲ以テ大禮ノ主要トシ、仍テ本朝ノ典故ヲ酌存シテ附隨ノ儀注トシタリ。

第十三條 立后ノ詔書ハ大婚ノ禮ヲ行フ當日之ヲ公布ス

恭デ按ズルニ、本條ハ皇室典範第十六條ノ明文ニ遵ヒ詔書公布ノ時期ヲ昭定ス。

第十四條 大婚ノ禮訖リタルトキハ天皇皇后ト共ニ皇靈殿神殿ニ謁ス

第十五條 大婚ノ禮訖リタルトキハ天皇皇后ト共ニ太皇太后、皇太后ニ謁ス

恭デ按ズルニ、天皇皇后ト共ニ祖宗及ビ尊親ニ謁スルハ即チ此ノ時ヲ以テ始トス。

克敬ノ道ヲ盡クスハ宜シク其ノ始メヲ崇重スベシ、故ニ特ニ之ヲ掲グ。

第十六條 大婚ノ禮訖リタルトキハ天皇皇后ト共ニ正殿ニ御シ朝賀ヲ受ク

恭デ按ズルニ、此レ亦兩聖受朝ノ始ナリ、現行婚嫁令之ヲ不文ニ置クモ著シテ永久ニ襲用スベキノ式典トナスニ如カズ、因テ之ヲ補ス。

第十七條 大婚ノ禮訖リタルトキハ天皇皇后ト共ニ宮中ニ於テ饗宴ヲ賜フ

恭デ按ズルニ、本條ハ上下慶ヲ俱ニシ中外驩ヲ同ジクスルノ義ヲ昭カニス、在昔所謂立后節會ノ精神ニ基ツキ茲ニ其ノ儀ヲ豊盛ナラシム。

第十八條 大婚ノ禮ヲ行ヒタルトキハ天皇皇后ト共ニ神宮、神武天皇山陵並ニ先帝、先后ノ山

陵ニ謁ス

恭デ按ズルニ、大婚ノ約ヲ成スニ方リ既ニ遣使奉幣ノ儀アリ、其ノ禮行ハレタルニ及ビ特ニ親巡展謁ノ規定ヲ設クルハ第八條ト終始ヲ相爲ス所以ナリ。

第十九條 諒闇中ハ大婚ノ禮ヲ行ハズ

恭デ按ズルニ、天皇先帝、先后其ノ他直系尊屬ノ喪ニ居ルヲ諒闇ト謂フ。往昔諒闇中ニ立后ノ禮ヲ行ヒシ先例罕ニ之アリト雖モ、以テ後昆ノ範トナスベカラザルナリ。

第二節 皇族婚嫁

第二十條 皇族ノ婚嫁ハ男子滿十七年、女子滿十五年ニ達スルニ非ラザレバ之ヲ成スコトヲ得ズ

第二十一條 皇族ノ婚嫁ハ直系親族又ハ三親等内ノ傍系血族ノ間ニ於テハ之ヲ成スコトヲ得ズ

姻族關係ノ止ミタル後亦同ジ

恭デ按ズルニ、婚嫁ノ年紀及ビ制限ハ其ノ義第六條、第七條ニ準ズ、現行婚嫁令未ダ姻族關係ノ止ミタル者ニ及バズ、今之ヲ補フ。

第二十二條 皇族婚嫁ノ勅許ハ其ノ約ヲ成ス前之ヲ奏請スベシ

恭デ按ズルニ、凡ソ皇族ノ婚嫁ハ必ラズ勅許ニ由ル、則チ其ノ允准ヲ請フハ亦必ラズ成約ノ前ニ在ルベシ、本條其ノ順序ヲ明示ス。

第二十三條 皇太子、皇太孫、親王、王結婚ノ禮ハ別ニ定メタル式ニ依リ賢所大前ニ於テ之ヲ行フ

恭デ按ズルニ、本條第十二條ト其ノ文ヲ同ジクスルニ拘ラズ準用ノ例ニ依ラザルハ大禮ノ主要タルノミナラズ附隨ノ儀注亦異ナルヲ以テナリ。

第二十四條 皇太子、皇太孫、親王、王結婚ノ禮訖リタルトキハ妃ト共ニ天皇、皇后、太皇太后、皇太后ニ朝見ス

恭デ按ズルニ、本條亦第十五條ノ義ニ外ナラズ、但シ皇儲以下ニ在テハ須ク先ヅ天皇皇后ニ朝見スベキヲ以テ特ニ之ヲ掲グ。

第二十五條 皇太子、皇太孫ノ結婚ニハ第八條乃至第十一條、第十四條、第十七條、第十八條ノ規定ヲ準用ス

恭デ按ズルニ、皇儲結婚ノ式ハ宜シク大婚ト其ノ盛ヲ媿フベシ、故ニ此ノ各條ヲ準用シ儀式ヲ莊重ニシタリ。

第二十六條 親王ノ結婚ニハ第十條、第十四條ノ規定王ノ結婚ニハ第十四條ノ規定ヲ準用ス
恭デ按ズルニ、親王ハ皇位繼承ノ順序、皇太子、皇太孫ニ次グモ常ニ儲副ニ居ル者ニ非ラズ、王ハ又之ニ次グ、故ニ大禮ノ主要ヲ除ク外大婚ノ規定ヲ準用スルハ本條掲グル所ノモノニ限ル。

第二十七條 皇族ノ婚嫁ハ其ノ當日宮内大臣之ヲ公告ス

恭デ按ズルニ、大婚ノ公布ハ立后ノ詔書ニ由ル、皇儲以下ニ在テハ則チ宮内大臣ノ公

告ヲ要ス、是レ皇室典範ノ定制ナリ、本條第十三條ト相待テ俱ニ其ノ當日ニ於テスベキヲ定ム。

第二十八條 皇族ノ婚嫁ハ大喪中及ビ直系尊屬ノ喪中ハ之ヲ成スコトヲ得ズ

恭デ按ズルニ、本條ノ義亦第十九條ニ同ジ、但シ現行婚嫁令ニ諒闇トアルヲ大喪ニ改メタルハ、皇后崩御ノトキノ如キ亦宜シク婚嫁ヲナスコトヲ得ザラシムベキヲ以テナリ。

第二十九條 皇族ノ婚嫁ハ勅許ナキトキニ限り之ヲ無効トス

恭デ按ズルニ、皇族婚嫁ノ宸裁ニ待ツハ防微杜漸ノ道ニシテ其ノ旨極メテ深遠ナリ、故ニ其ノ勅許ヲ經タルニ於テ之ヲ無効ニ歸セシムルガ如キコトアルヲ得ズ、若シ夫レ婚嫁ノ制限ヲ踰越シタル者ハ初メヨリ勅許アルベキ理ナシ、現行婚嫁令典範ノ第三十九條ヲ引クハ其ノ必要ヲ認メズ。

第三十條 皇族ハ止ムコトヲ得ザル事故アル場合ニ限り夫婦ノ協議ニ由リ勅許ヲ經テ離婚ヲナスコトヲ得、協議整ハザルトキハ勅裁ヲ受クベシ

恭デ按ズルニ、勅許ニ成ルノ結婚ハ其ノ離婚ニ於テ亦宸裁ヲ經ルコトヲ要スルハ當然ナリ、而シテ離婚ハ皇族ノ榮譽ニ關スル大ナルヲ以テ今定メテ必ラス止ムコトヲ得ザル事項アルトキニ限り協議ニ由リ勅許ヲ請フコトヲ得ベキヲ原則トシ、協議整ハザルトキハ勅裁ヲ受クベキモノトス。現行婚嫁令第二十五條ハ其ノ文簡的ニシテ適々協議整ハザルトキニ處スルノ道ナキモノノ如シ、因テ之ヲ修改ス。

第三十一條 皇族ノ離婚ハ勅許又ハ勅裁ナキトキニ限り之ヲ無効トス

恭デ按ズルニ、本條亦現行婚嫁令第二十五條ノ意ナリ、前條修改ノ結果之ヲ分チテ別ニ一條トス。

第三十二條 皇族ノ離婚ハ宮内大臣之ヲ公告ス

恭デ按ズルニ、婚嫁、誕生、薨去、總テ宮内大臣ノ公告ヲ要ス。則チ離婚ノトキ亦宜シク然ルベキナリ、本條之ヲ掲グルハ第二十七條ト始終ヲ爲スニ在リ。

第三十三條 皇族男子ニ嫁シタル皇族女子離婚ノ場合ニ於テ直系尊屬ノ臣籍ニ入り創立シタル

家アルトキハ其ノ家ニ入ル

恭デ按ズルニ、本條ニ掲グル皇族女子離婚ノトキハ其ノ直系尊屬タル者已ニ臣籍ニ降下シタルコトナキヲ保セズ、此ノ場合ニ於テ宜シク其ノ家ニ入ルベキハ皇室典範增補第三條規定ノ結果タルナリ。

第三十四條 臣籍ヨリ入りタル妃離婚ノ場合ニ於テハ實家ニ復籍シ、復籍スベキ實家ナキトキハ一家ヲ創立ス

恭デ按ズルニ、本條ハ皇室ヨリ離婚ニ由リテ應ニ臣籍ニ歸スベキ者ノ爲ニ之ヲ設ケ、其ノ普通法ノ範圍ニ就クベキコトヲ昭示ス。

第三十五條 臣籍ニ嫁シタル皇族女子離婚ノ場合ニ於テ直系尊屬ノ臣籍ニ入り創立シタル家アルトキハ其ノ家ニ入り、家ナキトキハ一家ヲ創立ス

恭デ按ズルニ、本條ノ理由ハ皇族身位令第三十四條ノ義ニ同ジ、蓋シ皇室典範增補第六條ノ原則ハ情ヲ以テ之ヲ奪フコト能ハザルヲ以テナリ。

第三章 親

子

第一節 皇

子

第三十六條 皇子ノ誕生ニハ宮内大臣又ハ内大臣ヲシテ産殿ニ候セシム

恭デ按ズルニ、皇子トハ皇男子、皇女子ヲ總稱シ、又嫡庶ヲ包含ス。在昔ノ皇子ノ誕生ニハ關白大臣等皇后ノ産殿ニ候スルコトアリ、今此ノ典例ヲ參酌シ宮内大臣若クハ内大臣ヲシテ往キテ之ニ候シ、其ノ狀ヲ具シテ回奏セシムルコトトス。

第三十七條 皇子誕生シタルトキハ宮内大臣直ニ之ヲ公告ス

恭デ按ズルニ、宮内大臣ノ公告ハ掲ゲテ皇室典範第三十三條ニ在リ、茲ニ其ノ時期ヲ示スハ第十三條、第二十七條ノ旨ニ同ジ。

第三十八條 皇子誕生シタルトキハ天皇之ニ名ヲ命ズ

恭デ按ズルニ、皇子ノ命名御撰ニ出ヅルハ古來ノ典例ナリ、命名ノ期日ハ大約誕生後第七日ニ於テス、其ノ餘別ニ宮號ヲ勅授シ、臣民ノ稱呼ニ便スルガ如キ習行ノ制ハ宜

皇室親族令義解案

シク舊ニ依ルベシ、惟々之ヲ掲グルヲ必要トセザルノミ。

第三十九條 皇子ノ命名ハ其ノ當日宮内大臣之ヲ公告ス

恭デ按ズルニ、本條ノ義第三十七條ニ同ジ。

第四十條 皇子ノ誕生命名ハ之ヲ賢所皇靈殿神殿ニ奉告ス

恭デ按ズルニ、吉慶ノ典ニ於テ總テ神祇祖宗崇奉ノ意ヲ昭カニシ以テ孝敬ヲ申ブルハ歴世ノ遵行スル所、維新以後皇子ノ誕生命名毎ニ奉告ノコトアルハ此ニ職由ス、今亦之ニ從フ。

第四十一條 皇子誕生シテ五十日ニ至ルトキハ賢所皇靈殿神殿ニ謁ス、但シ事故アルトキハ其ノ一期日ヲ延ブルコトアルベシ

恭デ按ズルニ、維新以後皇室ノ例皇子誕生後三十日ニ至レバ賢所皇靈殿神殿ニ謁ス、然レドモ在昔御宮參ノ式ハ多ク百二十日ニ於テ之ヲ行フ、今其ノ衷ヲ折シ五十日ト規定ス、亦古例ニ於ケル誕生後五十日ノ慶儀ヲ參酌シタリ。

第四十二條 皇子ニシテ嫡出ニ非ラザル者ハ之ヲ皇庶子トス

恭デ按ズルニ、皇子嫡出ニ非ザルモ其ノ誕生ノ場合ハ第三十六條ノ規定ニ依ル、故ニ生マレナガラニシテ之ヲ皇庶子トシ民法認知ノ制ヲ取ラズ。

第二節 皇族ノ子

第四十三條 皇太子、皇太孫、親王、王ノ子ノ誕生ニハ宮内高等官ヲ遣ハシ産所ニ候セシム、但シ場合ニ依リ他ノ高等官ヲ以テ之ニ代フルコトヲ得

恭デ按ズルニ、本條ノ義第三十六條ニ準ズ、此ノ場合ニ於テ宮内大臣ハ宮内高等官又ハ他ノ高等官ノ具申ヲ受ケ直ニ之ヲ執奏スベキナリ。

第四十四條 皇太子、皇太孫ノ子誕生シタルトキハ天皇之ニ命ズベキ名ヲ賜フ

恭デ按ズルニ、天皇賜名ノ典ヲ以テ特ニ皇太子、皇太孫ノ子ニ繫ケタルハ禮ニ於テ宜シク重キニ從フベキモノアルヲ以テナリ。

第四十五條 親王、王ノ子誕生シタルトキハ直系尊屬之ニ名ヲ命ズ

恭テ按ズルニ、親王、王ノ子ハ宜シク皇太子、皇太孫ノ子ト其ノ禮ヲ殊ニスベシ、故ニ賜名ノ典ニ與カラズ。

第四十六條 皇太子、皇太孫ノ子ニハ第三十七條、第三十九條乃至第四十一條ノ規定、親王、

王ノ子ニハ第三十七條、第三十九條、第四十一條ノ規定ヲ準用ス

恭テ按ズルニ、皇太子、皇太孫ノ子、親王、王ノ子ト各條ノ準用ヲ同ジクセザルハ亦前條ノ理由ニ外ナラズ。

第四十七條 皇太子、皇太孫、親王、王ノ子ニシテ嫡出ニ非ラザル者ハ之ヲ庶子トス

恭テ按ズルニ、本條亦第四十二條ニ準ズル第四十三條ト對觀シテ自ラ其ノ義ヲ知ルベシ。

第四十八條 皇族ノ嫡出子又ハ庶子タル身分ニ對シテハ皇族又ハ宮内大臣ハ反對ノ事實ヲ主張

スルコトヲ得

恭テ按ズルニ、皇族ノ嫡出子又ハ庶子タル身分ハ皇位繼承ノ繫ル所極メテ大、而シテ人事ノ測リ難キ萬一疑似ノ跡アルニ於テ其ノ事實ヲ精査シ、其ノ嫌疑ヲ定ムルノ途ナクムバ禍階即チ此ヨリ生ゼム。是レ本條ヲ置キ皇族又ハ宮内大臣ニ反對ノ事實ヲ主張スルコトヲ得セシムルコトトシタル所以ニシテ、其ノ手續ノ如キハ皇室民事訴訟令ニ於テ之ヲ明示ス。

第四章 親 權

第四十九條 皇族ノ子未成年ノ間ハ父ノ親權ニ服ス、但シ婚嫁ノ後ハ此ノ限ニ在ラズ

恭テ按ズルニ、親權ハ自然ノ天則ニ基ク、仍テ之ヲ本條ニ掲グルハ親ト雖モ法規ノ公認スル範圍内ニアラズバ子ノ自由ヲ制限スルコトヲ許スベカラザルニ由ル。即チ皇室典範第三十七條ノ規定ニ於テモ暗ニ幼年ノ皇族男女ニシテ父アル者ハ其ノ父ノ親權ニ服スベキコトヲ示セリ。其ノ但書ヲ設ケタルハ婚嫁ノ後ハ復タ親權ノ羈束ニ就クノ必要ナキヲ認メタルニ由ルノミ。

第五十條 親權ヲ行フ父ハ子ノ監護及ビ教育ヲ爲ス權利ヲ有シ義務ヲ負フ

恭デ按ズルニ、監護及ビ教育ハ相待テ子ノ身體ヲ保護スルノ權利及ビ義務ヲ組成ス、故ニ本條ヲ置ク。蓋シ權利ナルガ故ニ自己ノ任意ニ其ノ方法ヲ定メ、義務ナルガ故ニ之ヲ爲スコトヲ忘ルベカラザルナリ。

第五十一條 親權ヲ行フ父ハ子ノ居所ヲ指定スルコトヲ得

恭デ按ズルニ、居所ノ撰擇ハ子ノ監護及ビ教育ニ至大ノ關係ヲ有ス、從テ親權ヲ行フ父ヲシテ之ヲ指定スルコトヲ得セシムルハ、其ノ監護及ビ教育ノ責任ヲ完クセシムル所以ナリ。

第五十二條 親權ヲ行フ父ハ必要ナル範圍内ニ於テ子ヲ懲戒スルコトヲ得

恭デ按ズルニ、懲戒ヲ加フルコトヲ得ルハ國家公力ノ專權ニ屬ス、然レドモ親權ヲ行フ父ニ限り獨リ之ヲ假スコトヲ認ムルハ此ニ非ラズムバ其ノ監護及ビ保育ノ目的ヲ完クスルコト能ハザルモノアルヲ以テナリ。而シテ必要ナル範圍内ニ於テスト謂フ、過

度ノ懲戒ヲ加フルコトヲ認許セザルハ自ラ明カナリ。

第五十三條 親權ヲ行フ父ハ子ノ財産ヲ管理シ又其ノ財産ニ關スル行爲ニ付キ子ヲ代表ス

恭デ按ズルニ、未成年者ハ未ダ自ラ財産管理ノ能力ヲ有スルコト能ハズ、故ニ親權ヲ行フ父ヲシテ其ノ身體ノ監護及ビ保育ノ外財産ニ關シテモ之ヲ保護スルノ全權ヲ有セシムルコトトス、則チ之ニ關スル行爲ニ付キ其ノ子ヲ代表スルハ固ヨリ當然タルナリ。然レドモ皇太子、皇太孫ノ子ノ財産ニ關シテハ皇室財産令別ニ規定スル所アルヲ以テ本條ヲ適用スルノ限リニ在ラザルナリ。

第五十四條 親權ヲ行フ父ハ未ダ婚嫁セザル未成年ノ子ニ代リテ其ノ子ノ庶子ニ對シ親權ヲ行フ

恭デ按ズルニ、婚嫁シタル未成年ノ子ハ親權ニ服スル限ニ在ラズ、而シテ婚嫁セザル未成年ノ子ト雖モ亦庶子ナキコトヲ保セズ、此ノ場合ニ於テ躬ラ親權ニ服スルノ父ハ何ゾ其ノ子ニ對シ親權ヲ行フコトヲ得ンヤ、故ニ庶子ノ祖父ニシテ現ニ親權ヲ行ヘル者ヲ以テ之ニ代フ。

第五十五條 禁治產者、準禁治產者及ビ停權又ハ剝權ノ懲戒ヲ受ケ其ノ解除ヲ得ザル者ハ親權ヲ行フコトヲ得ズ

恭デ按ズルニ、本條ニ掲グル者ハ即チ親權ヲ行フノ資格ヲ缺ク、故ニ此ノ禁例ヲ設ク。

第五十六條 父親權ヲ行フニ適セザルトキハ勅旨ニ依リ其ノ親權ノ全部又ハ財産管理權ノ喪失ヲ命ズ

恭デ按ズルニ、父ノ親權ヲ行フニ適セザル場合ハ素行不修其ノ他ノ事由ニ依ル。而シテ其ノ事由亦自ラ輕重アリ、或ハ子ノ身體ヲ監護スルニ適スルモ、財産ノ管理ニ適セザルガ如キコトアルベシ。故ニ勅旨ニ依リ其ノ親權ノ全部又ハ財産管理權ノ喪失ヲ命ゼラルベキコトトセリ。

第五十七條 前條ノ親權喪失ノ原因止ミタルトキハ勅旨ニ依リ復權ヲ命ズ

恭デ按ズルニ、喪失ノ原因止ミタルトキ則チ復權スベキハ必然ノ理ニシテ、勅旨ニ依ルノ喪失ハ亦宜シク勅旨ニ依リテ之ヲ復スベキナリ。

第五章 親 族 會

第五十八條 親族會ハ會議ヲ要スル事件ノ本人ノ親族ヲ以テ之ヲ組織ス

恭デ按ズルニ、未成年者ニシテ親權ヲ行フベキ父ナキトキ又ハ成年以上ノ者ニシテ無能力者ナルトキハ爲ニ其ノ一身ノ利害ヲ計較シテ之ヲ主裁スル者ナシ。之ヲ後見人又ハ保佐人ノ專斷ニ任スルハ用意周到ヲ缺クノ慮ナシトセズ、故ニ親族會ヲ組織スルノ必要アリ、蓋シ親族會ハ本人ノ爲メ其ノ利害ヲ判斷スルニ最モ適切ナル機關タレバナリ、而シテ此レ專ラ無能力者ノ爲ニ設クルモノナルヲ以テ其ノ者ノ無能力ナル間之ヲ繼續スベキハ論ヲ俟タザルナリ。

第五十九條 親族會員ハ三人又ハ五人トス

恭デ按ズルニ、凡テ集議ノ決ヲ採ルハ會員ヲ奇數トスルヲ便トス、茲ニ三人又ハ五人ト限定シタルハ以テ煩雜ヲ防グナリ。

第六十條 親族會員ハ勅選ニ由ル

未成年者ノ爲ニ設クル親族會ノ會員ハ親權ヲ行フ父遺言ニ依リ之ヲ選定スルコトヲ得
前項ニ依リ選定セラレタル者ノ就職ハ遺言執行者ニ於テ其ノ勅許ヲ受クベシ

恭デ按ズルニ、勅選ニ由ルヲ原則トスルハ人選ノ公平且ツ適當ヲ得ンコトヲ期スルナ
リ。然レドモ親權ヲ行フ父ニシテ遺言ヲ以テ之ヲ選定シタル場合ニ在テハ其ノ選定シ
タル者ヲ勅許ニ依リ會員タルコトヲ得セシムルハ獨リ事ニ於テ害ナキノミナラズ、理
ニ於テ父ハ其ノ子ノ爲ニ最モ利益トナルベキ者ヲ選定スルモノト推定シ得ベケレバナ
リ。

第六十一條 後見人、保佐人、未成年者及ビ女子ハ親族會員タルコトヲ得ズ

恭デ按ズルニ、親族會員ハ既ニ勅選ニ由ルヲ原則トシ、親權者遺言ノ選定モ亦勅許ヲ
要件トス。則チ復タ其ノ適當ナラザルヲ恤ヘザルヲ以テ諸種缺格ノ場合ヲ指數スルノ
要ナシ。惟々後見人、保佐人ハ親族會ノ監督ヲ受クル者ナルガ故ニ、親族會員タルコ
トヲ得ザルハ素ヨリ其ノ所ナリ、未成年者及ビ女子ハ後見人タルコトヲ得ズ、又親權ヲ
行フコトヲ得ザル者ナルヲ以テ並ニ當然ノ缺格者トシテ明示スルノ必要ヲ認メタリ。

第六十二條 親族會員ハ正當ノ事由アルトキハ勅許ヲ經テ辭任ヲナスコトヲ得

恭デ按ズルニ、親族會員ニ勅選セラレ又ハ選定ニ由リテ勅許セラレタル者ハ即チ就職
スベキノ義務アリ、紊リニ之ヲ辭スベキニ非ラズ、本條因テ正當ノ事由アリテ勅許ヲ
受クルニ非ラザレバ辭任ヲ許サルコトヲ明カニセリ。

第六十三條 親族會員ノ辭任ハ勅旨ニ由ル

恭デ按ズルニ、親族會員ハ勅選又ハ勅許ニ依リテ就職ス、其ノ辭任亦宜シク勅旨ニ由
ルベキナリ。

第六十四條 親族會ハ本人、後見人、保佐人又ハ會員之ヲ招集ス、但シ書面ヲ以テ決議ヲ求ム
ルコトヲ得

恭デ按ズルニ、親族會ハ必要アル毎ニ後見人又ハ保佐人ノ職務ニ關シ開會スルモノナ
ルヲ以テ本人、後見人、保佐人ノ之ヲ招集スルハ當然ナリ、三者ノ外仍テ會員ノ招集
ヲ認メタルハ、三者ニ於テ招集セザル場合ト雖モ監督上之ヲ招集スル必要アルベキヲ

以テナリ。而シテ親族會ノ決議ハ書面ニ依リテモ亦之ヲ求メ得ベキコトトシタルハ簡易便捷ヲ圖ルニ在リ。

第六十五條 親族會ノ決議ハ會員ノ過半数ニ依ル

恭デ按ズルニ、本條ハ各種會議ノ通法ニ從ヒ決議ノ辦法ヲ示シタルノミ。

第六十六條 親族會員ハ自己ノ利害ニ關スル事件ニ付キ表決ノ數ニ加ハルコトヲ得ズ

恭デ按ズルニ、本條ハ親族會員回避ノ例ヲ示ス、苟クモ自己ノ利害ニ關スル事件ニ付テハ表決ノ持平ヲ缺クノ虞レアレバナリ。

第六十七條 本人、父母、配偶者、後見人及ビ保佐人ハ親族會ニ於テ意見ヲ述ブルコトヲ得

親族會ノ招集ハ前項ニ掲ゲタル者ニ之ヲ通知スベシ

恭デ按ズルニ、本條第一項ニ掲ゲタル者ハ皆親族會ノ議事ニ緊切ノ關係ヲ有ス、故ニ親族會ニ於テ意見ヲ述ブルコトヲ得セシム、從テ親族會ノ招集ヲナストキハ宜シク此等ノ者ニ知照スベキナリ。

第六十八條 書面ヲ以テ親族會ノ決議ヲ求ムルトキハ前條ニ掲ゲタル者ノ意見モ亦書面ヲ以テ之ヲ徵スベシ

恭デ按ズルニ、本條ハ第六十四條但書及ビ前條ニ基ヅク當然ノ辦法ナリ。

第六十九條 親族會ノ決議ニ對シテ異議アルトキ又ハ親族會決議ヲナスコト能ハザルトキハ本人、後見人、保佐人又ハ會員ニ於テ勅裁ヲ受クベシ

恭デ按ズルニ、親族會ノ議事ニ關シテハ其ノ決議ヲ以テ最終トシ、復タ之ヲ平反スルコトヲ得ザルモノトスルハ本人ノ保護ヲ完クスル所以ニ非ラズ、故ニ親族會ノ決議ニ對シテ異議アルトキハ其ノ決議ヲナスコト能ハザルトキト均シク、本人、後見人、保佐人又ハ會員ニ於テ勅裁ヲ受ケシムルコトトス。所謂決議ヲナスコト能ハザルトキトハ或ハ親族會員ノ出席數過半数ニ充タズ或ハ會員中ノ回避ニ依リテ表決數過半数ニ達セズ又或ハ會員ノ意見數端ニ岐異シ、何レモ過半数ヲ得ル能ハザル場合等即チ是ナリ。

第七十條 親族會ノ決議ハ之ヲ記録ニ存スベシ

恭デ按ズルニ、親族會ノ決議ハ他日ノ左券トスベキ必要アリ、因テ記録保存ノ事ヲ定ム。

英獨協商ト日露同盟

韓國及ビ福建省ヲ採ツテ之ヲ我が勢力範圍ノ下ニ置クハ我國方今ノ急務ナルベシト雖モ、而カモ威迫ニ依リ若クハ干戈ヲ以テ此ノ目的ヲ達セントスルニ至テハ、未ダ其ノ可ナルヲ知ラズ。是レ事ノ成ラザルガ故ニアラズ、策ノ拙ナルヲ以テ也。蓋シ兵力上ヨリ觀ルモ、將タ財政ノ點ヨリ察スルモ、露國ノ怖ル、ニ足ラザルヤ瞭ケシ。然レドモ之ト一タビ隙ヲ啓カン乎、縱令ヒ韓國ノミナラズ、滿洲ノ幾部ヲモ併セ獲ベシトスルモ、或ハ彼ノ「アルサース」「ロレース」ノ如ク、事毎ニ反目嫉視ノ媒介トナリ、兩國ノ間遂ニ永世解クベカラザルノ讐ヲ結ブニ至リ、遂ニ一塊肉ノ故ヲ以テ兩虎相反噬シテ共ニ仆ル、ノ奇觀ヲ呈スルモ亦知ルベカラズ。日露兩國ノ政治家ハ共ニ思ヒヲ茲ニ致サルベカラズ。

且ツ夫レ日露兩國ハ邦域相隣シ、其間嘗テ宿怨舊恨ノ存スルヲ觀ズ。唯々離間中傷ノ策ヲ弄スルモノアルニ由リ、時ニ市虎ニ謬ラレテ猜疑ノ念ヲ抱クモノアル而已、情意一タビ融解セバ

相互利害ノ離合スル所、却テ兩國ノ和親ヲ永遠ニ持續スルノ動機タラントス。事若シ茲ニ到ラバ朝鮮及ビ福建ノ事處シ難キヲ憂ヘザル也。

這般ノ英獨協商ハ實ニ日露兩國ノ相接近スベキ最好ノ機會ヲ與ヘタルモノト謂フベシ。抑モ該協商ガ如何ナル目的ニ出デタルヤ未ダ俄カニ斷定シ易カラズト雖モ、之ヲ以テ單ニ露國ノ滿洲ニ對スル野心ニ備ヘントスルモノト爲スニ止マラバ未ダ盡セリト謂フベカラズ。曩ニ我政府ハ獨逸外務大臣ニ質スニ韓國ヲ我が勢力ノ下ニ置クコトヲ承認シ、且ツ之ガ爲メ我國ニシテ他國ト不和ヲ生ズルトキハ、獨國ハ少ナクトモ局外中立ヲ維持スベキ乎ヲ以テシタルコトアレバ獨國ハ必ラズ日露間ニ於テ滿韓分配ノ議アルヲ推シタルコトナルベシ。殊ニ厦門事件ノ如キハ英獨兩國ヲシテ我國ノ態度ヲ疑ハシムルノ好材料タリシヤ必セリ。今亦伊藤内閣ノ成立ヲ觀ル日露合議ノ上、肆マニ清國ノ分割ヲ企圖シ、以テ巨利ヲ專占セントスルモ亦測リ難シ。蓋シ英ノ怖ル、所ハ露ナリ、獨ノ憚ル所ハ我ナルベシ。何トナレバ英獨ノ眼中ニ於テ清國ニ對シ重大ノ關係ヲ有スルモノハ、露ニアラザレバ日ナルベケレバナリ。英獨協商ノ起因モ亦察シ難キニアラズ。

然レドモ他方ヨリ之ヲ觀ルニ、英獨協商ハ能ク關係列國多數ノ意向ヲ表明シタルモノト謂フベシ。保全ハ名正シ、主張セザルベカラズ。然カモ某國アリ土壤ノ割取ヲ計ラバ、我モ亦之ニ

倣ハント云フニ外ナラズ。即チ其ノ本旨ハ先導者ヲ俟ツテ分割ノ事ヲ行ハントスルニ在ルノミ。米國スラ輓近ニ至リ頻リニ帝國主義ヲ唱道シ、境域ノ開拓ニ營々タリ。今ヤ其ノ國論ハ清國ニ於テ要港ヲ獲收スベシト云フニ一致スルヲ觀ル。況ンヤ其他ノ列國ヲヤ。唯々清國ヲ細分シテ之ヲ絶對的ニ割取スルガ如キハ到底實行スベカラザル所ナルヲ以テ、清國領土ノ保全ハ名儀上ニ於テ行ハル、コトアラント雖モ、講和談判ノ結果トシテ巨額ノ賠償ヲ要求シ、其ノ一時ニ辨濟シ能ハザルヤ、佛國ノ提議ニ係ル北京太沽間ノ要地ヲ占領スルノ外、償金ノ擔保トシテ各國適宜ノ地域ヲ押收スルニ至ルベシ。斯クテ多少若クハ廣狹ノ差コン有ルベケレ、事實上ノ分割ハ免ルベキニアラザルナリ。殊ニ英ハ長江ニ、獨ハ山東ニ各々既ニ遠大ノ野心ヲ抱ケル者ナリ。今一面清國領土ノ保全ヲ唱ヘ、他方ニ於テ止ムナクンバ他國ノ鑿ニ倣ハント云フ、其ノ眞意知ルベキノミ。

日露兩國モ亦宜シク此ノ機ニ乘ジ何等カノ協約ヲ締結シ以テ自ラ備フル所アルベキナリ。然レドモ出來得ベクンバ何レノ國ノ疑念若クハ惡感ヲモ招カザルヲ以テ良策ト爲スヲ以テ、某論者ノ如ク日露同盟ヲ公表スルガ如キハ斷ジテ不可ナリ。嚆昔「ビスマーク」ハ一方ニ於テ三國同盟ヲ組成シ、以テ露國ニ備フト號シ、之レト同時ニ露國ト友誼的中立ノ密約ヲ結ビタルコトアリ。蓋シ當時露國ノ南下ヲ防グヨリモ、佛國ノ復仇ニ備フルニ一層急ナリシガ故ナリ。

今ヤ我國ハ英獨協商ニ加盟シタリト雖モ、英獨ノ爲ニ露國ノ滿洲經營ヲ阻障シテ毫モ我ニ利スル所ナクンバ、是レ所謂人ノ爲ニ粟ヲ火中ニ取ルモノ而已。我國ハ徹頭徹尾領土保全、門戸開放ヲ公言スベシト雖モ、虛名ノ保全ヨリモ寧ロ韓國及ビ福建ヲ我ガ配下ニ置クヲ以テ其終局ノ眼目ト爲サルベカラズ。今日、露ガ英獨ニ含ム所アルコソ幸ナレ、更ニ日露密約ヲ締結シ、先ヅ兩國宜シク親善ナルベキ理由ヲ示シ、平和ヲ永遠ニ維持スベキコトヲ約シ、此ノ目的ヲ遂行センガ爲ニ滿韓及ビ福建ノ事ヲ内定スルコト、爲サバ、一方ニ於テハ日露開端ノ患ヲ絶チ、他方ニ於テハ清國分割ノ變ニ備フルノ利アルベシ。其ノ約案ニ就テモ亦卑見ナキニアラズ。

露西亞の性質 近著のウレミヤの記事には、日本の事を大層譽めて書いてある。先便の通信とは大いな違ひだ。西洋人は凡て氣が變り易いが、露西亞などは殊に其様と見える。露西亞へ旅行して非常に厚遇された人と、劍もホロ、に取扱はれた人とあるが、何でも駐日露公使の時々の報告毎に、露國政府の御機嫌がガラリ／＼違ふのだ想だ。(東京朝日新聞明治三十〇年〇月十一日所載)

日英通商及航海條約草案

(明治二十七年七月)

日本國皇帝陛下及ビ大不列顛愛蘭聯合王國兼印度國皇帝陛下ハ、兩國臣民ノ交際ヲ擴張増進シ、以テ幸ニ兩國間ニ存在スル所ノ厚誼ヲ維持センコトヲ欲シ、而シテ此目的ヲ達センニハ從來兩國間ニ存在スル所ノ條約ヲ改正スルニ如カザルヲ確信シ、公正ノ主義ト相互ノ利益ヲ基礎トシ、其改正ヲ完了スルコトニ決定シ、之ガ爲メ日本國皇帝陛下ハ何某ヲ、大不列顛愛蘭聯合王國兼印度國皇帝陛下ハ何某ヲ、各其全權委員ニ任命セリ。因テ各全權委員ハ互ニ其委任狀ヲ示シ其良好妥當ナルヲ認メ以テ左ノ諸條ヲ協議決定セリ。

第一條

兩締盟國ノ一方ノ臣民ハ、他ノ一方ノ版圖内（英文案中此譯字ニ「テリトリス」〔國土〕ノ語ヲ用ヒタルトコロヲ總テ「ドミニヨンス、エンド、ボズエスシヨンス」〔領地及ビ所屬地〕ニ改ムルコトヲ要求セリ。然ルニ〔版圖内〕ノ語ハ管轄疆域一切ヲ包含ス）何レノ所ニ到リ、旅行シ或ハ居住スルモ全ク隨意タルベク、而シテ其身體及ビ財産ニ對シテハ完全ナル保護ヲ享受スベシ。

該臣民ハ其權利ヲ伸張シ及ビ防護センガ爲メ、自由ニ且ツ容易ニ裁判所ニ訴へ出ヅルコトヲ得ベク、又該裁判所ニ於テ其權利ヲ伸張シ及ビ防護スルニ就キ、内國臣民ト同様ニ代言人、辯護人及ビ代人ヲ選擇シ、且ツ使用スルコトヲ得ベク、而シテ右ノ外司法取扱ニ關スル各般ノ事項ニ關シテハ内國臣民ノ享有スル總テノ權利及ビ特典ヲ享有スベシ。

居住權、旅行權及ビ各種動産ノ所有、遺囑又ハ其他ノ方法ニ因ル所ノ動産ノ相續並ニ合法ニ得ル所ノ各種財産ヲ如何ニ處分スルコトニ關シ、兩締盟國ノ一方ノ臣民ハ他ノ一方ノ版圖内ニ在ツテ内國若クハ最惠國ノ臣民或ハ人民ト同様ノ特典、自由及ビ權利ヲ享有シ、且ツ此等ノ事項ニ關シテハ内國若クハ最惠國ノ臣民或ハ人民ニ比シテ多額ノ税金若クハ賦課金ヲ徵收セララルコトナカルベシ。

兩締盟國ノ一方ノ臣民ハ他ノ一方ノ版圖内（前ヲ見ルベシ）ニ於テ良心ニ關シ完全ナル自由及ビ法律、勅令及ビ規則ニ從テ公私ノ禮拜ヲ行フノ權利、並ニ其宗教上ノ慣習ニ從ヒ埋葬ノ爲メ設置保存セララル、所ノ適當便宜ノ地ニ自國人ヲ埋葬スルノ權利ヲ享有スベシ。
何等ノ名義ヲ以テスルモ該臣民ヲシテ内國若クハ最惠國ノ臣民或ハ人民ノ現ニ納ムル所若クハ將來納ムベキ所ニ異ナルカ、又ハ之ヨリ多額ノ取立金若クハ租稅ヲ納メシムルヲ得ズ。

第 二 條

兩締盟國ノ一方ノ臣民ニシテ他ノ一方ノ版圖内（前ヲ見ルベシ）ニ居住スルモノハ陸軍、海軍、護國軍、民兵等ニ論ナク、總テ強迫兵役ヲ免カレ、且ツ其服役ノ代リトシテ取立ツル所ノ一切ノ納金ヲ免カレ、又一切ノ強募公債及ビ軍事上ノ賦歛、或ハ捐資ヲ免カルベシ。

第 三 條

兩締盟國ノ間ニハ相互ニ通商及ビ航海ノ自由アルベシ。
兩締盟國ノ一方ノ臣民ハ他ノ一方ノ版圖内何レノ所ニ於テモ總テ正業ニ屬スル各種ノ生産物製造品及ビ貨物ノ卸賣若クハ小賣營業ニ従事スルニ於テ自身ニ之ヲ爲シ、或ハ代理人ヲ以テシ又ハ一人ニテ之ヲ爲シ、或ハ外國人若クハ内國臣民ト組合ヲ結ビテ之ヲ爲スモ隨意タルベク、又住居若クハ商業ノ爲メ家屋、倉庫ヲ所有シ、借受ケ使用シ、且ツ土地ヲ借受クルコトヲ得。

但シ内國臣民若クハ最惠國臣民、或ハ人民ト同様其國ノ法律、警察規則及ビ稅關規則ヲ遵守スルヲ要ス。

該臣民ハ他ノ一方ノ版圖内（前ヲ見ルベシ）ノ各地、諸港及ビ諸河ニシテ外國通商ノ爲メ現ニ開カレ、又ハ將來開カルベキ場所ヘ船舶及ビ貨物ヲ以テ自由ニ到ルヲ得、且ツ通商、工業及ビ航海ニ關シテハ政府、官吏、公吏、一私人或ハ會社若クハ何等施設ノ名義ヲ以テスルカ、又ハ其利益ノ爲ニ課セラル、所ノ稅金或ハ取立金ハ其性質若クハ名稱ノ如何ヲ論ゼズ、内國臣民ノ拂フ所ニ異ナルカ、或ハ之ヨリ多額ノモノヲ拂フコトナク、内國臣民若クハ最惠國臣民或ハ人民ト同一ノ取扱ヲ受クベシ。但シ常ニ各其法律、勅令及ビ規則ニ從フベキモノトス。

但シ本條及ビ前條ノ規定ハ兩締盟國ノ各方ニ於テ商業、警察及ビ公安ニ關シ現ニ行ハルル特別ノ法律、勅令及ビ規則ニシテ外國人一般ニ適用スベキモノニハ何等ノ影響ヲ及ボスコトナシ。

第 四 條

兩締盟國ノ一方ノ臣民ガ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ住居若クハ商業ノ爲ニ供スル家宅、製造所、倉庫及ビ店舗ハ侵スベカラズ。

右家宅、店舗ヘハ猥リニ侵入搜索スベカラズ。又帳簿、書類或ハ簿記帳ヲ検査點閱スベカラ

ズ。但シ内國臣民ニ對シ法律、勅令及ビ規則ヲ以テ制定セル條件及ビ定式ニ據ルトキハ此限ニ在ラズ。

第 五 條

大不列顛國皇帝陛下ノ版圖内ノ生産或ハ製造ニ依ル物品ハ何レノ地ヨリ日本國皇帝陛下ノ版圖内ニ輸入シ、又日本皇帝陛下ノ版圖内ノ生産或ハ製造ニ係ル物品ヲ何レノ地ヨリ不列顛國皇帝陛下ノ版圖内ニ輸入スルニモ總テ別國ノ生産或ハ製造ニ係ル同種ノ物品ニ課スル所ノ稅ニ異ナルカ、或ハ之ヨリ多額ノ稅ヲ課セラル、コトナカルベシ。又締盟國ノ一方ノ版圖内ヘ別國ノ生産或ハ製造ニ係ル物品ノ輸入ヲ禁止スルニ非ラザレバ、他ノ一方ノ版圖内ノ生産或ハ製造ニ係ル同種ノ物品ヲ何レノ地ヨリ輸入スルコトヲモ禁止スルコトナカルベシ。但シ此末段ノ取極メハ人、畜或ハ農業ニ有用スル植物ノ安全ヲ保護スルニ必要ナル衛生上及ビ其他ノ禁止ニハ適用スベカラザルモノトス。

第 六 條

兩締盟國ノ一方ノ版圖内ヨリ他ノ一方ノ版圖内ヘ輸出スル一切ノ物品ヘハ他ノ各外國ヘ輸出

スル同種物品ニ對シ現ニ賦課シ若クハ將來賦課スベキ所ニ異ナルカ、或ハ之ヨリ多額ノ税金又ハ雜費ヲ賦課スルコトナカルベシ。又兩締盟國ノ一方ノ版圖内ニ於テ他ノ各外國ニ向ヒ物品ノ輸出ヲ禁止スルニ非ラザレバ、他ノ一方ノ版圖内へ同種ノ物品ヲ輸出スルコトヲモ禁止セザルベシ。

第 七 條

兩締盟國ノ一方ノ臣民ハ他ノ一方ノ版圖内ニ在リテ内地通關稅ハ免除セラルベク、又倉入、獎勵金及ビ便益並ニ税金拂戻等ノ事項ニ就テハ内國臣民ト均等ノ待遇ヲ享クベシ。

第 八 條

日本國皇帝陛下ノ版圖内ノ諸港へ日本國ノ船舶ヲ以テ適法ニ現ニ輸入シ、若クハ將來輸入セラルベキ物品ハ亦大不列顛國ノ船舶ヲ以テ同様ニ之ヲ右諸港ニ輸入スルコトヲ得。此場合ニ於テハ日本國船舶ガ右様ノ物品ヲ輸入スルトキ課スベキ税金或ハ雜費ノ外、何等ノ名義ヲ以テスルモ更ニ別種或ハ多額ノ税金、雜費等ヲ課セザルベシ。又大不列顛國皇帝陛下ノ版圖内ノ諸港へ大不列顛國ノ船舶ヲ以テ適法ニ現ニ輸入シ若クハ將來輸入セラルベキ物品ハ、亦日本國ノ船

舶ヲ以テ同様ニ之ヲ右諸港へ輸入スルコトヲ得。此場合ニ於テハ大不列顛國船舶カ右様ノ物品ヲ輸入スルトキ課スベキ税金或ハ雜費ノ外、何等ノ名義ヲ以テスルモ更ニ別種或ハ多額ノ税金、雜費等ヲ課セザルベシ。右相互對等ノ處置ハ右物品ノ直ニ原產地ヨリ到ルト其他ノ場所ヨリ到ルトヲ問ハズ必ラズ之ヲ施スモノトス。輸出ニ關シテモ前項ノ場合ト同様全ク均等ノ處置ヲ施スベシ。故ニ締盟國ノ一方ヨリ適法ニ現ニ輸出シ若クハ將來輸出セラルベキ物品ハ、其輸出ノ日本國船舶ニ因ルト大不列顛國船舶ニ因ルトニ拘ハラズ、又其仕向先ノ締盟國ノ一港タルト第三國ノ一港タルトヲ問ハズ、締盟國ノ版圖内ニ於テハ之ニ課スルニ同一ノ輸出稅ヲ以テシ又之ニ許スニ同一ノ獎勵金並ニ税金拂戻シノコトヲ以テスベシ。

第 九 條

政府、官吏、公吏、一人、會社若クハ何等施設ノ名義ヲ以テスルカ、又ハ其利益ノ爲ニ課セラル、所ノ噸稅、港稅、水先案内料、燈臺稅、檢疫費其他之ト同種ノ税金ハ其性質並ニ名義ノ如何ニ拘ハラズ同一ノ條件ヲ以テ同様ノ場合ニ於テ内國船舶若クハ最惠國船舶ニ課スルモノニ非ラザレバ、兩締盟國ノ一方ハ其版圖内ノ港ニ於テ之ヲ他ノ一方ノ船舶ニ課セザルベシ。此ノ如キ均等ノ取扱ハ兩國ノ船舶ガ何レノ地或ハ港ヨリ來リ又何レノ處ニ往クモノタリトモ相互

ニ同一タルベキモノトス。

第十條

兩締盟國ノ一方ノ版圖内ノ海港、海灣、船渠、川河或ハ其他ノ碇泊所ニ於テ船舶ノ繫留又貨物ノ船積、船卸ニ關スル一切ノ事項ニ就キテハ内國船舶ニ許與セザル特典ハ均シク他ノ一方ノ締盟國ノ船舶ニモ許與セザルベシ。但シ本件ニ關シテモ亦兩締盟國ノ目的ハ兩國ノ船舶ニ對シ互ニ均等ノ處置ヲ施スニ在ルモノトス。

第十一條

兩締盟國ノ沿海貿易ハ本條約ニ於テ規定スルノ限リニ在ラズ、各其法律、勅令及ビ規則ニ從ヒ之ヲ規定スベキモノトス。然レドモ日本ニ於ケル大不列顛國臣民又ハ大不列顛國ニ於ケル日本國臣民ハ此事項ニ關シテハ各法令ニ因テ他ノ外國臣民或ハ人民ニ現ニ許與シ若クハ將來許與セラレベキ諸權利ヲ享有スルモノトス。

大不列顛國皇帝陛下ノ版圖内ノ二個以上ノ港ヘ仕向ケタル荷物ヲ外國ニ於テ積載シタル日本國船舶及ビ日本國皇帝陛下ノ版圖内ノ二個以上ノ港ヘ仕向ケタル荷物ヲ外國ニ於テ積載シタル

大不列顛國船舶ハ、外國貿易ヲ許サレタル仕向港ノ一ニ於テ其積荷ノ一部ヲ陸揚シ、而シテ其最初ニ積載シタル荷物ノ剩餘ヲ陸揚スル爲メ他ノ一港若クハ數港ヘ進航スルコトヲ得ベシ。但シ常ニ兩國ノ法律及ビ稅關規則ニ從フベキモノトス。

但シ日本政府ハ此迄ノ通り大不列顛國船舶ガ帝國ノ現開港場間ニ積荷ヲ運搬スルコトヲ許スベシ。尤モ大阪、新潟及ビ夷港ハ例外トス。

第十二條

兩締盟國ノ一方ノ軍艦或ハ商船ニシテ暴風又ハ其他ノ危難ニ遭遇シ、避難ノ爲メ已ムヲ得ズ他ノ一方ノ海港ニ進入スルモノハ、内國船舶ノ拂フベキ税金ノ外一切ノ税金ヲ拂フコトナク、其港ニ於テ更ニ艤裝ヲ爲シ、一切ノ需用品ヲ求メ再ビ航行スルヲ得ベシ。但シ商船ノ船長ニシテ其費用ヲ辨償スル爲メ其積荷ノ一部ヲ賣却スルヲ要スル場合ニハ該船長ハ其寄港地ノ規則及ビ稅目ヲ遵守スベキモノトス。

兩締盟國ノ一方ノ軍艦或ハ商船ニシテ他ノ一方ノ沿岸ニ於テ淺瀬ニ乗上ゲ或ハ難破シタルトキハ、地方官ヨリ其事件ノ生ジタル地方ニ在ル所ノ總領事、領事、副領事又ハ領事代理ヘ其旨ヲ通知スベシ。但シ若シ其地方ニ領事官ノ設ナキトキハ最近地方ノ總領事、領事又ハ領事代理

へ通知スベシ。

日本國皇帝陛下ノ版圖内ノ海上ニテ難破シ、若クハ海岸ニ乗上ゲタル大不列顛國船舶ノ救助ニ關スル一切ノ手續ハ、日本國法律、勅令及ビ規則ニ從テ之ヲ爲スベク、又互相ノ主義ニ基キ大不列顛國皇帝陛下ノ版圖内ノ海上ニテ難波シ若クハ海岸ニ乗上ゲタル日本船舶ニ關スル救助ノ處分ハ、大不列顛國法律、勅令及ビ規則ニ從ヒ之ヲ爲スベシ。右遭難ノ船舶並ニ其器具及ビ其他一切ノ附屬品及ビ該船舶ヨリ救上ゲタル貨物並ニ商品及ビ右等ノ諸物件ニシテ海中ニ投棄セラレタルモノ、又ハ之ヲ賣却シタルトキハ、其收得金並ニ該遭難船内ニ發見セラレタル一切ノ書類ハ右船舶ノ持主或ハ代理人ヨリ要求スルトキハ之ニ引渡スベシ。右持主或ハ代理人ノ現狀ニ在ラザルトキハ、内國法律ニ定メタル期限内ニ當該總領事、領事、副領事或ハ領事代理ヨリ請求アレバ之ヲ引渡スベシ。而シテ右領事官、持主又ハ代理人ハ内國船舶難波ノ場合ニ於テ拂フベキ所ノ物品保存費並ニ難波救助費及ビ其他ノ費用ノミヲ拂フベキモノトス。

難破船ヨリ救上ゲタル貨物及ビ商品ハ消費ノ爲ニ通關手續ヲ爲スモノニ非ラザレバ一切ノ關稅ヲ免除スベシ。但シ消費ノ爲ニ賣捌ク場合ニハ普通ノ關稅ヲ納ムルヲ要スルモノトス。兩締盟國ノ一方ノ臣民ニ屬スル船舶ニシテ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ淺瀬ニ乗上ゲ、或ハ難破シタルトキ其持主、船長若クハ持主代理人不在ノ場合ニハ、當該總領事、領事、副領事若クハ領事代理ハ其同國臣民ニ必要ノ救助ヲ與フル爲メ職權上ノ助力ヲ爲スヲ許サルベキモノトス。此規定ハ持主、船長若クハ持主代理人現ニ其場ニ在ル時ト雖モ、右様ノ救助ヲ與フルヲ請求スル場合ニハ亦適用スベキモノトス。

第十三條

本條約ニ於テハ日本ノ國法ニ從ヒ日本船舶ト見做サルベキ一切ノ船舶ハ之ヲ日本國船舶ト認メ、又大不列顛國ノ國法ニ從ヒ大不列顛國船舶ト見做サルベキ一切ノ船舶ハ之ヲ大不列顛國船舶ト認ムベシ。

第十四條

兩締盟國ノ一方ノ版圖内ニ駐在スル他ノ一方ノ總領事、領事、副領事及ビ領事代理ハ、自國ノ脫船人ヲ取戻スタメ法律ノ許ス所ノ補助ハ之ヲ地方官ヨリ受クベキモノトス。但シ右海員ガ其各自ノ所屬國ニ於テ脫船シタルトキハ此約款ヲ適用セザルモノトス。

第十五條

兩締盟國ハ其一方ノ通商工業及ビ航海ヲ他ノ一方ニ於テ總テ最惠國ノ基礎ニ置ク主意ヲ有スルニ因リ、通商工業及ビ航海ニ關スル一切ノ事項ニ於テ現時或ハ將來其一方ヨリ別國ノ政府、船舶、臣民或ハ人民ニ許與スル所ノ一切ノ特典、殊遇若クハ免除ハ、他ノ一方ノ政府、船舶、臣民或ハ人民ニモ即時ニ且ツ條件ヲ附セズシテ之ヲ許與スベキコトヲ兩締盟國ニ於テ約定ス。

第十六條

兩締盟國ノ一方ハ他ノ一方ノ海港、都府及ビ其他ノ場所ニ總領事、領事、副領事及ビ領事代理ヲ置クコトヲ得ベシ。但シ領事館ノ駐在ヲ認許スルニ便宜ナラザル場所ハ例外タルベシ。然レドモ右ノ例外ハ他ノ諸外國ニ對シ之ヲ適用スルニ非ラザレバ一方ノ締盟國ニ對シテ之ヲ適用スルヲ得ザルモノトス。

總領事、領事、副領事及ビ領事代理ハ一切ノ職務ヲ執行スルコトヲ得。且ツ其在留國ニ於テ最惠國ノ領事官ニ現ニ許與シ、或ハ將來許與セラルベキ一切ノ特典、特權及ビ免除ハ凡テ之ヲ享有スベキモノトス。

第十七條

兩締盟國ノ一方ノ臣民ハ他ノ一方ノ版圖内ニ於テ法律ニ定ムル所ノ手續ヲ履行スルトキハ專賣特許、商標及ビ意匠ニ關シ内國臣民ト同一ノ保護ヲ受クベシ。

第十八條

本條約ノ規定ハ法律ノ許ス限リハ大不列顛國皇帝陛下ノ殖民地並ニ其領地ニ適用スベシ。但シ左ニ列記スル所ハ此限ニ在ラズ。

印度

加奈太領地

ニュー、フワウンドランド

喜望峰殖民地

ネタル

ニュー、サウスウエールス

ヴキクトリヤ

クギンストランド

タスマニヤ

日英通商及航海條約草案

南 濠 太 利

ニユー、ジーランド

然レドモ東京駐劄大不列顛國皇帝陛下ノ代表者ヨリ本條約批准交換ノ日ヨリ二箇年間ニ本條約ノ規定ヲ前記ノ殖民地若クハ領地ノ孰レヘナリトモ適用スベキ旨ヲ通知シタルトキハ之ヲ適用スベキモノトス。

第 十 九 條

大不列顛國政府ハ同政府ニ關スル限りハ左ノ取極メニ同意スベシ。

日本ニ在ル各外國人居留地ハ全ク其所在ノ日本市區ニ編入シ、而シテ日本地方組織ノ一部ト爲リ當該官廳ハ之ニ關シテ其地方施政上ノ責任義務ヲ悉皆負擔シ、又之ト同時ニ右外國人居留地ニ屬スル共有資金若クハ財産アルトキハ之ヲ右日本官廳ヘ引渡スベキモノトス。尤モ前記外國人居留地ヲ日本市區ニ編入ノ場合ニハ該居留地内ニテ現ニ因テ以テ財産ヲ所持スル所ノ現在永代借地券ハ有效ノモノト確認セラルベシ。而シテ右財産ニ對シテハ右借地券ニ載セタル條件ノ外ハ別ニ何等ノ條件ヲモ附セザルベシ。但シ借地券中ニ領事官トアルハ總テ日本當該官吏ヲ以テ之ニ代ユベキコト、知ルベシ。

外國人居留地公共ノ目的ノ爲ニ無借料ニテ既ニ貸與シタル各地所ハ、永代ニ保存セラルベシ。且ツ該地所ニシテ最初貸與シタルトキノ目的ニ使用セラル、限りハ總テノ租稅及ビ徵收令ヲ免除スベシ。但シ土地收用權ニハ從フベキモノトス。

第 二 十 條

本條約ハ其實施ノ日ヨリ兩締盟國間ニ現存スル嘉永七年八月廿三日、即チ千八百五十四年十月十四日締結ノ約定、慶應二年五月十三日、即チ千八百五十八年八月廿六日締結ノ修好通商條約及ビ之ニ附屬スル一切ノ諸約定ニ代ハルベキモノトス。而シテ該條約及ビ諸約定ハ右期日ヨリ總テ無効ニ歸シ、隨テ大不列顛國ガ日本帝國ニ於テ執行シタル領事裁判權及ビ該權ニ屬シ又ハ其一部トシテ大不列顛國臣民ガ享有セシ所ノ特典、特權及ビ免除ハ本條約實施ノ日ヨリ別ニ通知ヲナサズ全然消滅ニ歸シタルモノトス。而シテ此等ノ裁判管轄權ハ本條約實施後ニ於テハ日本帝國裁判所ニ於テ之ヲ執行スベシ。

第 二 十 一 條

本條約ハ調印ノ日ヨリ少クモ五箇年ノ後迄ハ實施セラレザルモノトス。而シテ日本帝國政府

ニ於テ本條約ヲ實施セント欲スル旨ヲ大不列顛國政府ニ通知シタル後一箇年ヲ經ルニ非ラザレバ實施セラレザルモノトス。尤モ此通知ハ調印ノ日ヨリ四箇年ヲ經タル後何時ニテモ爲スコトヲ得ベシ。又本條約ハ其實施ノ日ヨリ十二箇年間效力ヲ有スルモノトス。

兩締盟國ノ一方ハ本條約實施ノ日ヨリ十一箇年ヲ經過シタル後ハ、何時タリトモ本條約ヲ終了セント欲スル旨ヲ他ノ一方へ通知スルノ權利ヲ有スベシ。而シテ此通知ヲ爲シタル後十二箇月ヲ經過シタルトキ本條約ハ消滅ニ歸シタルモノトス。

第二十二條

本條約ハ兩締盟國ニ於テ之ヲ批准シ、其批准ハ本條約調印後、箇月内ニ、、、ニ於テ交換スベシ。右證據トシテ、、、

明治、、、年、、、月、、、日、即チ西曆、、、年、、、月、、、日、、、ニ於テ書ス。

議 定 書

日本國皇帝陛下ノ政府及ビ大不列顛國兼印度國皇帝陛下ノ政府ハ、本日調印セシ通商航海條約ノ外ニ双方ニ關スル特別ノ事項ヲ規定スルコト兩國ノ利益上便宜ナルヲ以テ、双方ノ全權委員ハ左ノ約定ニ同意セリ。

第一 本日調印シタル通商航海條約批准交換後六箇月ノ後ハ、本書附屬輸入稅目ハ兩締盟國間ニ現存スル所ノ安政五年條約ノ有效ナル間ハ、其第二十三條ノ規定ニ準據シ、又右安政五年條約ノ無効ニ歸シタル後ハ、本日調印シタル條約第四條及ビ第十五條ノ規定ニ準據シ、大不列顛國皇帝陛下ノ領地及ビ所屬地ノ生産若クハ製造ニ係ル物品ニシテ該稅關ニ掲グルモノヲ輸入スル場合ニ之ヲ適用スルモノトス。但シ日本政府ニ於テ純良ナラザル藥材、製藥、食物若クハ飲料、猥褻ノ印刷物、圖畫、書籍、紙牌、石版若クハ其他ノ彫刻畫、寫真及ビ其他總テ猥褻ノ物品、日本帝國ノ專賣特許、商標及ビ版權ニ關スル法律ニ違背スル物品又ハ其他衛生、公安若クハ風俗ニ關シ危害ヲ生ズベキ物品ノ輸入ヲ制限シ、若クハ禁止スルノ權利ハ本議定書又ハ其附屬稅目ノ爲メ制限セララル、コトナ

カルベキモノトス。

右税目ニ掲ゲザル物品ニ對シテハ前項ニ記載セシ期日ヨリ前項ニ記載セシ如ク各々安政五年條約第二十三條及ビ本日調印シタル條約第四條及ビ第十五條ノ規定ニ準據シ、日本國ニテ其時現ニ行ハル、所ノ普通關稅則ヲ適用スルモノトス。

大不列顛國臣民ガ日本國ニ輸入スル貨物及ビ商品ニ關シ、現今日本國ニ於テ實施スル所ノ輸入税目ハ前項ニ記載セシ各税目實施ノ日ヨリ無効ニ歸スベキモノトス。

尤モ此外總テノコトニ付テハ現行條約ノ規定ハ本日調印シタル通商航海條約ノ實施セラル、ニ至ル迄ハ無條件ニテ保續セラルベキモノトス。

第二 日本國政府ハ大不列顛國臣民ニ對シ内國ヲ開クマデハ現行ノ旅券方法ヲ擴張スルコトニ同意ス。即チ大不列顛國臣民ガ在東京同國公使若クハ日本國開港場ニ駐在スル大不列顛國領事官ヨリノ紹介證書ヲ所持シテ出願スル限リハ、滿十二ヶ月間ハ國內何レノ地ヘモ到ルコトヲ得ベキ旅券ヲ東京外務省若クハ開港場所在府縣長官ヨリ交付スベシ。但シ帝國ノ内地ニ旅行スル大不列顛國臣民ニ關スル現行規定ハ之ヲ保續スベキモノトス。

第三 本議定書ハ本日調印シタル通商航海條約ト同時ニ兩締盟國政府ニ提供スベシ。而シテ右條約批准セラル、トキハ本議定書ニ掲載スル所ノ諸約定モ別ニ正式ノ批准ヲ要セズ

シテ亦兩締盟國政府ノ認可セシモノト看做スベキコトヲ約ス。又本議定書ハ前記條約ノ無効ニ歸スルト同時ニ終了スベキコトヲ約ス。

右證據トシテ、
、、、年、、月、、日、即チ西曆、、、年、、月、、日、
於テ書ス。

在英加藤高明ヨリ陸奥宗光へ私簡

拜啓其後御身體愈健康ニ向ハレ候哉、御大病後折角御保養專一ト奉存候。陳者山縣大將過日巴里到着ノ報ニ接シ候ニ付、早速同地ニ赴キ兩三日逗留、緩々同侯使命ノ次第内承仕候。要スルニ露國トノ衝突ヲ避ケントテ商議シ、進ンデ朝鮮ヲ兩國共同保護ノ下ニ置カンコトヲ提議スル（機會アラバ）趣旨ト相見エ候。今日露ガ既ニ其希望ヲ達シツアル折柄、口上ダケノ交誼ダケハ兎ニ角、實際共同ノ實ヲ表スルコトニ同意センコトハ甚ダ無覺束、將又拙ニ右等ノ件ヲ提議セバ、益々彼ノ輕侮ヲ買ヒ甚ダ面白カラザル結果ヲ來スコトモアルベシト夫々懸念致候。但シ今回使節ノ組織ヲ看レバ必ラズシモ成功ヲ期セラル、用意アル様ニモ不被窺、何カ内部ノ都合此使節派遣ニ至リタルモノニシテ、外ニ對シテ兎ニ角ノ成績ヲ舉グルノ計畫ニハアラザル様ニモ被察候、御眞意抑モ如何、内承スルコトヲ得バ幸甚ニ御座候。然ルニ此際英國政府ヨリ朝鮮ノ將來ニ關シ列國共同其獨立ヲ保證スル一事ニ就キ我政府ノ内意ヲ聞クノ三字缺アリタル

頗ル乘ズベキ機會ト被存候。ヨシ不幸ニシテ英ノ決心定マラズ、成功ニ至ラザルモ、露ノ專横ヲ禦グ上ニ於テ必ラズ多少ノ効能ハ可有之、我政府ニ於テ何卒英政府ニ「エンカレヂメント」ヲ與ヘラル、様致度、右ニ就キ當國外務次官ト内話ノ顛末、並ニ之ニ關スル私見ハ電報ヲ以テ申上置候ヘバ御承知被下候儀ト存候。幸ニ御參考ノ一助ニモ相成候ハ、仕合セニ御座候。

巴里ニテ川崎寛美ニ面會候ニ付、露國ノ用向相濟候上ハ會計上其他諸務一旦ノ爲メ、在歐各公使館巡回ノ儀相勸メ候處、本邦出發ノ際原次官ヨリ御同様ノ内話アリタルモ、判然タル辭令書モ受ケ居ラザルニ付、旅費等ノ都合ニテ多少ノ躊躇スル處アルノミナラズ、山縣大使隨行ノコトユヘ、同大使ニ於テ承諾セザレバ之ト離ル、コト困難ナル趣キ唱ヘ居候。仍テ内々山縣侯ノ都合ヲモ聞キ合セ候處、使命相濟ミ歸國ノ途ニ上ルマデハ付添ヲ要スレドモ、其時ニ至ラバ何トカ都合ヲ付ケ歸朝ノ時マデ必ラズ同行スルニモ不及哉ニ申居ラレ候。小生ガ此ノ如ク僭越ナル心配ヲ爲スハ故アルコトニシテ、從來各公使館ヲ一括シテ通覽シタル者本省ニ無之、從テ各館ヨリ經費ノ要求其他類似ノ申請アルニ當リ、實見上ヨリ其ノ當否ヲ鑑別スルコト能ハズ、已ムヲ得ズ杓子定規ノ權衡論等ニテ其詮議振り實地ニ適セザルコト往々可有之、然ルニ川崎ノ如キ會計並ニ識見ノ事務ニモ通ジ、又公使館ノ事モ心得タル者ガ一巡各所ヲ回リ置キ、其實際ヲ比較セバ諸種ノ詮議上大ニ宜シキヲ得、後日ノ好都合不尠事ト存候。就テハ若シ前議可然ト

ノ御思召ニ候ハ、山縣大使ノ都合次第之ト離レ、歐米各公使館巡回スベキ様御命令相成度此段私見具陳仕候。

此度東京英公使館付被命明日赴任ノ途ニ上リ候「サリトリアス」大佐ハ、同官中隨分古參ノ者ニテ曾テ武功ニ因リ Victoria Cross (此勳章ハ御承知ニ可有之通り、當國ノ金鷄勳章ニシテ之ヲ受有スル者極メテ少ナク大ニ貴重セラル、モノナリ)ヲ受ケ居ル仁ニ有之、人柄モ甚ダ穩當ナル様見受ケ申候。日本ニハ六ヶ月乃至八ヶ月滞在スルノミニテ他人ト交代スル積ノ由ニ御座候。右乍序御噲申上置候。

清國第二回償金來八日受授ノ筈ニ御座候。其一半ハ愈ヨ伯林ニ於テ受授ノ事ニ相成候由、右御承諾相成候ハ何カノ御都合ニ依リ已ムヲ得ザルコト、存ジ候處、隨分手數モ掛リ其上都合ニ因テハ送金歩合等ニ於テ多少ノ損失ヲ來タシ、又其上理窟ニテハ何時モ引出シ得ベキ筈ナレドモ、情實上當英蘭銀行ニ預金巨額ナル間ハ伯林ノ分ノミ無下ニ引出シ叶ハザルト云フ様ナル結果モナキニアラザルベク、彼是不便ナキニアラザルベクト懸念致候事ニ御座候。

軍艦製造ノ場合モ今ニ御極マリ不相成哉ニテ、此頃聞ク所ニ因レバ各國製造優劣取調ノ委員ヲ派遣セラル、トカ云フコトニ有之、隨分優長ナル處置ト存候。今更別段取調ヲ爲サルモ何國ガ最モ上手ナル位ノコトハ明カニ相分リ居ルベキ筈ト存候。此事ニ就テハ高平、曾禰等ヨリ

何カ申立候事モ有之由、青木ヨリモ無論ト存候。當英國政府ハ右等商賣上ノコトニ餘リ直接ニ手出シヲ爲サズ、隨テ小生ハ外務省ヨリ迫マラレズ、且ツ英國ハ船ヲ造ルノ術各國ニ勝ルコトト確信、隨テ海外へ軍艦ヲ注文セラル、節ニハ少ナクトモ其大部分ハ自然當國へ注文相成ルベキ筈ト豫期致候ヨリ今日迄一回モ此等ノ事ニ就キ具申シタルコト之ナシト雖モ、申ス迄モナク英政府ト雖モ自國ニ注文セラル、コトヲ望ムハ自然ノ譯合ニ有之、若シ他國在留ノ公使ヨリ頻リニ申立タルコトガ幾分カ効ヲ持ツ様ナル次第ナレバ、小生ヨリモ同様ノ申立致度ト相考候。右參考迄ニ申上置候。

先ハ右彼是申上候如此、時下御自重ノ程御祈候。頓首

五月五日

倫敦 高明

陸 奧 宗 光 閣 下

乍憚伯爵夫人へ宜敷御鶴聲相成度、荆妻ニモ同様申出候。不備。

山縣大使派遣ニ付テノ私見

西 德 二 郎

伏見宮貞
愛親王

露國皇帝ノ戴冠式ニ付、既ニ伏見宮殿下御出張ニ定マリタルニモ拘ラズ、猶ホ別ニ大使派遣ノ一條アルヲ聞致シ、少シク苦情ヲ申立ザルヲ得ズ。抑モ今回ノ儀式ニ他國ヨリ皇族ノ一名ヲ派シ、又別ニ大使ヲ派スルノ例ナキハ、英獨奧伊ノ諸國へ御問合セノ貴電ニ由テ判然シタル事ユヘ、生ニハ若シ伊藤總理大臣來ラル、コトナレバ、唯ダ外國賓客ノ資格ヲ以テ來ラレ、直接ニ當國外務大臣ト朝鮮問題ノ決ヲ試ミラル、爲メナラント思ヒ居タルニ、突然山縣大將大使トシテ派出ノ議決シタル報至リシニハ驚キタリ。其譯ハ既ニ伏見宮殿下御出ノ事ハ公文ヲ以テ通知シアル處ニ、何ノ御問合セモナシニ、又別ニ大使ヲ派セラル、主意ノ分ラザルハ勿論例外ノ事タレバナリ。例外ノ事モ確タル目的アラバ、之ヲ爲スモ可ナルベケレド、其目的トテ解シ難

キ所以ハ、若シ兩國現今ノ關係上特ニ交誼ヲ重ズル爲メトセバ、既ニ皇族ノ任命アリ。如何ニ國ノ元老タル大將トテモ、斯カル儀式上ノ場合ニ輕重ノ爭ハル、筭モナキコト、セバ、何ノ爲ニモナラザルハ勿論、禮儀ニモ程度アリ、其度ヲ超ユレバ主人ハ不便ヲ感ジ、客ハ卑屈ヲ感ジ、他人ハ冷笑スルモ亦免レザル所ナリ。若シ又直接ニ事ヲ談ズルノ必要アリトスルヤ、自ら相對シテ話シノ出來ル人ニ非ラザレバ、其意達シ難カルベキハ勿論、朝夕儀式ヤ宴會ニ從事中斯カル込入リシ相談出來ベキヤ否扨ト思ヒ、其前一言ノ御尋ネナカリシヲモ怪ミ、或ハ伊藤侯ノ行掛リヨリ生ゼシ者歟トモ被案、兎ニ角實際ニ當リ見ルニ如カズトシテ、先ヅ外務省ニ就テ伊藤總理大臣多分來リ得ザルベシト前置シテ、「ロバノフ」ノ顔付ヲ見タルニ、別ニ不快ノ色モ見エズ、由テ戴冠式談ニ移リ、夫レトナシニ他國ヨリ同式へ皇族來リ、又大使來ル所アルヤト尋ネシニ、ナイコトモアルマイトテ之ヲ數ヘタルモ、數ヘ出サズシテ笑ヒ居リ、之ヲ重ズル風ニモ見エズ。依テ宮内ノ式部ニ至リ、同問題ヲ以テ先例ヲ調べタルモ斯カル例ハナシ。依テ又禮式ノ事ニ精シキ懇意ナル同僚公使ニ就テ、歐洲他國ノ振合等ヲ尋ネテモ同ジコトナリシユヘ、生ニハ不可ナリトノ決着ニ歸シ、直ニ其趣ヲ電報シ、且ツ生交代シテ、例外トスル所ノ三代表者ヲ二代表者トシテ、右ノ不都合ヲ避ケ度趣ヲ陳ジタルモ其説行ハレザリシニ付テハ、生自ラ立退テ我邦ノ體面ヲ保ツノ外ナシト迄思ヒシモ、丁度朝鮮事件差掛リ東京ニ於テ諸公ノ御

山縣大使派遣ニ付テノ私見

三二七

配慮ヲモ察シ、遂ニ事件ノ輕重ヲ顧ミテ訓令通りニ取計フ事ニ決シタル次第ナリ。固ヨリ客ノ來ルト云フノニ主人ヨリ強テ斷ハル筈モナクシテ、事圓滑ニ運ビ公然通知スルニ至リシモ、生ニ於テ苦シキ譯ハ、夫レ迄ニ「皇族ノ外ニ又大使カ」抔ト態ト問ハレ、且ツ此企テタル若シ生ノ意ニ出デズンバ、少ナクトモ賛成ニ由ラザル事トハ誰モ思ハズ。又生ニモ多年此地ニ在レバ、假令是等ノ事例ヲ知ラザルトモ、問合セ位ノ事ハ出來ルコトハ皆知リ居リ、又日本ハ東方ノ開化者ヲ以テ自ラ任ジ、歐風ヲ學ブコトモ知リ居ルニ、似合ハヌ例外ノ事ヲ爲シテ、一式ニ三代表ヲ出スハ鄭重ト云フヨリモ、寧ロ阿諛ニ近キ辨解ヲ下サル、ノ感アルハ、時勢ノ然ラシムル所ナリ。然シ今日ノ處迄ハ同僚中口ノ惡イ人々ガ「日本ヨリハ皇族來リ又大使來ルツウナガ、此地ノ公使ハ何ヲ爲スダラウカ」等ノ戲談ヲ爲スニ止マリ居ル由ナリ。是等ハ齒牙ニ掛クルニ足ラザルモ、是迄生ニハ我ノ利益ハ勿論、交際ニ關シテノ威儀ヲモ傷ケザル様ニト注意シ來リ候末、忽チ變ナル位地ニ陥ル氣味アツテ快カラザル儀ナリ。然シ右ハ何レニシテモ唯ダ儀式上ノ事ニシテ、國家ノ大問題ニハ代ヘラレザレバ、生モ此上ハ出來ル丈ケハ力ヲモ盡シテ不都合ナキ様ニ取計フベシ。唯ダ若シ此先キ彌ヨ不快ノ感重ナル時ハ、生一時此地ヲ避ケ本館員ヲ大使隨員ヘ合併セシムル事モ有ベキ乎。山縣大將來着ノ上ハ、朝鮮論ニ於ケル廟議ヲモ承リ、談判スルコトアラバ談判モ致シ、其上ハ直ニ瑞典ヘ出掛ケ、夫ノ條約改正談ニ取掛リ、其成リ次

第ニテ歸朝ヲ申出ヅル心得ナレバ、早ク後任者ヲ御定メ置カレタシ。小生モ此冬中ハ病氣勝ニテ、此間ヨリ醫者モ暫時此地ヲ去ルベシト勸メタレドモ、何分朝鮮事件ノ折合付カザル間ハ、懸念ニテ去ル譯ニモ參ラズ。依テ思フニ生ニハドウセ長ク勤續スルコト難ケレバ、寧ロ早ク後任者ト代リ、其人ヲシテ早ク土地ノ事情ニモ通ゼシムル方、却テ行先ノ御爲ニモ相成ルベキカ。今度ノ朝鮮ノ出來事ハ、實ニ意外ナリシガ、早去リシコトハ追フベカラズトシテ暫ク攔キ、結局ノ論ハ目下我ニ於テ露ト決戰ノ力アルヤ否ヤニアルベシ。若シ否ノ答トセバ我ノ之ニ對スルヤ得ラル、丈ケ得ルノ方略ヨリ外ハ有ル間敷、唯ダ引足計リ踏テ弱キヲ示スモ不得策ナリ、止マラント欲スル所ニハ止マリ、遂ニ止マルヲ得ザル場合ニ至テ引ク事ト致シ度モノナリ。

廿九年三月九日

日清戰後國際事情情報

(二月十二日發)

佛國政府ハ戰爭ノ問題ニ關シテハ孰レノ邦國ニモ何等ノ契約ヲ取結ブベク思考セザリシ。最近到着シタル清國公使ハ新皇帝ニ慶ヲ奏スル爲メ聖彼得堡マデノ旅客タルニ過ギズ。佛國外務大臣ハ尙ホ此ノ問題ニ關シ生ズ可キ所ノ凡テノ事件ハ直チニ報告ヲ爲スベキ旨ヲ余ニ約シタリ。

在巴里 曾 禰 荒 助

(二月十三日發)

閣下ノ照會ニ關シ余ハ充分ナル注意ヲ以テ「ルウター」及ビ「セントラル」新聞通信員ヲ使用セシニ、彼等ハ全ク該件ノ無根ナルヲ報告セリ。

若シ英國ニシテ果シテ貴意ノ如キ意嚮ヲ有スルナランニハ、前ニ已ニ報道シタル如ク、英國

外務大臣ト面晤ノ際幾何カ此件ニ付脅迫ノ方法ニ依テ或ル目的ヲ達シ得ベキ間接ナル語氣ヲ示スベキ筈ナリ。

露國ハ日本ニシテ滿洲一部ヲ所有スルニ至ラバ、之ガ障礙ヲ爲サンコトヲ欲スルモノノ如シト露語新聞ノ報道ニ見エタリ。然レドモ英國ハ露國ガ此ノ欲望ニ對シ聯合運動ヲ爲スベキ實際ノ利益ヲ有セズ。英國ガ懼ル、所ハ唯々現清朝ノ滅亡ニシテ、其ノ結果無政府ト爲リ種々ノ害毒ヲ生ズル一事ニ在リ。種々ノ點ヨリ思考スルニ、英國ハ縱令ヒ多少ノ政略アリトスルモ其ノ何事ヲ成スベキヤハ未ダ一定セザルコト殆ンド確實ナルガ如ク、且ツ愚按ニ據レバ以上記載ノ恐慌ト同時ニ清國ニ於ケル歐洲居留民ノ商業上及ビ其他ノ利益ヲ妨碍セラル、ニ至ラザル以上ハ、英國ハ今回ノ事件ニ對シ其ノ甚シキ干涉ヲ爲サルベシト思考ス。

倫敦 加 藤 高 明

(二月十三日發)

國務卿ハ歐洲ノ干涉ニ付キ頗ル憂慮セリ。卿ノ見込ニ據レバ滿洲朝廷ハ北京ノ占領ト共ニ滅亡スベシ。果シテ此ニ至レバ日本ハ現清朝ヨリ一層不充分ナル敵國ト接見セザルベカラザルハ殆ンド確實ナリト云フニ在リ。卿ハ又露國ガ北京ノ占領ヲ幫助スルガ如ク見ユト謂ヘリ。卿ハ

我が報告ノ爲ニ充分露國及ビ英國ノ現今ノ位地ヲ確カメ見ルベシト約セリ。

華律頓 栗野慎一郎

(二月十三日發)

貴書ニ付テハ「タイムス」新聞ノ記事ハ全ク無根ノ事タリ。露國臨時外務大臣ハ近時露國政府ガ此問題ニ關シテ何事ヲモ成サバリシコトヲ云ヘリ。然レドモ彼等ハ日清兩國ニ於ケル各公使ノ手ヲ經テ日清兩國ニ向テ迅速ニ平和ノ締結ヲ爲スベキ切望ヲ通告セシメタリ。

外務大臣ハ又曰ク、露國皇帝ハ此ノ戰爭ニ於テ大ニ注目セリト。

露政府ノ意嚮ヲ探ランガ爲メ屢々露國ノ當該官ニ接晤スルヲ急ガレンニハ、此ノ戰爭ノ經過ニ關シ絶エズ新報ヲ供給セラレンコトヲ望ム。

露國政府ハ日本ガ此ノ戰爭ノ終局ニ於テ朝鮮ノ獨立ニ干涉セザル限リハ左マデ有効ナル干涉ヲ爲サルベキハ殆ンド信ジテ疑ハザル所ナリ。

聖彼得堡 西 德 二 郎

(二月十七日發)

李鴻章ハ日本ニ向テ進發スベシト任命セラレタリトノ報ニ關シ、「タイムス」新聞ハ是レ清國ガ最終ノ手段ニシテ、日本ガ之ニ對シ要求スル事項ハ知ル能ハザルモ、困難ナル軍事費ノ償金ハ勿論要求セラルベシト云ヘリ。又日本ハ清國本土ニ關シ其土地ノ割讓ヲ求ムルガ如キハ多分之レナカルベシト雖モ、恐ラクハ清國全體ヲシテ外國貿易ノ爲ニ開放スベシト主張スルナラント云ヘリ。又其ノ記事ニ依レバ露國新聞ハ放言シテ歐洲干涉ノ時機ハ到來シタリ、露國ハ日本ヲシテ朝鮮ノ獨立ヲ破壞セシメ、若クハ滿洲ヲシテ其ノ何レノ部分タリトモ日本ノ占領ニ歸セシムルガ如キハ之ヲ許サズ。而シテ日本ノ當サニ略取スベキハ之ヲ臺灣ニ限ラザルベカラズ。尤モ其ノ償金ノ仕拂ヲ保障センガ爲ニハ、日本ガ清國ノ各港ヲ占領スルヲ許スベシト云ヘリ。「セントゼームスガゼット」ハ歐洲干涉ノ意嚮ヲ譏笑シテ云ヘリ、露國ハ日本ト陸地上ニ於テ競争ヲ試ムベキ位置ニ立ツモノニ在ラズ。且ツ幼帝ハ即位後未ダ幾許ナラザルニ此ノ不確ナル冒險ニ與スベキヲ信ズル能ハズ、佛國ハ國事多端ニシテ其ノ政府ノ組織スラ未ダ完備スル能ハザレバ、此ノ新ナル冒險事業ニ濫リニ手出シスベキニアラズ。米國及ビ獨逸ハ甚ダ日本ニ同情ヲ表セリ。英國ト雖モ國民一般ノ感情ハ日本ニ注ゲリ。況ンヤ其ノ總選舉前ニ際シ、現内閣ガ斯カル尤モ不人望ナル冒險ノ渦流中ニ吾人ヲ投ズベキニアラズ。云々

倫 敦 加 藤 高 明

(二月二十一日發)

露國臨時外務大臣ト對晤セシニ、彼ハ曰ク、歐洲ノ各國ハ清國土地ノ或ル部分ニ關シテ相互ノ利害ヲ感ズルノ事實アルニ依リ、列國ガ干涉ヲ容ルベキハ全ク日本ガ平和ノ條件トシテ如何ナル地方ヲ要求スルヤノ一點ニ存スルモノ、如シト。而シテ彼レハ余ニ向テ、貴國ハ如何ナル地方ヲ要求スルヤト問ヘリ。余ハ之レニ答ヘテ曰ク、我政府ノ要求ハ未ダ之ヲ悉ラカニセズト雖モ、余ガ意見ヲ以テセバ今回ノ戰爭終局後清國ハ容易ニ其ノ敗衄ヲ忘却スルコトナカルベク、又我國ニ對シ彼レ必ラズ鞏固ナル陸海軍ヲ組織スルニ至ルベシ。是レ我國ガ正當防衛ノ點及ビ遠隔ナル地ニアルノ故ヲ以テ、將來ノ爲メ直隸灣附近ニ我海軍ノ便ニ供スベキ善良ナル港口ヲ占有スベキハ今日ニ於テ希望セザルベカラザルニ似タリ。且ツ余ヲシテ斯カル軍港ヲ選定セシムベクンバ、余ハ威海衛ヨリハ寧ロ旅順港ヲ選擇セント欲ス。此レ即チ歐洲各國ノ利益ヲ抑損スルノ憂ヒナキヲ以テナリ。貴下以テ如何ト爲スト。

此ノ問ニ關シ彼レ少シク驚愕シテ曰ク、篤ト熟考ノ上ナラデハ貴答シ難シト。

此ノ談話ニ依リ察スレバ、只ダ清國本土ノ割取ニ關スル我要求ニ付テハ露國、英國及ビ佛國等ヨリ多少ノ反對アルベキヲ豫想シ、且ツ之レガ準備ヲ爲スハ刻下ノ急務ト信ズ。但シ彼等反

對ノ程度ニ至ツテハ今之ヲ明言スルコト能ハズ。

聖彼得堡 西 德 二 郎

(二月二十日發)

國務卿ハ云ク、列國ノ位地ヲ確カムルハ實ニ困難ナリ。米國在清公使ハ英佛及ビ露國ニ對シ(二十二字削除)若シ李鴻章ニシテ全權大使ト爲リ日本ニ赴クニ於テハ日本ハ宜シク敵意ヲ止メ、且ツ直隸地方ヲ襲撃スルコトナカルベキ旨ヲ日本政府ニ照會シ得ラルベシト電牒シタリ。然レドモ右ノ各國ガ如何ナル程度マデ干涉スベキヤハ之ヲ確言スル能ハズト。

華 律 頓 栗 野 慎 一 郎

(二月二十一日發)

亞細亞政廳長官唯今來訪セラレタリ。而シテ閣下ヨリノ書簡ノ要領ニ關シ、余ガ信實ナル談話ニ付キ彼ハ曰ク、若シ朝鮮ノ獨立ヲシテ我等ガ平和條件ノ一タラシムルニ於テハ、歐洲列國ハ清國政府ヲシテ全權大使ヲ日本ニ送ルコトヲ急ガシムベキ旨ヲ紹介スベシト。余ハ之ニ答ヘテ曰ク、此ノ儀ハ全ク列國ノ隨意タルベシ。朝鮮ニ對スル我ガ意見ハ既ニ明白ニ報告セシ如ク

列國ニ對シテ嘗テ變更スルガ如キコトナカルベシト。又察スルニ清國ハ已ニ全權ヲ有スル新大使ヲ選定セルモノ、如シ。尤モ此ノ事ニ付テハ多分東京駐在露國公使ヨリ閣下ニ談示スル所アラント存ズ。

聖彼得堡 西 德 二 郎

(廿八年八月六日附)

佛國外務大臣ハ未ダ二國ノ回答ヲ受取ラザルガ故ニ、同大臣ヨリ東京ニ送ルベキ確答ノ趣旨ヲ本使ニ告グルコト能ハズト語ラレタリ。同大臣ハ今夕ヨリ再ビ旅行スル積ナリ。

巴 里 會 禰 荒 助

(二十九年二月四日發)

香港上海銀行ノ代理人ハ清國政府ノ躊躇決スル所莫キヲ怒リ、之ガ爲メ該銀行トノ公債談判全ク罷ミタリトノ報アリ。目下總理衙門ハ困難ノ地ニ立チ、別ニ何人カ公債ヲ引受ケント申出デンコトヲ切ニ冀望シ居レリ。

北 京 林 董

デットリング(特派員天津稅務司)書翰寫

謹啓陳バ余ハ總督李鴻章ノ手簡ヲ携ヘ天津ヨリ直航ノ汽船ニ搭ジテ、去二十六日ヲ以テ神戸ニ着シ、同日夕刻知事ニ向テ余ノ來着ノ趣ヲ閣下ニ電報シ、併セテ余ガ攜帶ノ手簡ヲ親シク閣下ニ奉呈スルノ機會ヲ與ヘラレンコトヲ閣下ニ問合セラレンコトヲ請ヘリ。且ツ又昨日知事ヨリノ來書ニ接シ、余ガ委任ヲ受ケタル事件ノ要領ニ關シテ返書ヲ呈シ置ケリ。

今日ニ至ルマデ未ダ何等ノ回答ヲ得ズト雖モ、事態甚ダ切迫スルヲ以テ余ハ茲ニ總督ノ手簡ヲ封入シテ閣下ニ奉呈ス。閣下ハ此ノ手簡ニ依テ領知セラル、如ク、余ガ今回派遣セラレタル目的ハ、日本ハ清國ヲシテ平和ヲ回復セシムベキヤ、若シ然ラバ如何ナル要件ヲ以テ現時ノ不幸ナル交戦ヲ結了スルヲ得ベキヤニ付キ、閣下ノ高見ヲ聞カントスルニ在リ。

閣下若シ本書若クハ余ノ前信ニ對シテ談判ノ基礎トナルヲ得ベキ返信ヲ惠與セラル、ニ於テハ、余ハ直ニ電文ヲ以テ其ノ要領ヲ李總督閣下ニ報告シテ清國皇帝陛下ヘ之ヲ奏上シ、以テ媾和條約ニ對スル準備規約ニ調印スルノ全權ヲ同陛下ヨリ受クベシ。

余ハ敢テ閣下ガ總督ノ手簡並ニ本書ニ記載スル諸要點ニ付キ考慮ヲ加ヘラレンコトヲ請ハン
トス。余ハ將ニ本夕ヲ以テ神戸ヲ出發セントス。然レドモ余ハ猶ホ返信ヲ得ンコトヲ期シ、且
ツ閣下ノ命ヲ聞カンコトヲ欲スルヲ以テ、清國ニ向テ歸途ニ就クノ前、禮祐號ヲシテ九月廿九
日正午ヨリ同三十日正午ニ至ルマデ、神戸馬關間汽船航路中釣島燈臺ノ北怒和島ノ南方ニ於テ
碇泊セシムベシ。敬具

一千八百九十四年

神戸ニ於テ

特派員 天津稅務司

デットリング

日本内閣總理大臣 伊藤 伯閣下

謹啓余ガ天津ヲ出發セントスルニ際シ、李總督ハ余ヲ清國政府ノ爲ニ特ニ閣下ニ向テ派遣ス
ルノ公文ヲ余ニ渡シ、之ト同時ニ茲ニ封入ノ手簡ヲ托サレタリ。余ハ親シク閣下ニ謁シテ此ノ
手簡ヲ奉呈シ、且ツ李總督ヨリ委托セラレタル要領ヲ閣下ニ開伸センコトヲ欲シタリキ。然レ
ドモ到底閣下ニ謁スルノ光榮ヲ得ルノ望ヲ放棄セザルヲ得ザルノ狀況ナルヲ以テ、余ハ郵便ニ

托シテ前記ノ手簡ヲ閣下ニ送呈スルニ決セリ。余ハ茲ニ天津事件以來閣下ニ對シテ懷ケル敬服
欽慕ノ意ヲ表示ス。敬具

一千八百九十四年十一月廿八日

神戸ニ於テ

デットリング

伊藤 伯閣下

謹啓陳者本日閣下ニ向テ一書ヲ奉呈シタル後、去二十六日附ノ電報ヲ得タリ。同電報ニ依レ
バ米國ハ本件ニ關シテ媒介ノ勞ヲ取ランコトヲ申出デ、日本ハ之ヲ承諾シタルニ付キ、余ハ清
國ニ歸航スベシトノ旨ヲ記セリ。

因テ余ハ將ニ明朝ヲ以テ當地ヲ出帆セントス。然レドモ閣下若シ余ニ何等ノ通知ニテモ與ヘ
ラレントスレバ、余ガ乗込メル汽船ハ來二十九日ヨリ三十日ニ至ル一夜ノ間余ガ前信ニ記シタ
ル場所、即チ神戸馬關間汽船航路中釣島燈臺ノ北怒和島ノ南方ニ於テ碇泊スベシ。敬具

一千八百九十四年十一月二十八日神戸ニ於テ

デットリング(特派員天津稅務司)再翰寫

特派員 天津稅務司 デットリソグ

日本內閣總理大臣 伊藤 伯閣 下

新政施行ニ付上申

西南ノ事平定將ニ近キニアラントス。而シテ政治ヲ誹議スルモノ紛々愈ヨ熾ナラントスルノ萌アリ。此際ニ方リ地方ニ官タル者宜シク猛省深察ヲ加ヘ、既往ニ徴シ將來ヲ誡メ、一層理治ニ勵精セザル可カラズ。竊ニ聞ク廟堂上ニ於テモ深ク心ヲ民政ニ用ヒ玉ヒ、深仁至愁ノ御改正御評議アラントスト。感喜ノ至リニ堪ヘズ。愚昧ヲ不顧左ニ一二ヲ上申ス。御參考ノ一端ト相成ラバ幸甚。

夫レ世ノ開明ニ嚮フヤ廣ク外國ノ良法ヲ採用スルハ勿論ノ事ニテ、所謂衆智ヲ合スルノ最大ナル者ナリ。然レドモ其方法多クハ其國ノ成立ト慣習ニ因テ生ズル者ナレバ、先ヅ其國ノ成立ヲ視察シ、隨テ其法ノ由テ起ル所以ヲ審ニセザル可ラズ。或ハ民會ヨリ起テ政府ヲ成シ方法ヲ生ズル者アリ、又政令能ク無智ノ民ヲ教育シテ以テ政府ヲ成シ方法ヲ布ク者アリ。又宗旨ヨリ成立ツ者モアル可シ。若シ之ヲ審察セズシテ漫然方法ノミヲ採取スルトキハ、管ニ其方法ノ行

ハレザル而已ナラズ、條理顛倒却テ國家ヲ擾亂スルニ至ラン。彼ノ宗旨ノ戒メ肉食妻帯ハ政事ノ關スル所ニ非ラズ。官撰ノ區戶長ハ人民ノ總代トナル可カラズ。民費ノ警察官吏ハ寧ろ省ノ官員タル檢事ノ使役スル所ニアラザルナラン乎。祿位ヲ與ヘ門閥ヲ重シ家系ヲ保護セラル、華士族ノ家督相續法ハ自立力食ノ百姓町人ノ身上ニハ施シ難カラシ。

一、中央集權ハ藩制ノ時ニハ專ラ注意遵行ス可キ事ニシテ、郡縣ノ世ニハ用ユ可カラザルコトナランカ。今ノ地方官ニシテ人民ヲ開明ニ導カントスルカ、茲ニ勅奏官ニ準ズル教導職アリ、其說奇異妖恠ニ涉ルモノ内務省ニアラザレバ之ヲ制ス可カラズ。住職ノ僧不都合アルモ教導職以上ナル時ハ之ヲ退クコトヲ得ズ。人心ヲ擾シ治安ヲ妨グルモ、華族ナレバ伺ヲ經ザレバ糾問ス可カラズ。浸潤ノ譖モ條例ニ觸レザレバ新聞紙ノ發行ヲ止ムルヲ得ズ。人身ヲ賣買スル者モ其外面借金ノ證文ナレバ罰スルヲ得ズ。人身ヲ害スル醫者モ容易ニ其業ヲ禁ズ可カラズ。墜ントスル橋梁、潰レントスル堤防モ官普請ナレバ伺ヒテ經ザレバ着手スベカラズ。神官僧侶多クハ社寺局ノ管スル所、華族ハ宮内省ノ管スル所、此ハ行政ノ警察スル所、彼ハ司法ノ警察スル所、分毫其限ヲ踰ユレバ俄ニ檢事ノ怒ニ觸レ、一言説諭ヲ過グレバ忽チ判事ノ權ヲ犯ス。右ニ慮リ左ニ顧リミ寧處アルコトナシ。如斯シテ豈民心ヲ開明ニ導キ擾亂ヲ未萌ニ防ギ、物産ヲ興隆シ富強ヲ圖ルノ暇アラシヤ。假令暇アルモ亦其力

ヲ展ブルコトヲ得ズ。地方官ノ事務萎縮振ハズ、動モスレバ人民ノ侮慢ヲ來ス亦宜ナル哉。況ンヤ民情ノ上達セズ、官令ノ民情ニ適セザルモノアルニ當テ、地方ノ維持如何カ所置セシ。夫レ如此シテ中央政府ハ孰レト共ニ斯民ヲ誘導シ、國家ヲ保チ、富強ヲ圖リ玉フベキヤ。

右上申ニ付從前實施上困難スル者數件ヲ拔萃シ、併セテ鄙見ノ一二ヲ記シ別冊ヲ呈上ス。

事鎖細錯雜ト雖モ希クハ乙夜ノ覽ヲ玉フアラバ或ハ萬機一助ヲ補フアラン。

- 一、幕政中御料村ニヨリ出金ノ末御下戻無之ニ付難澁之件
- 一、社寺領上地處分方ニ付出金主難澁之件
- 一、戶籍法之義ニ付内務省へ上申之件略述
- 一、舊教部省昨九年第四拾號達書之義ニ付略述
- 一、三代相恩之者御詮議濟ニ付内務省へ上申之件略述
- 一、元綾部藩銃卒剩卒三十九名之儀ニ付略述
- 一、小林萬平資本金嘆願ノ件略述
- 一、御陵墓掌丁被差免候付去ル明治七年舊教部省へ伺出之義略述

- 一、貸附金棄捐公布之義ニ付上申
- 一、新發明之品專賣方御詮議被爲在度義ニ付上申
- 一、堤防修繕之義ニ付上申
- 一、出版板權之義ニ付上申
- 一、地租改正之義ニ付上申
- 一、同
- 一、同
- 一、地租金額五分通米納允許アルトキ相場立之考
- 一、神官僧侶之義ニ付上申
- 一、同
- 一、事務煩鎖之義ニ付上申
- 一、家 券 之 件
- 一、社

小堀演說書拔

一、去ル卯年舊幕府上京中臨時物入多ク爲縁合 御所々御料竝私領村々之者ヨリ借上金之儀板倉伊賀相違候ニ付、身元之者共へ申諭出金仕候分、當辰年ヨリ元幕領私支配所物成金之内ヲ以テ別紙書面割合之通リ手當相添下戻之積リ、私役所請取書遣シ置候儀ニ御座候。然ル處一般御料ト相成候上ハ、金主共へ棄捐可申渡筋ニモ可有之哉ニ奉存候處、イヅレモ下方難澁可仕ハ勿論之儀ニ付、精々勘考仕候得共何分下渡出方無之依テハ不容易儀ニハ御座候得共、外村々御料以前幕領先納且ツ守護職役知先納又ハ借入金等既ニ物成ヲ以テ差次被下相成候次第モ有之、道理合ニオイテ相變候儀モ無御座候間、出格之御仁惠ヲ以テ村々爲御救書面金高御料當辰年御物成之内ヨリ來ル十二月ニ至リ被下方相成候様被仰付度可奉伺心組之處此度御引渡申上候。付テハ猶可然 御憐愍之御沙汰被成遣候様仕度奉存候。別紙出金高帳壹冊御引渡申上候。

舊幕へ差出金名前帳

合金壹萬九千百六拾兩

御料私領村々出金

是ハ當卯ヨリ末迄五ヶ年賦又ハ七ヶ年賦年五朱之手當差添下戻之積

此 譯

御料出金之分

山城國 修學院村

金貳百五拾兩

高野村

金七拾兩

山城國中畑村

松ヶ崎村

金六百兩

同國紫竹大門村

岩倉村

金五拾兩

同國

中津川村

中畑村

出谷村

新九郎

六之丞

金百五拾兩

同國 唐橋村

金三百五拾兩

同國上村 大助

金百五拾兩

同國杉阪村 中郎右衛門

金三百三拾兩

同國中村 惣左衛門

金八百兩

同國 小野郷中

金百兩

同國 山科郷中

金三百兩

同國 志津川村

金貳百兩

同國 三室村

金三百兩

同國 寺田村

金貳百兩

同國多賀村 惣右衛門

金百五拾兩

同國 源三郎

金四百兩

同國 水取村

金百五拾兩

同國 上村

金百五拾兩

同國名村 久左衛門

新政施行ニ付上申

金貳百兩	同國	水主村
金八拾兩	同國	源次郎
金五拾兩	同國	奈島村
金八拾兩	同國	江津村
金三拾兩	同國	宮ノ口村
金三拾兩	同國	出垣内村
金九百五拾兩	同國	和東郷中
金九百五拾兩	同國	忠次郎
金百五拾兩	同國	利次郎
金百兩	同國	彌三郎
金五拾兩	同國	彌右衛門
金貳千貳百兩	同國	宇治田原郷中
金千兩	同國	木津郷中
金貳百兩	同國	田村新田
金貳百五拾兩	同國	椿井村

金百四拾兩	同國	平尾村
金貳百四拾兩	同國	林尾村
金五拾兩	同國	周次郎
金三拾三兩	同國	四郎兵衛
金拾七兩	同國	岡崎村
金貳百貳拾五兩	同國	佐兵衛
金貳拾五兩	同國	金十郎
金貳百四拾兩	同國	綺田村
金五拾兩	同國	神童子村
金百五拾兩	同國	孫兵衛
金百五拾兩	同國	吐師村
金六拾兩	同國	乾谷村
金五拾兩	同國	植田村
金四拾兩	同國	柘榴村
金貳拾兩	同國	菅井村

新政施行ニ付上申

小以金壹萬貳千參百六拾兩

山城國

私領ヨリ出金ノ分

金百五拾兩	近江國中村	次	兵	衛
金貳百兩		四	郎	兵
金百五拾兩	同國町屋村	武	兵	衛
金貳百兩		太	郎	兵
金貳千兩	同國能登川村	一	郎	兵
金貳百兩		忠	右	衛
金貳百五拾兩		金		六
金三百兩	同國川並村	定	右	衛
金參百兩	同國登庄村	善		助
金貳百兩		善	右	衛
金百兩		忠		藏
金八百兩	同國外村	與	右	衛
				門

金三百兩	同國塚原村	助	右	衛
金五百兩	同國金堂村	宇	兵	衛
金百兩	同國五位田村	利	右	衛
金三百兩	同國佐野村	彦	次	郎
金百兩	同國淺小井村	九	兵	衛
金貳百兩	同國富波新町村	新	兵	衛
金百五拾兩	同國太田村	鐘	次	郎
金三百兩	同國霜降村	又	兵	衛
小以金六千八百兩				衛

舊幕政務中御料村々ヨリ出金之末、去ル辰年七月頃ヨリ御下金之儀追々嘆願致候得共、同年ハ至急之御事件勝ニ有之候故右等迄ハ何分難被及御沙汰追而取調可遣旨ヲ以テ利辨申達置候。然ル處當春ニ至リ又々再應難澁之次第嘆願申出候ニ付難差捨加評議候處、舊幕領丈ケハ先納又ハ借入金共既ニ昨春物成ヲ以テ差次御下渡ニ相成候儀ニテ於其理ハ同様ニ候間

御料分モ當年ヨリ五ケ年賦ニテ御下ケ渡ニ相成度候ハ、御仁恤難有奉戴可仕候、則村方嘆願書且ツ出金高帳小堀數馬送寫差出候間宜敷御高評御決議被下度存候事。

巳 二 月

京 都 府

右ハ會計官ヘ馬場様御直出シ爲念留置候事。

會計官ヨリ御報附紙

本文舊幕府ニテ調達申付候村々出金辰年租稅外年々前納爲致其年ニ至リ返濟之取定有之分ハ辰ヨリ三年賦無利足ニテ御下渡可相成、其餘之出金ハ追テ御下ケ戻方可相成筈ニ付向御下戻難相成候條可然御申諭可有之候此旨御報申入候也

三 月

會 計 官

京 都 府

舊幕政務中御料村々ヨリ出金之末、去ル辰年七月頃ヨリ御下ケ金之儀追々嘆願イタシ候得共、同年ハ至急之御事件勝ニ有之候故右等迄ハ何分難被及御沙汰、追テ取調可遣旨ヲ以テ利辨申達置候處、去ル巳年春ニ至リ再應難澁之次第嘆願申出候ニ付難捨置加評議候處、舊幕領丈ケハ先納又ハ借入金共既ニ辰年春卯年物成ヲ以テ差次御下ケ渡ニ相成候儀ニテ於其理ハ同様ニ候間、御料分モ巳年ヨリ年賦立ニテモ御下ケ渡ニ相成候ハ、御仁恤難有奉戴可仕候、則チ村方嘆願書竝ニ出金高帳小堀數馬書送寫差出御高評御決議被下度段去ル巳年二月中會計官ヘ及掛合候處、舊幕府ニテ調達申付候村々出金辰年租稅卯年ニ前納爲致其年ニ至リ返濟之取定有之分ハ辰ヨリ三年賦無利足ニテ御下ケ戻可相成、其餘之出金ハ追テ御下ケ戻方可相成筈ニ付差向御下ケ戻難相成候條可然申諭方可致旨同三月中附紙ヲ以テ御報有之候ニ付難默止村々ヘ厚ク利解申聞置候。然ル處猶又此節ニ至リ村々難澁之譯ヲ以テ嘆願申出無餘儀次第トハ存候得共、舊幕府取扱中夫食種糶農具代其外米金口々借請未納有之村々ハ都テ不及上納旨當午七月中民部省ヨリ御達有之候儀ニ付、前段村々出金之分ハ御下ケ渡無之筈ト相心得候間、嘆願申出候村々ヘ右御達之趣ヲ以テ申渡可然哉、去ル巳三月中會計官ヨリ御報之趣モ有之候間旁此段相伺候、否早々御差圖被下度候也。

庚午十一月五日

京 都 府

新政施行ニ付上申

三五三

辨官御中

御附紙辨官卯

見込之趣ヲ以テ村々へ可及示諭候事

辛未二月九日

本文舊禁裏御料村々出金之分御下ゲ渡之儀戊辰年村々嘆願申出候節御利辨之末巳年中會計官へ御引合相成、同官回答之趣ヲ以テ厚ク御利辨相成居、猶同官へ屢々御直引合ニモ有之候得共、何分御下ゲ渡之運ビニ至リ兼候中、庚午七月中民部省ヨリ舊幕府中貸下ゲ金米等之所分方御達有之候處猶又村々嘆願申出候得共、迺モ御下ゲ渡之運ビニハ不至次第、左候迎此上村々へ御達シ方ニモ差支候間實ニ無御據次第ニ成行、本文ノ通御伺出ニ相成候事ニ承知罷在候、且ツ又其後モ段々嘆願候儀ハ郡村掛ニテ取扱相成居候事。

租 稅 課

舊幕府取扱中夫食種糧農具代其外米金口々借請未納有之村々ハ都テ不及上納、尤モ以來拜

借願出候ハ、返納之儀相當之期限取極可伺出候事

庚午七月

民 部 省

明治九年
二月十九日
附ヲ以
相伺候處
(明治九年五月十日)
二日太政官第六十六號公布ニ照シ
同年六月八日附御指令相成候

山城國愛宕郡今熊野村泉涌寺塔中案樂光院兼務永圓寺上地山林反別貳町六反歩ノ場所去ル安政六未年同村伊藤庄次郎ナル者案樂光院へ相對熟談相整へ同年ヨリ末百五拾ヶ年季ヲ以テ受山約定ノ上先納トシテ銀三貫五百目外ニ毎年山手米壹斗ツ、差出其後別紙寫證書面ノ通り出金ノ上前書反別貳町六反歩ノ内裾通り四反貳畝五歩自費開拓種藝罷在候處、先般山林及ビ開拓畑地共境外上地相成候處、從來出金ノ次第ヲ申立所有地ニ下渡ノ儀願出候得共、右山林ノ儀ハ御歴代御陵近傍向後民有地ニ屬シ伐木等致候様ニテハ山景ヲ失シ候儀ニ付、山林貳町壹反七畝貳拾五歩官山へ引戻シノ積リ、安政度以來追々伊藤庄次郎ヨリ寺門へ出金九拾參圓八拾壹錢六厘ノ内金七拾八圓六拾錢出金主へ下戻シ、官山存置ノ部へ編入致度將亦開拓畑四反貳畝五歩ノ儀ハ山裾ニテ敢テ風景ニ關シ候場所ニ無之、實地茶園繁茂致居候ニ付無代價ニテ伊藤庄次郎所有地ニ下渡ノ儀昨九年二月十九日附ヲ以テ内務省へ相伺候處、伺ノ趣キ開拓畑四反貳畝五歩下渡ノ儀ハ聞届ケ候、成規ノ通り地種編入賦稅ノ儀ハ大藏省へ山林貳町壹反七畝貳拾五歩、官山存置見込ノ分ハ本年第六拾六號公布ニ照準取調可

新政施行ニ付上申

申出旨、同年六月八日附地租改正事務局ヨリ御指令相成候ニ付、其旨伊藤庄次郎へ相達候處、困難ノ次第ヲ申立、山地貳町壹反七畝貳拾五步是非下渡相成歟又ハ文政度以來四ヶ度出金七拾八圓六拾錢ノ分下渡相成歟ノ段同年七月附尙亦願出候ニ付、事實取調ノ上再應伺出ノ積リ。

明治九年一月廿九日附及同年三月五日附ヲ以兩度相伺候處(明治九年五月十二日太政官第六十六號公布ニ照シ)同年五月廿七日附指令相成候

一、同國葛野郡松尾谷村西芳寺境外上地山林反別壹町七反五畝歩ノ儀ハ、同村山下忠五郎ナル者、去ル弘化三年ヨリ末貳拾五ヶ年ノ間同寺ヨリ受山致シ、立木代金六兩貳分、外ニ山手米五升ヅ、差出來候處、年明ケニ至リ候ニ付、重ネテ去ル明治三年ヨリ末貳拾五ヶ年ノ間更ニ受山約定取結ビ、立木下草料トシテ金貳拾兩、外ニ毎年山手米五升ヅ、差出來候處、從來受山ノ因縁ヲ以テ山地下渡ノ儀願出候ニ付證書類取調候處、申出ノ通り相違無之候得共、右山林ノ儀ハ水源涵養且ツ土砂崩害等有之、將官山へ接續ノ地ニ付、則チ官山存置ノ部分へ編入致度候付テハ、先年西芳寺へ立木代金貳拾兩差出ノ分御下渡相成度旨、昨年一月廿九日附ヲ以テ内務省へ相伺候處、書面山下忠五郎受山約定證書寫差出可申、尙ホ山手米ノ儀ハ上地以後ニ於テモ引續キ西芳寺へ收納候哉否其邊ヲモ取調可申出旨、同年二月十七日附御指令相成候、然ル處別段約定證書連テハ無之、最前伺書ニ寫相添差出置候

庚庚午年ヨリ末貳拾五ヶ年ノ間、受山立木下草料トシテ金貳拾兩山下忠五郎ヨリ西芳寺へ差出ノ證書ヲサシテ伺文中ニハ約定取結候旨相認候事ト有之、尤モ上地以後辛未年ヨリ引續キ昨亥年迄貢米五升ヅ、官納ノ儀ニ付、最前相伺候通り山下忠五郎へ立木代金貳拾兩御下渡相成度旨、同年三月五日附ヲ以テ再應相伺候處、難聞届候條本年太政官第六拾六號公布質地年限中ノモノト同様處分致シ、立木代金貳拾圓ハ該寺ヨリ爲受返可申旨、同五月廿七日附御指令相成候ニ付、右御指令ニ據リ其旨山下忠五郎へ相達候處、去ル弘化度苗木植現今生立ノ次第ヲ申立、是非立木代下渡ノ儀同十二月中尙ホ亦願出候ニ付、實否取調ノ上再三伺出ノ積リ。

明治九年七月、同年十二月廿七日、明治十年三月九日附都合三度相伺候處始終御聞届無之旨明治十年三月廿日附御指令相成候

一、同國綴喜郡男山八幡宮境外上地ノ内、佐々木吉三郎始メ拾名山山林藪地共反別四町三反貳拾貳步貳厘ノ儀原由取調候處、從前境内山上ニハ往昔坊舍四拾壹ヶ所有之候處、追々破壊空坊ト相成候ヨリ、自然ト立竹木生茂リ山林藪地ノ景況ニ變換候ヲ舊社務瀧本坊始メ拾五名ノモノニテ右坊跡ノ山林藪地分割所持罷在候處、文政度以來右山林藪地共代價ヲ以テ相互ニ讓引致シ來リ候處、先般上地相成候ニ付、從來出金讓受ノ因縁ヲ申立、銘々所有地ニ下渡ノ儀願出、取調候處何レモ出金ノ證所持罷在候、然ルニ右山林藪地ノ儀ハ社頭ノ景況へ

新政施行ニ付上申

モ關シ候場所ニ付、今後民有地ニ屬シ猥リニ伐竹木等致候様ニテハ社地ノ風候ヲ損シ候ニ付、此儘官山ニ据置、右替地トシテ同社末社ノ内狩尾社上地山林反別四町四反四畝九步、八幡宮境内トハ凡里程拾五町餘差離レ、何等差支無之地ニ付、則チ右山林並ニ佐々木吉三郎始メ拾名ノモノ所持、八幡宮境外山林藪地共立竹木本數束數及ビ代價取調候處、佐々木吉三郎始メ拾名所有ノ立竹木代金六百四拾參圓貳拾參錢九厘ヲ以テ御買上ゲノ上狩尾社上地山林立木代金六百四拾圓八拾八錢六厘ニテハ貳圓參拾五錢三厘不足候ニ付、右金替トシテ返上ノ山地壹反三畝拾六步八厘ヲモ銘々へ下ゲ渡シ、山林四町三反貳拾貳步貳厘官山存置ノ部分へ編入致度次第ヲ申立、前條替地ノ儀御聞届相成度旨、昨九年七月附ヲ以テ内務省へ相伺候處、伺之趣キ本年第六拾六號公布ノ通り其民有地トナシ、差支アル者ハ上地セシムベキ儀ニ付替地ノ儀ハ難聞届候條、直ニ上地爲致候儀ト可相心得旨、同年八月廿九日附御指令之段了承致候、然ルニ昨八年三月同社境内外區別ノ上境外上地ニ屬シ候山林藪地ノ儀ハ前條ノ通り人民私有地同様、文政度以來出金讓引ノ次第ヲ申立、同年九月地所下渡ノ儀願出候處、當府下ノ儀ハ數百ヶノ社寺總テ境内外區別夫々地所分調査候儀ニテ、右山地所分ノ儀漸ク當七月中取調伺出候處、前條御指令ニ付テハ從來出金讓受ノ山林藪地等右公布以前所分伺出候分ハ、夫々所有地ニ下渡シ趣意同一ノ條件ニテ公布以後ニ涉リ六拾

六號ニ照シ上地相成候テハ惘然ノ至リニ有之、就テハ最前人民願出ノ際早速實否取調、持地所分ノ儀可伺出ノ處、事務繁劇ノ折柄、主任ノ者手廻リ兼候ヨリ所分伺出遅延、終ニ六拾六號公布相成、夫レガタメ人民ノ迷惑ヲ醸シ、實ニ不幸ノ至リ、全ク主任ノ者調方延引不都合ノ段申出、相當所分可致ニ付、特別ノ譯ヲ以テ最前相伺候通り替地ノ儀御聞届相成度旨、昨九年十二月廿七日附ヲ以テ相伺候處、再應ノ申立ニハ候得共難聞届旨、本年一月廿九日附御指令相成候得共、右山林ハ從來出金買得ノ上、銘々私山ニ致シ來リ候儀ニテ質地年限中ノモノニテモ無之、永々賣却ノ山林藪地ニシテ、今更賣却主へ地所差返シ代金取戻シ候運ビニモ難至、其故ハ現今所持人丙右山林ヲ最前賣却主乙へ返戻シ、代金可受取モ乙ヨリ其以前賣却主甲へ可返戻ニ至テ、絶家又ハ離散シ、返戻ノ道無之、然ルトキハ前後買得主ノ内ニハ孰乎出金ノ分、水ノ泡ニ歸シ、夫レガ爲メ一家及破産候モノモ有之、實ニ惘然ノ至リ、畢竟伺出遅延ヨリシテ上地相成候テハ及迷惑儀ニ付、替地ノ儀御聞届難相成儀ニ候得バ、相當代金、御下渡相成、人民難澁不致様特別ノ御詮議ヲ以テ至急御指令被下度旨、本年三月九日附ヲ以テ再三伺出候處、再三具申ノ趣ニハ候得共難聞届旨、同月廿日附御指令相成、客歲七月以來本年三月九日附トモ都合三度相伺候處、始終御聞届不相成旨、御指令ニ付テハ換地相當代價共一般ノ成規ニ牴牾御下渡不相成儀ニ候得バ、不得止次

第二付、文政度以來數年夫々手入レヲ加へ生育候立木代、客歲七月附ヲ以テ右伺候金額六百四拾參圓貳拾參錢九厘ノ辻御下渡相成度旨取調、尙ホ亦不日伺出ノ積リ。

明治九年
二月十九
日附ヲ以
相伺候處
(太政官
第六拾六
號公布ニ
照シ)同
年五月廿
五日附御
指令相成
候

一、同國葛都郡天龍寺塔中上嵯峨村寶篋院敷反別壹町七反九畝貳拾步ノ儀ハ、去ル文久三亥年天龍寺門前言右衛門始メ四名ノ者、同院へ相對ヲ以テ年季受約定罷在候處、同年十月同郡下植村風間八左衛門右敷地立竹代銀六拾六貫目出銀、言右衛門始メ四名ノ者ヨリ末八拾ケ年季讓受、尤モ年々地子米五升ヅ、院納致來候處、先般上地相成候ニ付從來年季受出銀ノ次第ヲ以テ地所立竹共拂下ゲノ儀願出候ニ付、證書爲差出取調候處、前述ノ通り相違無之ニ付、立竹ハ其儘受主ノ所有トナリシ地所ノミ更ニ拂下ゲノ積リ、地價取調ノ上代金百四拾參圓七拾參錢參厘ニテ拂下ゲノ儀、昨九年二月十九日附ヲ以テ內務省へ相伺候處、地所拂下ゲノ儀難聞届候條、本年太政官第六拾六號公布質地年限中ノ者ト同様所分致シ、立竹ハ該寺ヨリ爲受返可申旨、同年五月廿五日附御指令相成候ニ付、右御指令ニ據リ其旨受主風間八左衛門へ相達候、然ルニ寶篋院儀ハ去ル明治四年十一月中院號取消願出廢院相成居候、付テハ地所ノ儀御指令ノ通り所分可仕候得共、立竹ハ積年培養ノ勞貴モ有之、且ツ亦辛未年以來拜借地ニ申付、貢米ヲモ相納來候儀ニ付、文久度出金辻並ニ貢米代金ト現今立

竹代金凡ソ見競ノ上、出入取調候處(培養入費ハ除ク)全ク金四百四圓拾六錢參厘不足ニ付、現在立竹下渡ノ積リ、數束代價等取調候處、立竹貳千五百參拾五束ノ内ニテ不足金四百四圓拾六錢參厘ニ可當金額立竹代價ヲ以テ御下渡相成度、尤モ一時伐竹候テハ殘竹ノ爲メ方不宜候ニ付二ケ年ニ伐竹ノ儀取調再應伺出ノ積リ。

右葛野郡下嵯峨村天龍寺塔中妙知院始メ五ヶ所社寺境外上地山林敷地ノ内男山八幡宮境外ヲ除ノ外(八幡宮上地ハ明治九年七月何出)何レモ昨九年一二月附ヲ以テ地所々分ノ儀相伺候處、四ヶ月過グル公布(明治九年五月十二日)第六拾六號ニ照シ御所分相成候テハ、人民實ニ憫然ノ至リニ付、前條事實御洞察ノ上非常ノ御詮議ヲ以テ御聞届相成度候也。

明治十年四月

戶籍法之義ニ付上申之略述

辛未四月戶籍法御頒布之御規則ヲ根軸トシ、地方ノ便宜ニ依リ當府從來施行之方法ヲ取捨出入シ(戶籍法並編製仕方寄留人名錄書體編製方差添)印刷之上管内江致頒布度段、八年十一月內務省へ伺出候處、同年十二

新政施行ニ付上申

月廿七日付ヲ以テ『伺之趣詮議之次第有之、追而何分之儀可申達事』ト指令相成候得共、何之御沙汰無之ニ付、九年四月同省へ及催促候處、同五月十八日付ヲ以テ『申立之趣尤モニ相聞へ候得共、戶籍法一般改正之儀專ラ取調中ニ付、即今何分之指令難及候事』ト指令相成候得共、當府管下之儀ハ伺濟之上、明治元戌辰年編製以來及數年、籍面加除記入等ニ而自然不明瞭ニ成行候而者不相濟事改政之方法早々御指令相成度候事。

舊教部省昨九年第四拾號達書之儀ニ付上申之略述

舊教部省昨九年第四拾號達書ニ『各管内寺院修繕其他寺用之爲一時不得止借財候者有之節、地所建物及ビ寄附什器等抵當ニ書入候向ハ法類檀家協議之上、檀家貳名以上連署、各本寺法類之承認ヲ受ケ、本寺ニ於テ右様之義有之節ハ渾テ此手續ニ隨ヒ、同宗内ニテ重立候者貳名以上之承認ヲ受クベシ、決シテ僧徒一己之私借ト混淆無之様可致、此旨寺院へ布達スベキ事』ト有之候處、當府下數多之寺院之如キ寺有之、土地物品ヲ勝手ニ消却分散スベカラザル段、從來嚴重ニ達置、加之明治六年太政官第貳百四拾九號之御布告モ（此御布告○神社佛寺共古來所傳ノ什物衆庶寄附ノ諸器並ニ祠堂金等ノ類ハ神官僧侶ハ勿論氏子檀家ノモノタリトモ自儘ニ處分可致筋無之候條若不得止義有之候ハミ委詳具狀ヲ以テ教部省へ可申立候此旨布告候事）管下へ遍ク相達候得共、近來追々寺院貧窮ニ及

ビ候、就而者土地ハ素ヨリ珍奇之重寶ニ至ル迄分散候者往々有之、取締方既ニ行届兼候折柄、右達書施行致候テハ修繕及ビ一時不得止ヲ名目トシ、償却之目途無之シテ恣ニ土地什器ヲ散失致シ候者彌ヨ相増シ候義ハ必然之事ト相心得、右達書今一應御詮議相成候様本年二月十日内務省へ及上申候處、同廿七日同省少書記官足立正聲ヨリ右上申中當府ヨリ從來寺院へ嚴重ニ達シ置キタル文面參照ヲ要スルニ付、可差送旨照會有之、則チ其文面（此文面寺院制法中ニ有ツテ年々僧侶之土地及ビ什寶物品私ニ消却分散スベカラザル事ニ付境内之樹木猥リニ不可採用事）致遞送候處、三月廿二日ニ至リ同省ヨリ『書面舊教部省九年第四拾號達書之旨趣者、即チ其府ニ於テ相達シ置キタル地所始メ私ニ消却分散ス可ラズト之旨趣ト同義ニ付、申立之趣難及詮議事』ト指令アリ、然ルニ舊教部省右達之主意ハ、本寺檀中等之共議ヲ以テ質入等取計候事ニテ、當府ヨリ達シ置キタル私ニ消却分散スベカラズトハ、當府へ申出之上ナラデハ到底私ニ分散不相成義ニ候得者、決シテ同様ニハ無之、則チ前申ニ相認候通り既已ニ取締方行届兼候今日ニ當リ、此令一タビ相緩ミ候得者、重寶什器之散失又糺スベキ術モ無之事必然之勢ニ候得者、尙ホ又此邊厚ク御斟酌ヲ遂ゲラレ、右達書文中へ管轄廳ノ許可ヲ受ケ候上可取計旨之文言御加入相成候様御詮議被下度段、同四月十四日附ヲ以テ同省へ及再申候處、其後同省ヨリハ指令無之候得共、本月十六日太政官第四拾三號ヲ以テ『神社並ニ寺院ニ於テ其社寺ノ爲メ金穀ヲ借入ルルトキ、若クハ金穀ヲ借入ル、爲メ社寺附地所（除稅地ヲ）建物

什器(寶物古文書類ヲ除クノ外)等ヲ抵當ト爲ストキハ、必ラズ氏子檀家ト協議シ、總代二名以上ノ連署ヲ要スベシ、若シ此連署ナキトキハ總テ該社寺神官僧侶ノ私債ト看做シ、縱令右之抵當アルモ其效ナキ者ト爲スベシ、此旨布告候事』ト公布相成、此公布ニ而寶物古文書類散失ノ掛念者無之候様ニ候得共、猶ホ案ズルニ建物所有地什物ヲ抵當物ニ差入候義相叶候得者、諸寺院當時困窮致シ居候折柄ニ付、舉テ右ヲ抵當ニ差入候事必然ニ而、一旦差入候上ハ引戻候方法決シテ無之、建物モ所有地モ相失ヒ候上者、隨テ寺院モ存立不致、寶物古文書獨リ保存之道モ無之事ニ御座候、此邊府下諸寺院什器取締モ(此什器取締ハ諸宗諸派ニ一二名ツツ人撰之上府廳ヨリ兼而申付有之)深ク相嘆キ居候次第ニ有之、前義自然御採用不相成候而者、住々寺院之存立無覺東次第ニ立到リ可申候事。

一、當年內務省甲第拾二號ヲ以テ『府縣社以下神社什物之儀、自今左之通り相心得取締可致、此旨布達候事。

一、什物ハ各部類ヲ分テ其品柄員數等詳細牒簿ニ記載シ、尙ホ他ノ寄附ニ係ハルモノハ其年月姓名等ヲモ記入スベシ。

第一類 寶物、古文書。

第二類 祭具、什器並ニ持添之田畝、附屬之建物等。

右牒簿貳部ツ、編製、神官並ニ氏子(氏子無之向ハ該地ノ崇敬人)總代貳名以上、尙ホ該地之區、戶長連署

調印、壹部ハ區、戶長役所へ、壹部ハ其社へ藏メ置クベシ。

ト有之候處、府縣社ハ則チ府縣ニ於テ萬事取扱候ヲ以テ、村社之如ク區、戶長役場ニ什物帳ヲ納ムル様ニテハ、甚ダ條理不相立候ニ付、之ハ府縣ニ相納候様御達相成度候事。

三代相恩之者御詮議之義ニ付上申之略述

聖護院元門跡家來

堀 内 甚 五 郎

右ハ三代相恩之家來ニ而同列之者ハ去ル明治四年卒ニ被列、給祿モ被宛行候得共、同人義ハ元門跡之届出方不都合有之故ヲ以テ其節御詮議不相成候、然ルニ此義同人ヨリ一昨八年三月嘆願書差出候ニ付、篤ト取調候處相違無之、則チ同年六月內務省へ伺出候處、戶籍頭ヨリ推問有之末昨九年十月三十日ニ至リ大藏省ヨリ『伺之趣難聞届條、本年第百廿三號公布之通り可相心得事、但シ當省當管之事務ニ付、本文之通り相達候、尤モ族籍而已相願候義ニ候得バ更ニ內務省へ伺出候事』ト指令相成候ニ付、此件元來當人之出願ハ一昨八年三月ニシテ、府廳ヨリ內務省へ伺出ハ同年ノ六月ナルニ、九年九月之公布ヲ以テ御處分相成候而ハ愍然之至リニシテ、調

查中遷延相成候義當人處知ニ無之ニ付、此邊御詮議被下度旨、同年十一月尙ホ又同省へ申立候處、同十二月四日ニ至リ『伺之趣調査中遷延相成候共、可否決定前之義ニ付難聞屆條本年十月三十日指令之通り可相心得事』ト指令相成候得共、何分八年ニ出願セシモノニ對シ九年ノ公布ヲ以テ達方難取計ニ付、尙ホ又同年十二月前議再ビ申立候處、本年三月廿四日ニ至リ『伺之趣ハ既ニ客年第百廿三號ヲ以テ如何様之事實有之候共、一切採用不致旨御布告相成候上ハ、調中遷延相成候共、處分未濟中之者ニ付詮議ニ難及候事』ト指令有之候、然ルニ前年差出候願書へ後年相定メ候規則ヲ以テ發指令候道理ハ到底無之筈ニシテ、強ヒテ當人へ相達候テハ、獨リ當人之不幸而已ナラズ、官府ノ失錯トモ相成候義ニ付、尙ホ又本年四月十九日此段同省へ上申シ且ツ内務省へモ同日附ニ而右之事情ヲ陳述シ、上申之筋貫徹候様及再申候事。

第百廿三號

明治六年ニ第三十五號ヲ以テ舊藩ニ貫屬祿高引直シ願之義、同年三月三十一日限り可申出、右期限後ハ一切採用不致旨布告候處、爾後祿高ニ關シ種々願出候向モ有之候得共、本年八月第百八號布告ヲ以テ祿制改定候ニ付、總テ現今ノ處置ヲ以テ定度トシ、如何様ノ事實有之共、一切採用不致候條、此旨更ニ布告候事。

明治九年九月廿七日

右大臣 岩 倉 具 視

元綾部藩銃卒剩卒

三十九名

右各目之卒、元五拾壹名有之候處、明治四年秋解兵之御沙汰に付同藩用辨之爲め拾貳名差殘し、餘之三拾九名は其時限り聊之手當米を遣し暇差出候處、其後拾貳名は平民に復すと雖も終身被下賜候に付、三十九名之者處分之不均を嘆じ、屢々舊藩取扱之者へ相廻り候趣に而、去る明治五年六月右扱之者より三拾九名之嘆願書を差出候得共、既に舊藩處分濟之事故、迺も不被行義と相心得一切採用不致候處、其後近藩にも右同様之輩御處分遣相成候者有之旨を承及、尙ほ又切に舊藩取扱之者へ差廻候處、何分最前於府廳採用不致を固執し、右扱之者兎角説諭候趣然るに昨年十一月元名古屋藩家之内同様之苦情有之者士族に復して家祿を賜り、又平民に編入して修身祿を賜り候者有之候段、新文誌に相見え候より、彌よ不平を申立右扱之者も説諭に及兼候由に而、先頃府廳へ嘆願書差出候に付、本年三月三十日附を以て大藏省へ及進達候處、去る四月廿四日に至り同省より『上申之趣元ヨリ農籍ヨリ一代雇卒之義ニ候得共、解兵之際暇可差出ハ當然之義ニ有之、殊ニ目今ニ至リテハ昨九年第百貳拾三號公布之通り如何様之情實有之

候共採用不相成義ニ付請願難聞届候事、但シ舊名古屋藩卒處分之義ハ、本文公布前太政官伺濟之處、取調筋有之自然指令遷延、右公布後ニ涉リ候義ニ付、是等比例ニハ難相成事」と指令相成候、然るに右之輩一代雇卒といへども、元同列之内拾貳名は舊藩之取扱に因て既に終身祿を下賜り候を及目撃、舊藩處分之不均を嘆き候次第に而、實に愍然之事に有之、又昨九年第百貳拾三號之公布を熟讀致し候に、此公布〇明治六年二月第拾五號ヲ以テ舊藩ニ貫屬祿高引直シ願之義同年三月三十一日限可申出右期限後ハ一切採用不致旨布告候處爾後祿高ニ關シ種々願出候向モ有之候得共本年八月第百八號布告ヲ以テ祿制改定候ニ付總テ現今ノ處置ヲ以テ是れ全く既に相定リ居候祿高を引直之義テ定度トシ如何様ノ事實有之共一切採用不致候條此旨更ニ布告候事願出候者どもに相當リ、右輩之如き御詮議濟に相成候類には不關様被存、且つ名古屋藩卒御處分之義新聞上之如くに候得ば、一代祿之者は平民籍にして終身祿を給ふと相見え、既に右輩に相當り申候得ば、同様御處分相成候義公平至當と被存候、元來右輩之嘆願最前上申之通り去る明治五年より數度に及び候得共、中間に説諭致し候者有之爲め上達不致義に候得ば、前條公布果して右輩に相當候とも、中間説諭致し候者を被罪、右輩之嘆願は御採用被下度義に有之、又前條見込之通り公布、右輩に不關義に候得ば、名古屋縣一代祿之者同様之御處分至當と被存候に付、此邊尙ほ同省へ申立候處、

「上申之趣ハ最前モ及指令候通り客年第百貳拾三號公布有之候上ハ、假令如何様之事實有之トモ一切採用不相成候事。」

但シ本文公布之趣意ハ、全ク既定之祿高ヲ引直候分ノミヲ被差止候義ニ無之、且ツ右公布ニ依リ採用不相成義ハ本人共出願年月ノ遅速ニハ關係無之候、愛知縣卒祿引直之義ハ最前指令之通り右公布前於太政官御處分相濟候モノニ付、此等ハ此例ニハ難相成候事」と御指令相成、不得止願人共へは該旨を以て指令に及び候得共、重ね而熟考候得ば此指令之如くにては必らず御給與可相成筋之者と雖も、客年第百貳拾三號公布後は一切御採用不相成事に相當リ、如此に而は右銃剩卒之如き舊藩吏之處分不均不幸を極め候ものも敢て其冤を謝する處無之道理に而、甚だ不公平之御處置に立到可申候條、何卒此邊御熟察相成、公平之御處分仰度候事。

平民小林萬平嘆願之義ニ付略述

當府下平民小林萬平義舊龜岡藩士ニ候處、御一新後舊藩主ヨリ歸農商之説諭ニ應ジ、去ル明治四年歸商致シ資金貫受之處、既ニ廢藩ノ比ニ際シ、追而 朝廷ヨリ一般之御處分相立可申ニ付、其節ニ無之テハ難被下旨、同藩舊大參事ヨリ達置キ、其後終ニ下ゲ金無之ニ付、同人義度度舊藩取扱之者へ相廻候由之處、兎角ニ申成、今ニ下ゲ金無之段ヲ以テ當三月ニ至リ嘆願書差

出候ニ付、舊藩右取扱之者へ相尋候處、當人申出之通りニ相違無之ニ付、則チ大藏省へ右萬平至當之御詮議被下度段申立候處「伺之趣舊縣中資金ヲ不下渡儀ニ候得者、則チ歸商央之者ニ付先般引戻相成候野口藤平等同様之者ニ相見エ候得共、右ハ客年第一百貳拾三號公布ニ依リ今更採用不相成候條願意難聞届候事」ト指令相成、不得止願人へハ採用難致旨指令致シ置候へドモ、重ネテ熟考候得バ、右輩之如キハ則チ歸農之資本金ヲ不貫受義ニ而、右第百廿三號公布之祿高ニ關シ候モノニ無之候得者、右公布ヲ以テ強ヒテ指令致シ候義甚ダ無謂事ト存候事。

御陵墓之儀ニ付舊教部省へ伺之件々

御指令無之ニ付尙又内務省へ伺之略述

去ル明治七年 御陵墓掌了被差置候ニ付、別紙之件々舊教部省へ伺出、其後度々催促致シ候得共指令無之、内務省御廢止相成ニ付此節内務省へ此義申立候得共、右至急指令無之而者差支之筋不少候事。

御陵墓掌了被差置候ニ付伺

- 一、御歴代之御祭日ハ新曆面へ御揭示有之候處、皇后、皇子方ハ其儀無之ニ付、舊曆之月日ヲ直ニ新曆ニ當テ、假令バ舊曆十二月一日ハ新曆ニテモ十二月一日ヲ用キ候儀ト心得可然候哉、又ハ月日推步之上御取極御達可相成候哉。
- 一、諸山陵御追祭神祭ヲ被爲用候上ハ、皇后、皇子御陵墓迪モ掌了等平生拜禮之式、神拜ト心得可然哉。
- 一、神饌玉串等官費ヲ以テ献備之儀、各御陵之内兩三ヶ所之外ハ式年御祭典之外無之、餘ハ是迄守戸長等私費ヲ以テ神酒洗米等之類献備致シ來リ候由之處、今度掌了被差置鄭重御取扱之姿ニ付テハ、御陵墓共例年御祭日、御祝日等ニハ官費ヲ以テ神饌玉串等献備可相成候哉。
- 一、献燈之儀毎夜點燈又ハ一月一度又ハ一圓點セズ燈籠等モ無之、各御陵墓從前區之仕來リ不體裁之事ニ有之、此際御改正有之度事ニ候、已後如何爲取計可然候哉。
- 一、當管内御陵墓即今掌了差置候内九ヶ所ハ人家隔絶之地ニテ、用具入レ雨舍リ無之テハ差支候場所ニ付、近傍之地ヲ撰ミ相應之建物新規取建テ可然候哉、猶ホ即今未定之御陵墓追々取調掌了差置候内、自然懸隔之場所ハ同様取建可然候哉。

一、前條自然伺之通り可取計節ハ、第三四六條之如キハ費金御省ヨリ御渡シ可有之哉、大藏省ヨリ別途御渡可相成候哉。

右之條々今度御陵墓掌了被差置候ニ付相伺候、何分共早々御指揮有之度候也。

七年十二月十四日

京都府知事 長 谷 信 篤

教部大輔 宍 戸 璣 殿

去ル壬申五月第六十四號ヲ以テ舊幕府之節馬喰町ヲ始メ數種ノ貸附金一切棄捐之旨公布相成候處、右ハ全舊幕府之藏庫ヨリ出候金耳ニ無之、其實ハ人民之自家金ヲ加ヘ右等ノ名ヲ假リ融通致來候次第ニテ、是ヲ一切棄捐被 仰付候テハ、人民之迷惑不尠義ニ付云々、同六月二十五日附ヲ以テ及建言置候處、尙又同年十月第三百號ヲ以テ立縣以前華士族卒ヘ係リタル金穀貸借及ビ一般人民ノ貸借期月後滿五年内ニ不訴出者之裁判ヲ止メラレ、且ツ同月第三百拾七號ヲ以テ平民相互之貸借丁卯以前ニ係ル分ハ一般裁判ニ不及旨公布相成候、右等ハ貧士窮民之所喜ニハ候得共、其恩惠一ニ僥倖ヲ望之惰夫ニ厚クシテ、多年勤勉ヲ積メル所之良民ニ薄キニ似タリ、隨テ貸ス者ハ其失ハンコトヲ恐レ候ヨリ、借ル者モ亦其資金ヲ差間目前之便利ヲ失シ、遂

ニ金融ノ道ヲ塞ギ候次第ニ立到候義ニ付、同年十一月九日附及ビ十二日附ヲ以テ下民之情狀詳細及建言置候得共、其後何之御沙汰モ無之候事。

但シ建言書、別紙三通相添候也。

第六十四號公布之義ニ付建言

舊幕府之節馬喰町或ハ町年寄役所ヲ始メ、大阪銅座及ビ各地方奉行所又ハ代官料等ニ於テ、舊諸藩ヲ始メ士民ヘ融通之爲ニ貸付置候金銀米並ニ日光、上野府庫金、諸料物金年番金、宿場金等之類御詮議之次第有之、自今一切棄捐被仰付候旨、五月廿二日御沙汰之趣拜承致候、右貸付金件々之義ハ全ク舊幕府之藏庫ヨリ差出候金銀ノミニ候哉、或ハ其實人民共ヘ右等之名ヲ假シ融通爲致來候名目金ト稱スルモノニ候哉、其邊分解致兼候得共、全ク舊幕府之出金ノミニシテ人民加入無之義ニ候ハ、棄捐被 仰付可然候得共、其實名目金之義ニ候ハ、當今一切棄捐之御沙汰ハ人民之難義ニ相成、隨テ種々之弊害ヲ生ズベキト考候ニ付、見込之次第及建言候、右名目金ト稱スルモノ大概幕府之下ケ金ハ十ノ一ニシテ、實ハ人民自家ノ金銀ヲ以テ是ニ加ヘ、其姿ニ立テ融通致來候事、其時之官ヨリ所許ナリ、然レバ幕金百萬兩之棄捐ハ其實人民八九百

萬兩之不足ニ可相成、是ヲ一切棄捐被 仰付候ハ、銀主ハ頼ム處ヲ失シテ自得之色アラン、凡ソ人民各自主之心アリ、今日ノ事ヲ評スルニ至テ云カテ盡シ産ヲ營ムハ益ナシ、寧ロ如此之發令ヲ僥倖セント、遂ニ人々勉強之心ナク、貸ス者ハ失ハン事ヲ恐レテ融通之路ヲ絶チ、借ル者ハ只等閑ニシテ歲月ヲ遷スヲ以テ上策ト心得、誓言ヲ忘レ證書ニ背クヲ憚ラザルニ至ラバ、地方ニ官タルモノ何ヲ以テ是ヲ維持スベキヤ、元來名目金ナルモノ其始メ決シテ虚法ニ非ラズ、時ニ大ニ融通之利ヲ得タル者多シ、雖然因襲之久シキ儘其弊ヲ生ジ、終ニ怨嗟之聲ヲ聞クニ至ルモ自ラ風俗之下流スル故ニシテ、其罪ヲ問ヘバ畢竟其時之吏ニ在リ、下民ハ唯ダ不知不識其令ニ隨ヒ來候義ニ候ヘバ、假令舊幕之弊ヲ矯ムル御主意ナリ共、深ク下情ヲ御憫察有之、希クハ無辜之民ニ困苦ヲ受ケシメズ、無頼之民ニ僥倖之心ヲ起サシメズ、財貨流通壅滯無之様致度ニ付、不憚忌諱及建言候、早々御沙汰所望候也。

壬申六月廿五日

京 都 府

正 院 御 中

第三百號及第三百十七號公布之義ニ付建言

嘗テ窃ニ謂ラク、勤勉ヲ勸メ僥倖ヲ抑ユルハ政ヲ爲ス者ノ常ニ注意スベキ所ニシテ、曾テ惰夫ニ厚フシテ良民ニ薄フスルノ理アルコトナシト。情ヲ頃來之 御布令ヲ考フルニ、五月廿二日舊幕府之節數種之貸付金ヲ棄捐セラレ候ニ就テハ、官金之名目ヲ借テ人民自己之金ヲ貸付候モノ(所謂名目金ノ類或ハ官金徵收ノ時甲乙ノ豪商、丙丁戊己ハ融通成遣置候官金丙丁戊己一)是ガ爲ニ收入之道ヲ失ヒ候ヲ始メ、十月七日立縣已前華士族卒ヘ掛リタル金穀貸借及ビ一般人民之貸借期月後滿五年内ニ不訴出者之裁判ヲ止メラレ、同二十二日丁卯已前平民相互貸借之裁判ヲ止メラレ候義、舊幕府執政中所謂德政ナル者ニ類シテ、貧士窮民之所喜ニ候得共、其恩惠一ニ僥倖ヲ望ムノ情夫ニ厚クシテ勤勉ヲ積メル所之良民ニ薄キニ似タリ、恐クハ下民疑忌ヲ保護愛養之御盛意ニ容ル事アランカ、當六月モ別紙及建言候通り徒ニ借主ヲシテ僥倖苟免之思ヒヲ生ジ、勉強謀償之念ヲ斷タシメ、銀主ニハ左券ヲ把テ逋債ヲ責ムルコト能ハザラシメ、一時不慮之耗損ヲ蒙ラシムル耳ナラズ、大ニ畏怯之心ヲ動シ、嚮來貸付ヲ不好ニ至テハ、財本ヲ求メテ以テ物産ヲ起サント欲スル者モ、其財本ヲ借ルニ路ナク、資斧ヲ得テ以テ藝術ヲ學バント欲スル者モ、其資斧

新政施行ニ付上申

三七五

ヲ取ルニ由ナク、以テ工職ヲ勵マントスル者、以テ貿易ヲ増サントスル者、皆其本資ニ差支候時ハ、獨リ富家豪商金穀融通之路ヲ絶ツヲ憂フルノミナラズ、有志之小民モ亦財本資金之助ヲ失フニ苦ム可シ、獨リ人民各自目前之便利ヲ失フノミナラズ、隨テ物産興ラズ、人材育セズ、工職貿易俱ニ衰廢ニ歸シ、終ニ國家永年之疲弊ヲ釀成スルニ至ランカ、是レ其濫觴僅ニ人民之信ヲ棄テ約ヲ破ブル事ヲ問ハザルニ出ヅト被相考、親シク地方ニ在テ下民ノ情實ヲ視察シ、遠ク將來ヲ慮リテ百事之弊害ヲ危懼スルニ堪ヘズ、不憚忌諱及建言候條、可然御詮議被爲遂度所懇祈候也。

壬申十一月九日

京都府知參事

正院御中

己巳及ビ丁卯已前金穀貸借之訴訟不被及裁判旨御布告之儀ニ付而者、過日及建言置候通りニ有之候處、今朝甚ダ可懼之風説ヲ承リ候ニ付、別紙ニ書取差出申候、先年惡金貳分判價位御定之節モ既ニ右様之奸計ヲ以テ外國人へ相賴候事々々有之候哉ニ風聞有之候間、此節迪モ油斷不相成、右者不容易事件ニ而萬一此詐術ヲ襲候者有之候ヘバ、御國之御損耗莫大之義、殊ニ御國

體ニモ關係シ、不一方御手數ト致苦慮候、就而者右之趣キ開港場之官廳ニ而深ク注意取締致候様御布達ニモ可相成義歟ト相考申候、無御踈義ニ者可有之候得共、杞憂之餘リ聞取之儘不取敢言上仕候、宜敷御評議所希候也。

壬申十一月十二日

京都府知參事

正院御中

此度舊債御裁斷ヲ被止ニ付可憂概コトアリ、其談ヲ設クルコト左ノ如シ。

一ノ豪商アリ愀然ト嘆ジテ曰ク、僕ガ家祖先以來勤儉以テ法トシ、勞ヲ累ネ苦ヲ積ミテ始メテ數萬金ヲ蓄ヘタリ、然ルヲ融通ノ爲ナレバ之ヲ以テ華族之家ニ用達シ、或ハ以テ産業工職ヲ勤ムル者ニ貸與ヘテ財本ト爲サシメ、何レモ利子ヲ廉ニシテ只ダ其長ク約ノ變ゼザランコトヲ是レ期シタリシニ、豈圖ランヤ、此節華士族卒ヘ掛リタル金穀貸借、已六月以前ノ分並ニ平民相互ノ貸借モ卯ノ十二月以前ノ分ハ裁判ニ及バザル旨御布令ニナリシニ依テ、嚮ニ貸付置キタル金ヲ催促スレ共、皆此御布告ニ腰ヲ掛ケテ一錢モ返ス者ナク、之ヲ訴ヘンニモ所無ク、昊天ニ號泣スルノ外ナシ、是レ雷ニ吾身一人ノ憂ヒナラズ、祖先累世ノ辛勤モ亦水上ノ漚トナリ、

又安ンゾ此金ヲ取返シ得ル所アラン、時ニ一人アリ、之ヲ慰メテ曰ク、君サマデ憂ヒ玉フナ、我其金ヲ取り得ルノ法ヲ授ケン、君速ニ互市場ニ赴キ、然ルベキ外國人ト狎レ合ヒ、君ノ手ニ在ル所ノ證券ヲ以テ悉ク外國人ニ付シ、之ヲ引宛トシテ數萬ノ外國金ヲ借りタル體ニ致シ、其借リタル年月ヲ昨年若クハ一昨年トシ、返濟ノ期限ヲバ此春或ハ此秋トシ、君窮シテ償フ能ハズ、其證券ハ既ニ外國人ノ所有トナリタル手數ヲ調ノヘサセ、外國人ヲシテ其證券ヲ以テ出訴サスベシ、然ルトキハ必ラズ其金子ヲ追々取返シ得ルコトアルベシ。云々

去ル辛未四月第八十八號ヲ以テ何品ニヨラズ新發明致シ候者ハ、專賣御差許可相成御規則公布相成、其後壬申三月第百五號ヲ以テ新發明品專賣免許之儀御詮議之次第有之當分被廢候、尙ホ御取調之上追テ被仰出候品モ可有之旨布相成候處、右專賣之儀ハ職工獎勵方不可缺之美舉ニ付譬へ免許難相成儀ニ候ハ、製造人へ一時相應之御賞典被行度旨、別紙之通り伺出候儘御指令無之候事。

新發明之器械製造之者へ賞典之儀伺

新發明ノ器械製造之者へ專賣之利被與之旨一旦御布告、無間御廢止ニ相成候處、右ハ職業勸誘、物産興隆ニ不可缺事ニテ、日夜心思ヲ凝シ折角諸人便用ニ供スルノ器ヲ發明シ、世益ヲ興スノ物ヲ製造スルモ一見他人ニ模造セラレ、數年數月ノ苦心工夫モ空敷相成、度々ノ改造試驗費用ヲモ償フ事能ハズ、困窮ニ及ブ者モ有之、將又總テ右様詮ナキ事ヲ知り、新製工夫ノ志氣ヲ挫キ、可興ノ物産ニモ心ヲ不用、可聞ノ器械ニモ工夫ヲ不凝様成行、推テハ莫大ノ御國損ト奉愚考候間、更ニ御評議有之度所希望候、其内管内ニテ新發明之器ヲ製出シ、或ハ外國ヨリ舶來ノ品未ダ御國ニテ製造ノ道開ケザルヲ初メテ模製シ、又ハ有益之物産ヲ初メテ檢出等致シ候者ハ、取調一時之御賞典伺出候ハ、御詮議之上御賞典被行候儀仕度候、當府下ハ職業引立、物産興隆肝要之地ニ付、右等之者へハ聊カタリトモ賞表之驗相立候ハ、一統之勵ミニモ可相成候條此段一應相伺候、御指揮ニ依リ管内へ勸誘告諭之都合モ有之候間早々御評決被下度候也。

明治六年二月七日

京都府知參事

大藏大輔 井上馨 殿

堤防修繕之儀ハ雷ニ田圃之破潰、家屋之流失ヲ防グ爲ノミナラズ、實ニ人民ノ身命ニ關ス、

新政施行ニ付上申

三七九

當府曩ニ破損所修繕之儀ニ付入費豫算ヲ以テ伺書差出、未ダ御指令ヲ不得之際、已ニ春雨正ニ降ラントスル時ニ當ルヲ以テ速ニ着手センコトヲ乞フニ、其御指令ニ云ク『先般上申ニ對シ及指令候迄ハ着手不相成』ト、嗟呼恐ル可キ哉、晴雨豫メ期ス可カラズ、天災豈御指令ヲ待ツベケンヤ、堤腹ノ土砂ハ一水毎ニ其減損ヲ成シ、蟻穴ノ破レモ一漲ニ隨テ其害ヲ増ス、況ンヤ昨年ノ水害ニ半堤已ニ崩レ、水勿或ハ流失セルモノヲヤ、春漲漾々霖雨方ニ來ラントス、昨年上流ノ堤防破裂シ、祖先傳承之田圃已ニ沙漠ニ變ジ、乃父結構ノ家屋半バ流レテ老母之ニ死ス、今年若シ水アラバ此 兒ヲ如何セン、纔カニ存在セル田圃、假令地形ハ變換セズトモ麥穗秧苗流失セバ、何ヲ以テ租稅ノ金ヲ收納セント、眼前ノ民憂看過ニ忍ビズ、地方官ノ肺肝摧クル如シ、然ルニ漸クニシテ一行ノ指令ヲ得レバ、皆官費修繕ノ場合ハ人夫賃壹人拾貳錢五厘手當、普請ハ壹人六錢ニセヨト、目今人夫ヲ使役スル豈拾貳錢、六錢ニテ事ニ堪フル者アラシヤ、曾テ是ヲ土木局官員ニ議スレバ、曰ク、國費多端故ニ費用ヲ減ズト、嗟呼國費之内如此コト可減ノ理アラシヤ、可減ハ他ニ多々不急無用ノ辨アラン、希クハ前顯下情御賢察、民苦豫防ノ御良策アランコトヲ、依テ上申書御指令等ノ寫ヲ添へ電覽ニ供ス。

洪水ニ依リ破堤修繕費別途御渡之儀ニ付上申

當府下諸河昨九年九月十七日ノ洪水ニ因テ堤塘其外破損之次第翌十八日付ヲ以テ不取敢御届申入置候後、右修繕費用悉ク實地ニ就キ爲取調候處、從前管轄山城全國丹波國三郡ニ於テ堤塘道路橋梁等之破損都合千五百四ヶ所、此費用凡ソ金六萬五千圓餘ニ相成候、然ルニ當府下土木費ハ先年金額被定候節、非常天災費ヲ省キ上申有之候上、尙ホ又八年九月大ニ被減、當時費額金貳萬五千六百九拾五圓ニシテ、此内凡ソ三分之壹ハ昨九年七月以來定式修繕之費用ニ遣ヒ果シ、當時殘金纔カニ付此金員ヲ以テ昨年之天災費ハ最難取賄、加之前伸之通り非常天災費ハ素ヨリ一周歲經費算外ニ付、前顯天災費金六萬五千圓餘、八年七月三十一日付御指令之通り別途御下ゲ渡相成度此段相伺候也。

明治十年二月十五日

京都府知事 榎 村 正 直

内務卿 大久保利通殿

追而丹後全國丹波國天田郡之分ハ、當時詮議中ニ付追而上申候也。

新政施行ニ付上申

書面之趣方今國費多端之折柄ニ候得共、申立金高之内皆官費ニ屬スル分ハ金貳萬五千五百六圓分通、手當ニ屬スル分者金六千八百七拾五圓、都合金參萬貳千參百八拾壹圓別途可下渡候條人夫賃之儀者總テ壹人恰貳錢五厘ニ相心得、右額ヲ以テ目的トシ、工事可取計、尤モ淀川流域ニ係ハル工事者同川出張在阪土木局官員之檢査ヲ受ケ施行可致候事。

但シ園部川之儀者皆官費之申出ニ候得共、右者從來村役モ有之儀ニ付、取調替本文金額之外更ニ可申出其他川々目論見之内、杭打夫掛等過當之廉モ有之候間、右等者更ニ相當夫掛ニ改メ候儀ト可相心得事。

明治十年五月十四日

內務卿大久保利通代理

內務少輔 前 島 密

書面之趣先般上申ニ對シ及指令候迄者着手不相成儀與可相心得事。

明治十年五月十日

內務卿大久保利通代理

內務少輔 前 島 密

昨九年九月洪水ニテ破壞相成候場所修繕
着手之儀ニ付上申

當府下山城全國及ビ丹波桑田、船井、何鹿三郡諸河客年九月洪水ニヨリ堤防、橋梁、樋堰等二月十五日付ヲ以テ委曲上申候處、同月廿六日付ヲ以テ詳細目論見帖可差出旨土木局ヨリ照會ニ付許多之手數ヲ經、漸ク本日悉ク整頓濟ミ同局江遞送致シ候、然ルニ追日降雨之期ニ向ヒ不日早苗栽付之秋ニ迫リ候ニ破堤類樋等之儘ニ而者、村民ニ於テ遲□怕々實ニ難捨置、且ツ一朝出水之節者田疇家屋之損害者勿論、其修築費客年ニ層倍可致存候條、前狀遞送之目論見帖土木局ニ於而猶ホ調査之後御指令ニモ相成候ナレバ、幾許之時日可相費乎、因テ現業者御指令ヲ不待、即今着手爲致候條、事情御洞察之上御聞置相成度此段上申候也。

明治十年五月四日

京都府知事 榎 村 正直

內務卿大久保利通代理

內務少輔 前 島 密 殿

新政施行ニ付上申

急破修繕費別途御下渡之儀ニ付再申

當府下川々昨九年九月洪水之節破壞相成候ヶ所修繕費別途御下渡之義、本年二月十五日付ヲ以テ相伺候處、五月十四日付ヲ以テ皆官費ニ屬スル分ハ金貳萬五千五百六圓分通り、手當ニ屬スル分ハ金六千八百七拾五圓別途可下渡候條、人夫賃之義ハ總テ壹人拾貳錢五厘ニ相心得、淀川流域ニ係ル工事ハ在阪土木局官員之檢査ヲ受ケ可致施行、且ツ園部川之義ハ從來村役モ有之義ニ付取調替更ニ可申出、其他川々目論見之内杭打夫掛等過當之廉モ有之旨、巨細御指令之趣致承知候、依之皆官費ニ屬スルヶ所土木局官員之檢査ヲ受ケ目下難差置分而已精々御入費之不相嵩様取調候處、別紙一村限帳之通り人夫賃之義ハ普通之賃金壹人拾八錢ニ致シ金參萬八千參百四拾四圓七錢五厘ニ相成申候。

但シ人夫賃之義ハ壹人拾貳錢五厘ニ可相心得旨御指令ニ候得共、右等ノ工事ニ使役スル人夫如斯賃錢ニテ終日相働キ候者府下ニハ壹人モ無之、又右之賃錢ニ引直ス時ハ人夫之數ヲ増加スル譯ニテ、結局畫餅之手數ニ屬スル義ニ付普通之賃錢ニ爲取調置候。

一、園部川之義ハ官普請處ト分通手當之場處ト兩様有之、舊園部縣官員ヨリ差出候證書ト兼而實地照合候處、區分判然致居候義ニ付則チ土木局官員之檢査ヲ受候處、何レモ難差置場處ニ付更ニ別冊之通り爲取調候處、金四百九拾圓四拾六錢九厘ニ相成候、仍而證書寫並ニ圖面相添差出候。

一、鳥羽街道往還切處並ニ東高瀬川堤防切所修繕費合金九百七拾六圓參拾參錢之分土木局官員ハ實地檢査之御通知無之趣ニ候得共、到底官費之場處ニ付是又檢査ヲ受候處、素ヨリ難差置場所ニ候間、先ニ伺出置候通り前顯之金員御下渡有之度候。

一、分通手當普請處之義目論見金高之三分一金壹萬參千貳百參拾四圓八拾八錢四厘之處へ、金六千八百七拾五圓御下渡相成候義ハ何等之御見込ニテ斯御減相成候事哉一向了解難致、右普請之義ハ多クハ農惡水路井堰樋類等之破壞處ニテ、之ヲ修繕セザレバ本年之田方植付ニ差支、上ハ租稅之收ラザルハ勿論、下ハ人民餓死スルノ外無之、又破壞處ヲ修繕シ植付之差支無之様ニ爲致、彼ノ六千八百圓餘之金ヲ分配スル時ハ費用之壹分五厘強ニ當リ、左スレバ名義ハ三分之一之手當普請處ニテ實ハ壹分五厘之手當ニ相成、所謂有名無實ニシテ官ヨリ人民へ信義ヲ失スル義ニ付、先ニ伺出置候通り金壹萬三千貳百參拾四圓餘之分御下渡相成度候。

右四點之普請處普通之賃金ヲ以テ取調候、合計金五萬參千四拾五圓七拾五錢八厘ニ相成申候、

抑モ當府下官普請處之義ハ先年之弊習ヲ一洗シ、戊辰以來皆官費之名義ニ基キ入札或ハ相當代價ヲ下ゲ渡シ現入費ヲ以テ仕拂居候義ニ付、今日ニ至リテハ則チ從前之仕來ニ候間、人夫賃之義ハ普通之賃錢ニ見積リ置キ不申而ハ工事落成不致、乍併強テ人夫賃ヲ壹人拾貳錢五厘ニ改ムレバ人夫掛ヲ増シ、譬ヘバ百人ニテ成功可致工事モ百五拾人ト可見積譯ニテ、入費之總計ニ至ツテハ差違無之、書面上ト現業トハ大ニ齟齬シ今日之形勢ニ有間敷事ニ候、且ツ杭打夫掛之義ハ土地之堅柔等杭木ノ太ト細ッ根入之多少ニ因リ、人夫掛モ又増減可有之モノニテ、机上ノ論ト現業施ス處トハ大ニ異ナリ、先年土木司ヨリ被差廻候割合ニ而ハ現場不相行候間、夫々實地研究目論見爲致候義ニ有之候、若シ御指令之如ク實地不相行人夫掛ヲ用ヒ賃金ハ壹人拾貳錢五厘之積リヲ以テ村方ヘ申付三分一之手當モ一分五厘ヲ渡シ如斯苛酷ニ亘ル時者人民ニ於テモ不得止之勢ニ出デ萬一暴舉之節シ有之候共、常ニ官民之間ニ信義ヲ失シ置キ其際ニ莅ミ百方之說諭ヲ加フルモ更ニ其甲斐無之故、右等之義者可恐々々地方之大ニ憂フル處當節柄尤モ注意ス可キハ此事ニ候、殊ニ昨九年太政官第五拾九號御布告モ有之候間、旁々下情能々御洞察之上從前之仕來ニ倣ヒ、前顯之合金五萬參千四拾五圓七拾五錢八厘速ニ別途御下ゲ渡シ有之度此段上申候也。

十年六月十四日

京都府知事 榎 村 正直

內務卿大久保利通殿代理

內務少輔 前 島 密 殿

洪水ニ依リ破堤修繕費別途御下渡之儀ニ付上申

當府新轄丹後全國並ニ丹波國天田郡諸川ニ昨九年九月十七日之洪水ニ因テ堤塘其他破壊之次第同月廿三日附ヲ以テ豫メ御届申入置候後、右修繕費用官員實地ヘ差出悉ク爲取調候處、破壊處都合千貳百參拾九ヶ所ニシテ、此官費凡ソ金六千四百七拾九圓ニ相成候、然ルニ右新轄土木費之儀者金四千六百八拾八圓之處、舊豐岡縣設立中當九年度分之内金壹千參百四拾四圓ヲ一昨八年度ニ繰上ゲ於同縣既ニ遣ヒ果シ、當時殘金貳千參百四拾四圓之外無之ニ付、本年定式修繕モ充分難行届、況ンヤ洪水費ハ多分之金額ニシテ迤モ難取賄而已ナラズ、非常天災費之事故旁前件洪水費ハ別途ニ御下渡シ相成度、則チ別冊目論見帳並ニ一村限リ金高帳共都合貳拾貳冊相添此段相伺候也。

新政施行ニ付上申

三八七